山口県埋蔵文化財センター調査報告　第21集

東禅寺（とうぜんじ）・黒山（くろやま）遺跡Ⅴ

— 平成11年度南若川一般河川改修・２級工事に伴う発掘調査報告 —

２０００

財団法人山口県教育財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、山口県山口土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した南若川一般河川改修・２級工事に伴う東禅寺・黒山遺跡５年次の発掘調査記録です。

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解する上で、大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀に向けて活力と潤いに満ちた社会を創造をするために欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今、私たちに与えられた課題であるといえます。

遺跡の保護については、埋蔵文化財保護の立場から基本的には現状保存が望ましいものでありますが、やむを得ず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

このたびも、南若川一般河川改修・２級工事に先立ち関係諸機関と協議・調整を重ねて参りましたが、当工事によって失われる範囲について発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、平安時代から中世にかけての集落跡が発見されました。特に、数多くの土器が廃棄された土坑や木製品等が検出された井戸などは注目されます。また、鞴羽口、坩堝、緑釉陶器片が出土したことは、近接する周防鋳銭司跡との関連も考えられます。これらの資料は当時の人々のくらしを考える上できわめて貴重で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書はその調査成果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

おわりに、調査の実施にあたって御協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

財団法人 山口県教育財団

理事長　牛見　正彦

例　言

1　本書は、平成11年度に実施した、東禅寺・黒山遺跡（山口県山口市大字鋳銭司字大円）の発掘調査報告書である。

2　調査は、南若川一般河川改修・２級工事に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受けて実施したものである。

3　調査組織は次の通りである。

調査主体　財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　指導主事　西田　宏

指導主事　村崎賢一

4　調査に当たっては、山口県教育委員会、山口県山口土木建築事務所、山口市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5　本書の第１図は、国土地理院発行５万分の１地形図「小郡」を複製使用、第２図は山口県山口土木建築事務所提供のものである。

6　出土遺物のうち石製品の石材鑑定は、山口県立山口博物館専門学芸員　亀谷　敦　氏に依頼した。なお石材鑑定は表面観察によるものである。また、木簡の判読について山口芸術短期大学助教授 田中倫子 氏の御教示を得た。

7　本書に使用した方位は、国土座標（第３座標系）の北で示し、標高は海抜標高で表した。

8　本書に使用した土色の色調の表記は、農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell 方式に従った。

9　図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10　土器実測図の断面は、白抜きが土師器・瓦質土器・陶磁器、黒塗りが須恵器を表す。また、内面の濃い網掛けは黒色土器、内外面の薄い網掛けは緑釉陶器を表す。

11　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＢ：建物　ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴　ＳＥ：井戸　ＳＤ：溝状遺構　ＳＴ：埋葬遺構

ＳＸ：不明遺構

12　本書の作成・執筆は、西田・村崎が分担作成し、西田が編集した。

目　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の経緯と概要……3
Ⅲ　遺　　構……9
（1）掘立柱建物
（2）土坑
（3）井戸
（4）埋葬遺構・炉
（5）溝
Ⅳ　遺　　物……27
Ⅴ　ま と め……38

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第2図　調査区設定図……4
第3図　遺構配置図……5・6
第4図　掘立柱建物配置図……7・8
第5図　ＳＢ52・16実測図……9
第6図　ＳＢ８・51・55実測図……10
第7図　ＳＢ40・53実測図……11
第8図　ＳＢ13・56実測図……12
第9図　ＳＢ50実測図……13
第10図　ＳＢ45実測図……14
第11図　ＳＫ22・24・32・33実測図……17
第12図　ＳＫ27・30実測図……18
第13図　ＳＫ34・36実測図……19
第14図　ＳＫ２・４・９実測図……20
第15図　ＳＥ１・２実測図……22
第16図　ＳＥ３・４実測図……23
第17図　ＳＥ５・６実測図……24
第18図　ＳＥ７実測図……25
第19図　ＳＴ１実測図……25
第20図　ＳＸ１実測図……26
第21図　ＳＤ９・10実測図……26
第22図　土坑出土土器実測図①……28
第23図　土坑出土土器実測図②……29
第24図　土坑出土土器実測図③……29
第25図　井戸出土土器実測図①……29
第26図　井戸出土土器実測図②……30
第27図　井戸出土土器実測図③……31
第28図　井戸出土土器実測図④……32
第29図　溝出土土器実測図……33
第30図　柱穴出土土器実測図……34
第31図　土製品・鋳造関連遺物実測図……34
第32図　木製品実測図①……35
第33図　木製品実測図②……35
第34図　金属製品実測図……36
第35図　石製品実測図……37

図　版　目　次

図版１　東から東禅寺・黒山遺跡を望む　調査区全景
図版２　調査区南西側土坑群　調査区北東側井戸群
図版３　ＳＢ45　ＳＫ34出土状況①
図版４　ＳＫ34・27出土状況　ＳＫ34・27完掘
図版５　ＳＫ30土層断面・完掘　ＳＫ４出土状況・完掘
図版６　ＳＫ24・32・33・36出土状況・完掘
図版７　ＳＫ22出土状況・完掘　ＳＫ９出土状況①・②　ＳＫ９・ＳＴ１完掘　ＳＤ６・10出土状況
図版８　ＳＥ１・２・３・４・５・６・７完掘　ＳＥ３出土状況
図版９　ＳＸ１断面・完掘　ＳＰ37・ＳＢ16(SP84)・ＳＢ45(SP80)・ＳＢ51(SP228)・ＳＢ52(ＳＰ539)
ＳＢ56（ＳＰ533）出土状況
図版10　ＳＫ22・24・27・30・32・34出土土器①
図版11　ＳＫ22・24・27・30・32・34　出土土器②　ＳＫ３・４・９出土土器　ＳＥ１出土土器①
図版12　ＳＥ１出土土器②　ＳＥ２・３・４・５・６・７出土土器①
図版13　ＳＥ２・３・４・５・６・７出土土器②
図版14　ＳＥ２・３・４・５・６・７出土土器③　ＳＤ２・８・９・10・11出土土器①
図版15　ＳＤ２・８・９・10・11出土土器②　柱穴出土土器①
図版16　柱穴出土土器②　ＳＫ27・33・36　ＳＥ５出土土製品
図版17　ＳＫ27出土土製品　ＳＥ２・３・４・５・７出土木製品
図版18　ＳＫ２・４・21・32 ＳＥ１　ＳＤ５・６　ＳＴ１出土金属製品　ＳＫ32 ＳＥ４・５・６・７
ＳＤ５ 柱穴出土石製品

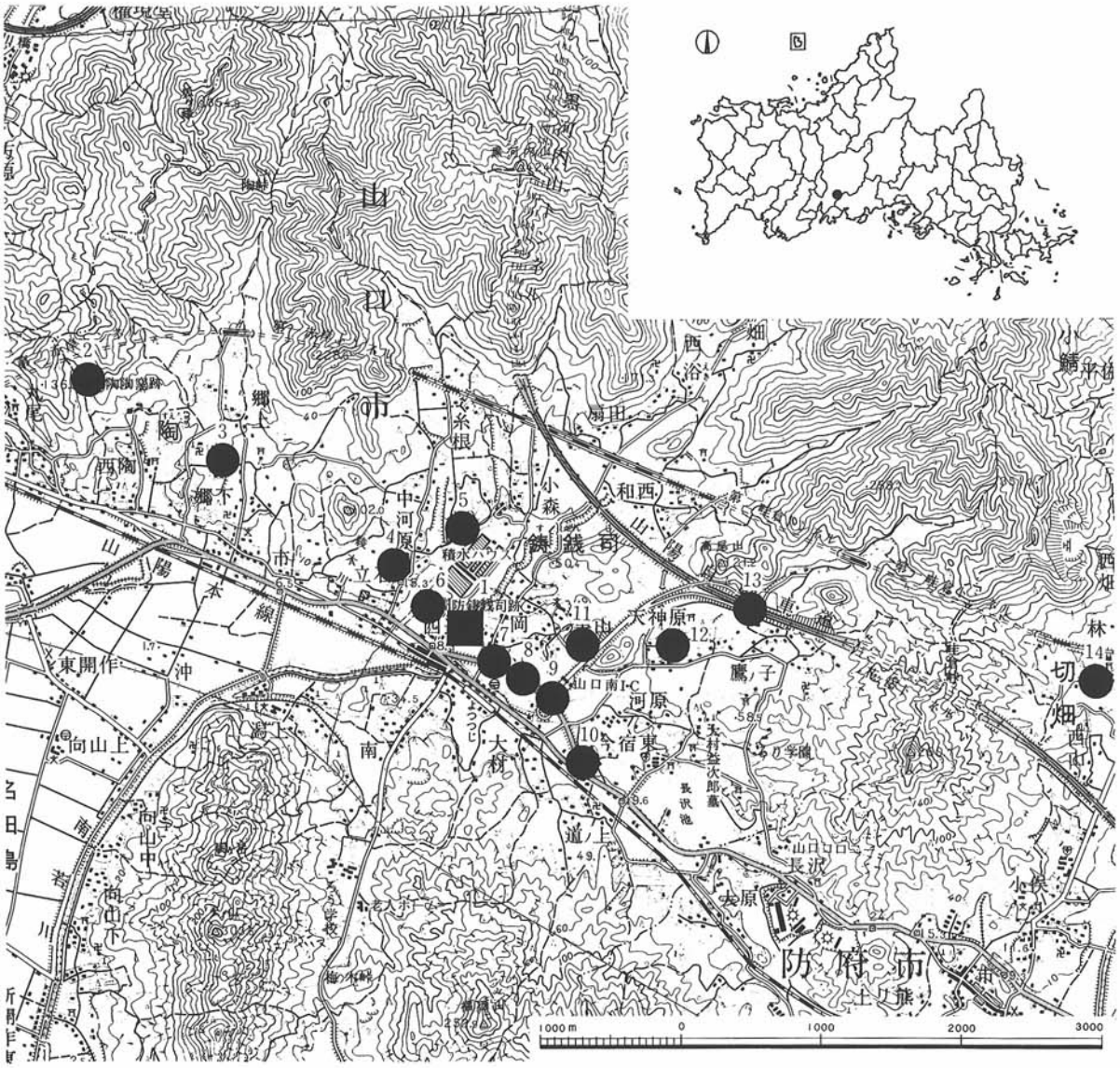
表　目　次

第１表　掘立柱建物一覧表①……15　第２表　掘立柱建物一覧表②……16
第３表　土坑一覧表……21

Ⅰ　遺跡の位置と環境

東禅寺・黒山遺跡は、山口市大字鋳銭司字大円に所在する。鋳銭司地区は、山口市の中心部から南へ約11km、吉南平野の北東部に位置する。遺跡の南には、国道２号・山陽本線が走り、北側山麓を山陽新幹線・山陽自動車道が東西に貫いている。現在は、国道２号（四辻バイパス）の高架化事業が急ピッチで進められている。静かな郊外の田園地帯であったこの地域も交通網の整備にあわせ、工業団地や住宅団地が立地するなど開発が進んでいる。

北は黒河内山（424.4ｍ）を最高峰とする標高200～400ｍの山口山地があり、平川地区や大内地区に隣接している。南は標高200～300ｍの秋穂山地、東は谷中分水嶺を境に防府市大道地区と接する。山口山地の山麓には小丘陵が幾筋も延び、それらが形成する谷に沿って３本の小河川が南西方向に走っている。東から高橋川、金毛川、綾木川と呼び、これら河川が山麓全面より南方向に扇状地を形成しつつ南流する。３河川は合流しつつ南若川となって山口湾に注いでいる。



１．東禅寺・黒山遺跡　２．陶窯跡　３．司家跡　４．春日神社　５．下糸根遺跡
６．周防鋳銭司跡　７．上辻遺跡　８．鋳銭司大歳遺跡　９．今宿西遺跡　10．今宿東遺跡
11．顕孝院　12．天神原遺跡　13．弥市原遺跡　14．切畑南遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

本遺跡は、金毛川、高橋川が形成した扇状地（砂・礫・粘土からなる）の扇端部に立地し、標高８ｍ前後で、金毛川、高橋川の合流地点は遺跡の約100ｍ南方である。また、古代･中世においては海岸線が標高６～７ｍ地点であったと考えられ、遺跡が存在した当時の景観は現在と大きく異なり、海岸に面した遺跡であったことが推定される。

東禅寺・黒山遺跡は、古代から中世を中心とした集落跡である。古代の鋳銭司地区は八千代郷と呼ばれ、山陽道の宿駅として栄えた交通の要衝であった。山陽道は、現在の国道２号線あたりを通り、大村（四辻）付近に官駅である八千駅が置かれていたとされる。中世には、大内氏の城下町山口の外港秋穂港へと通じる秋穂街道と山陽道が本遺跡の南側、四辻で交差した。大内氏の拠点山口をひかえ、室町・戦国期において瀬戸内海の貿易港として知られ、勘合船が出入りして海外貿易港の性格ももっていた深溝も近くに位置している。このように、中世においても鋳銭司地区は交通の要衝としての地の利を占めてきた。また、1470年代に大内政弘によって創建された寺院、顕孝院が近くに所在している。この寺院は、天明元年（1781年）本遺跡のある鋳銭司大円から現在の地、鋳銭司黒山地区に移ったと伝えられる。

東禅寺・黒山遺跡の西方には、国指定史跡陶窯跡、周防鋳銭司跡がある。陶窯跡は須恵器生産のため陶地区向田の丘陵南斜面に造られたものである。周防鋳銭司跡は、金毛川を挟んで本遺跡の対岸にあり、平安時代に皇朝十二銭を鋳造した官営工房跡であり、昭和41年発掘調査によって工房・炉・井戸等の遺構、鞴羽口・坩堝・銅銭・緑釉陶器等の遺物が検出されている。これまでの本遺跡の発掘調査においても、緑釉陶器・三叉トチン・坩堝・鞴羽口などの遺物が出土しており、東禅寺・黒山遺跡と周防鋳銭司跡との関連性をうかがわせるものである。

周防鋳銭司跡の北西側の丘陵上には、延暦４年（785年）創建したと伝えられる春日神社がある。さらに、本遺跡より北東約600ｍの地点には、鋳造に関係のある黒山神を祀る神社黒山八幡宮が鎮座している。遺跡の所在する大円地区を含めて周辺地区一帯として、鋳銭司域を構成していたことを示唆しているようである。

近年、本遺跡の周辺では、遺跡の発掘調査が進められ、鋳銭司地区の遺構の広がりが明らかになりつつある。本遺跡の東側に位置する上辻遺跡、鋳銭司大歳遺跡、今宿西遺跡、今宿東遺跡では、中世を中心とした集落跡が確認されている。鋳銭司地区の集落は、平安から室町へと時代が下がるに連れて、西から東へ、低地から微高地へと移動し、急速に耕地拡大が計られる近世初頭に急速に衰退することが明らかになってきている。また弥市原遺跡、東禅寺遺跡等の発掘調査によって、中世の集落が山麓の緩斜面や微高地にも営まれていたことが確認されている。今後さらに鋳銭司地区の集落の広がりの時期的な変遷をたどる中で、本遺跡の性格を追究していく必要もあろう。

〈参考文献〉

山口県教育委員会　「弥市原・東禅寺」1982年
山口県教育委員会　「上辻・鋳銭司大歳・今宿西」1984年
山口県教育委員会　「今宿東遺跡」1986年
山口県教育委員会　「歴史の道報告書・山陽道」1983年
山口県教育委員会　「山口県百科事典」1982年

II　調査の経緯と概要

東禅寺・黒山遺跡の位置する鋳銭司地区は、北から金毛川、東から高橋川が流れてきて、南若川に合流する地点にある。この地域は、７～８ｍと標高が低いため、度々大雨による洪水に見舞われてきた。そこで、県はこの水害に対処するため、調整池を建設する南若川一般河川改修・２級工事事業を計画した。

鋳銭司地区には、国指定史跡「周防鋳銭司跡」を始め、多くの遺跡が確認されており、調整池建設予定区域には遺跡の埋存する可能性が予想された。そこで、山口県山口土木建築事務所から調査依頼を受けた山口県教育委員会は、平成６年に計画地区内の予備調査を行った。その結果、土坑や柱穴などの遺構や、土師器・磁器などの遺物が検出されたため事前の発掘調査を実施することとなった。対象面積が 18,000㎡と広大なため継続調査とし、財団法人山口県教育財団が山口県山口土木建築事務所から受託し実施することとなった。

調査初年である平成７年度は、工事区域北東部を調査対象地とし、発掘調査を実施した。調査面積は約 3,500㎡で、平安時代から近世にかけての集落跡が確認された。８年度（２年次）は、工事区域の中央部、面積約 2,000㎡を発掘調査し、平安時代から中世にかけての集落跡を確認した。９年度（３年次）は、工事区域の北西部約2,200㎡を発掘調査し、平安時代から室町時代にかけての集落跡を確認した。10年度（４年次）は、工事区域北部約 2,100㎡を発掘調査し、平安時代から中世にかけての集落跡を確認した。

本年度（５年次）は、工事区域中央部約 2,400㎡を調査対象とし、調査区をⅧ地区として調査を実施した。

平成11年４月23日、現地において各関係者等による事前の打ち合わせを行った後、５月６日から調査を開始した。まず、地層と遺構の分布状況等を把握するため、対象地区に３本のトレンチを設定し人力で掘り下げた。この結果、調査区全域にわたり遺構が検出された。基本的な層序は、耕作土→盤土→地山であるが、南東隅では約 500㎡にわたり盤土と地山の間に堆積層（２～18cm）が確認された。

５月18日から重機による表土除去を開始した。今年度は隣接するⅣ地区との境に溝を切り排水したため雨による冠水は免れることができた。

重機による表土除去作業

遺構の掘り込み作業

6月12日から、遺構検出作業を行い、おびただしい数の柱穴群や土坑・溝などが確認された。検出後、調査区の平板測量を行い遺構配置図を作成、遺構の掘り込みに備えた。

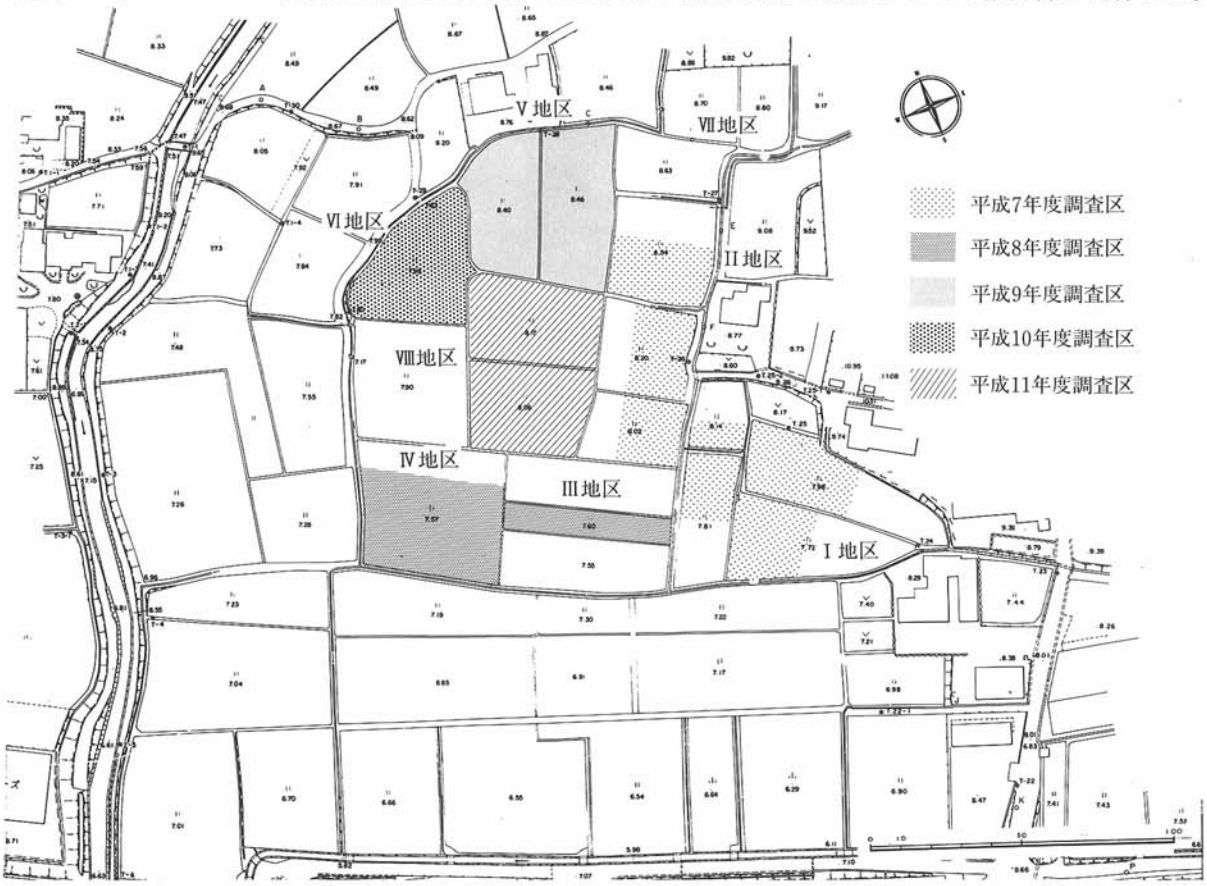
6月15日、掘り込みを開始した。まず、調査区南西部から掘り始め、多数の古代の遺物を検出した。また、北東部では中世の井戸が6基確認された。掘り込みが完了したそれぞれの遺構は、随時写真撮影を行い、実測を進めていった。

作業員への説明会

7月6日には、鋳銭司小学校・県立聾学校の児童が「交流エコオリエンテーリング」の一環として来訪、8月3日には、現地にて山口市文化財教室が開催され、発掘調査を見学していただいた。

9月25日の現地説明会は、台風18号の影響で残念ながら中止した。その後、掘り込みを続け、10月1日空中写真撮影を行い、同日午後、作業員及び近隣の方々の参加を得て説明会を実施し、往時の人々の生活の一端を垣間見ていただくことができた。

10月4日から、遺跡全体のグリッド実測を開始し、10月22日、作業員の方々をはじめ、関係各位の多大な援助・協力により5カ月半におよぶ現地におけるすべての調査を終了した。その後、県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を実施してこの報告書を刊行した。



第2図　調査区設定図

X=−212.650km
X=−212.640km
X=−212.630km
X=−212.620km
X=−212.610km
X=−212.660km
Y=−66.200km
Y=−66.190km
Y=−66.180km
Y=−66.170km
Y=−66.160km
Y=−66.150km
SK36
SK37
SK35
SK33
SK32
SK38
SK34
SK31
SK30
SK29
SK27
SK28
SK25
SD18
SD19
SD2
SD1
SK2
SK1
SE1
SP125
SP85
SP80
SP124
SP65
SP69
SP81
SP56
SP62
SP57
SP54
SP52
SD3
SK5
SP147
SP185
SP191
SP192
SP160
SP206
SP193
SP130
SP111
SP141
SP142
SK4
SK3
SP414
SP217
SP82
SP84
SD5
SD6
SD4
SK21
SK20
SP499
SP497
SK22
SK24
SP504
SK23
SK19
SP53
SK18
SK6
SP77
ST1
SK17
SK16
SK15
SP539
SP533
SP515
SP551
SP540
SP513
SK14
SE2
SP524
SP538
SP511
SP552
SP228
SX1
SP336
SP526
SP527
SP541
SP536
SD14
SP537
SP548
SP553
SD15
SP27
SP326
SP283
SP319
SE3
SP342
SK7
SK8
SK9
SK10
SD8
SD7
SD17
SK26
SD16
SX5
SX4
SX3
SX2
SD13
SD12
SD11
SE7
SK13
SD9
SE6
SE5
SE4
SP37
SK11
SK12
SD10
SD15
|A
|B
|C
|D
|E
|F
|A′
|B′
|C′
|D′
|E′
|F′
0
10m

第3図　遺構配置図

凡例
緑色…平安時代
赤色…室町時代
黒色…不明

第4図　掘立柱建物配置図

Ⅲ 遺　　構

今回は、昨年度までの調査区（Ⅰ～Ⅶ地区）が周囲をとりまく中央部（Ⅷ地区）を発掘調査した。Ⅷ地区は、標高は7.8～8.1ｍでほぼ平坦であるが、調査区の南側と南西側でやや低位である。遺構面は明褐色土または黄褐色土で、調査区の北側を中心に小礫の露出が見られる。今回の発掘調査（Ⅷ地区）で検出された遺構は、掘立柱建物59棟、土坑38基、井戸７基、溝・溝状遺構19条、埋葬遺構１基、炉１基、柱穴約1600個である。調査区の中央部、南西側および北側で遺構が特に集中している。本遺跡において検出された遺構の時期は、平安時代と室町時代に大別できる。遺構の分布については次の通りである。平安時代の遺構は調査区の中央から南側に多く、特に南西端において平安時代の土坑が集中している。室町時代の遺構は、中央以北および東側に多く分布している。調査区北東側で中世の井戸が集中していること、建物群等をとりまくようにのびる溝の存在も本調査区の特徴の一つである。なお、各遺構の上面は、後世の水田開発により削平を受けており、遺存状況は全般的によくない。

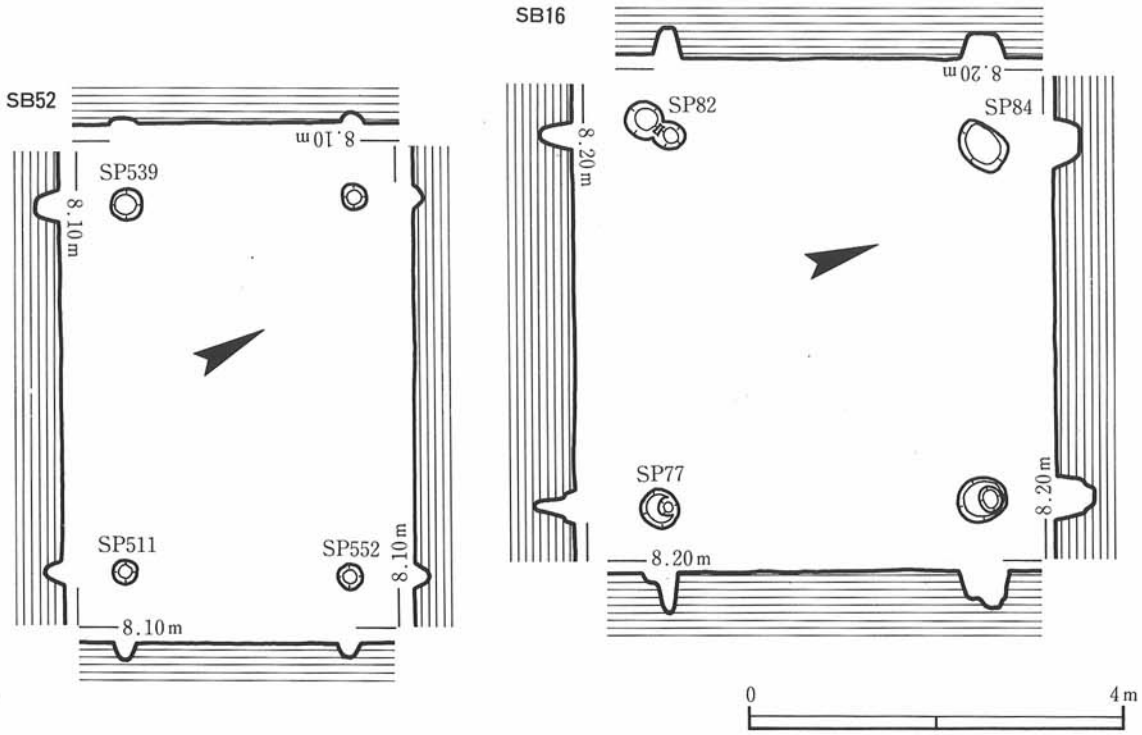
以下に、主要な遺構を紹介する。

（1） 掘立柱建物

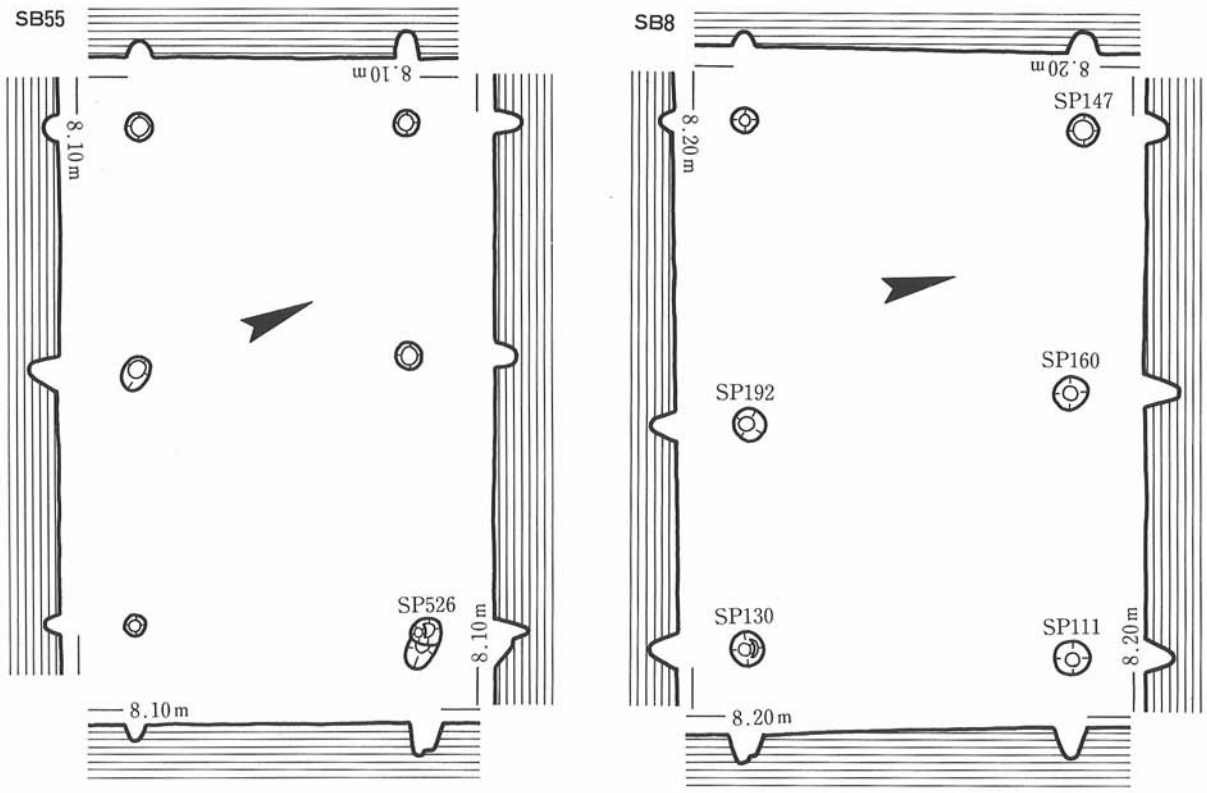
掘立柱建物は59棟が復元できた（第３・４図　第１・２表）。その多くは１間×１間、２間×１間の規模であるが、後述のように５間×３間、４間×４間の大型の建物もある。棟方向は、若干のふれはあるがほぼ東西方向を向くものと南北方向を向くものとに大別できる。柱穴の埋土、配置、出土遺物などから前者は平安時代、後者のその多くは中世に比定することができる。

ＳＢ52・16（第５図）

ＳＢ52は調査区の南側に位置する１間×１間の建物。棟方向はＮ60°Ｗ。桁行長3.9ｍ、梁行長2.5ｍの規模をもち、４本の柱で構成される。柱穴は直径20～30㎝、深さ11～24㎝である。ＳＰ511から須恵器片、ＳＰ552から土師器片が出土。また、ＳＰ539からは、須恵器高台付杯（140）が出土した（図版



第５図　ＳＢ52・16実測図

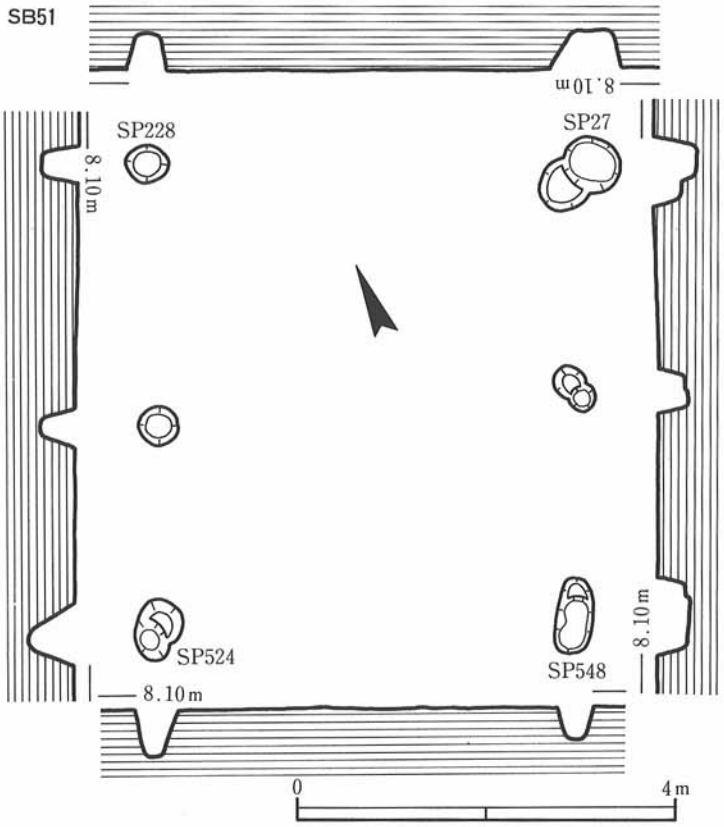


9)。これらの遺物から、この建物は9世紀代のものと推定される。

ＳＢ16は、調査区北側中央寄りに建てられた1間×1間の建物。棟方向はN72° W。桁行長3.8m、梁行長3.4mの規模をもち、4本の柱で構成される。柱穴は直径26～44cm、深さ25～43cmである。ＳＰ77･82から土師器片、ＳＰ48から土師器皿(125･126)、土師器杯(135)が出土。また、ＳＰ84からは土師器皿(123･124)が出土した(図版9)。これらの遺物から、この建物は14世紀代に比定されよう。

ＳＢ55・8・51(第6図)

ＳＢ55は調査区の南側に位置し、ＳＢ52の南に隣接している2間×1間の建物である。棟方向はN67° W。桁行長5.2m、梁行長2.8m。6本の柱で構成される。柱穴は直径20～28cm、深さ17～30cmである。ＳＰ526から土師器片・須恵器片が出土した。柱穴の埋土や遺物から、この建物は10世紀代と推定される。



第6図　ＳＢ8・51・55実測図

ＳＢ8は調査区北西側に建てられた2間×1間の建物である。棟方向はN79° W。桁行長5.5m、梁行長3.6mの規模をもち、6本の柱で構成されている。柱穴は直径23～35cm、深さ13～35cmである。

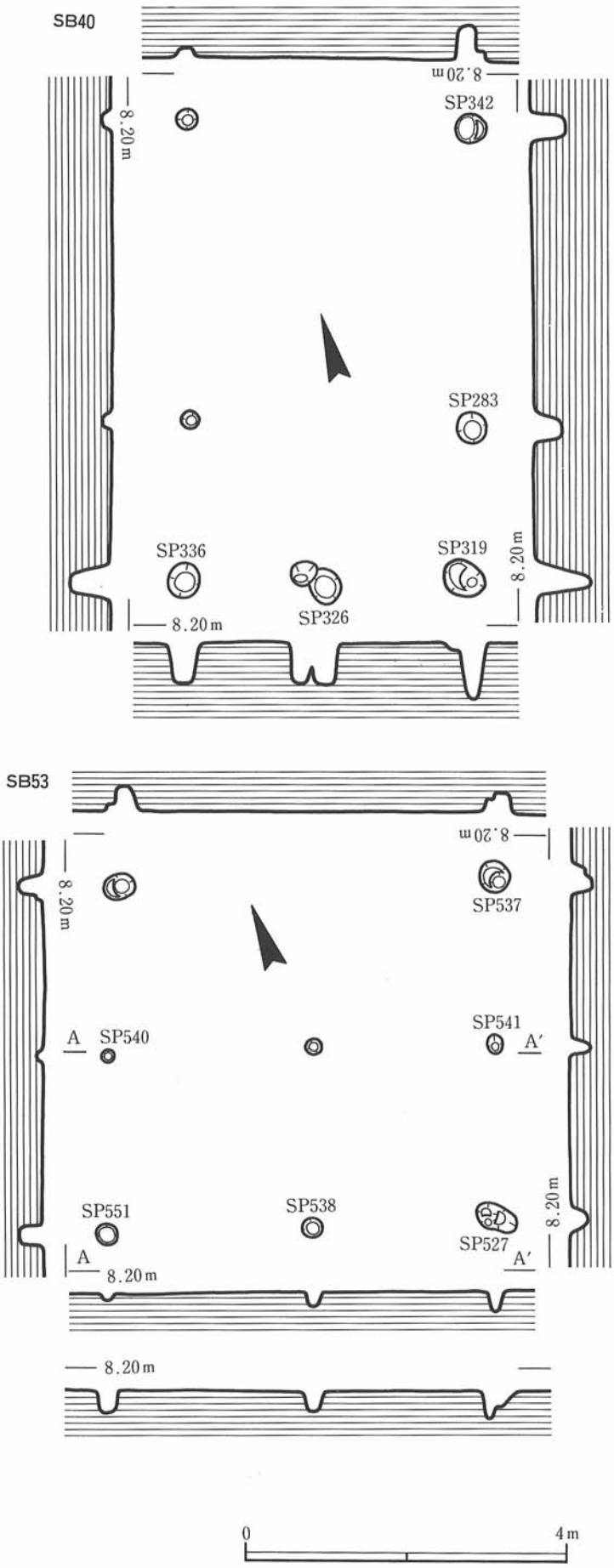
ＳＰ160より土師器皿(122)、ＳＰ111・130・147・192から土師器片、瓦質土器片が出土した。柱穴の埋土や遺物から、この建物は15世紀末～16世紀前半頃と推定される。

ＳＢ51は調査区の中央部やや東寄りに建てられた２間×１間の建物である。棟方向はN25°Ｅ。桁行長4.9ｍ、梁行長4.4ｍの規模をもち６本の柱で構成される。柱穴は直径24～55cm、深さ30～46cmである。ＳＰ27・260・548から土師器片、ＳＰ524から土師器皿(129)が出土した。また、ＳＰ228からは、土師器皿（132）・瓦質土器片が出土した(図版９)。柱穴の埋土や遺物から、この建物は15世紀末～16世紀前半と推定される。

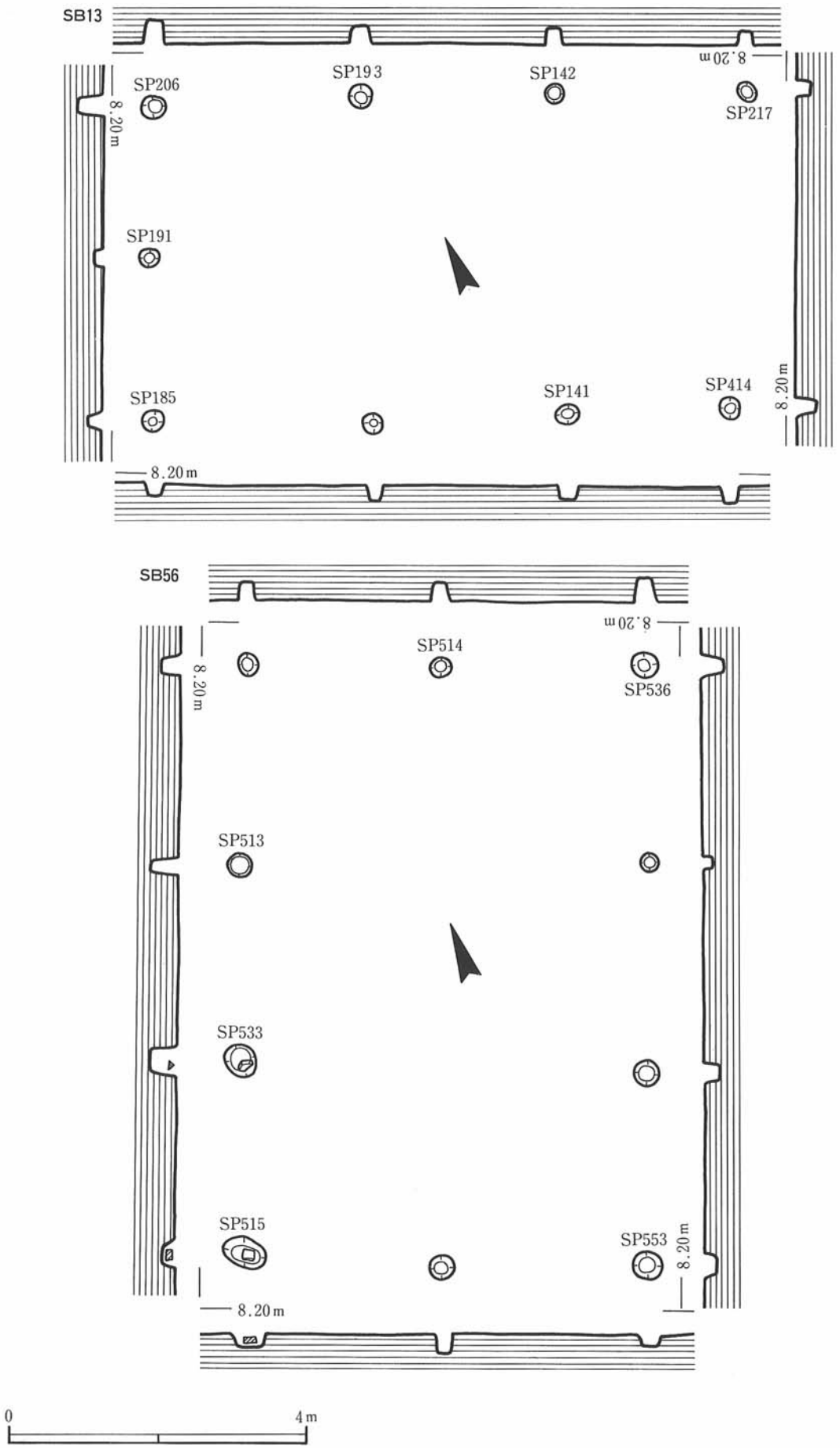
ＳＢ53・40（第７図）

ＳＢ53は調査区の南側に建てられた建物で、ＳＢ55の北側に一部重なる形で検出された。北側桁の柱穴１個が確認できなっかったが、２間×２間の建物と考えられる。棟方向はN68°Ｗ。桁行長4.8ｍ、梁行長4.3ｍの規模をもつ。柱穴は直径15～38cm、深さ８～28cmである。ＳＰ527・537・540・541・551から土師器片、ＳＰ538から須恵器片が出土。またＳＰ538・541からは焼土塊も出土した。柱穴の埋土や遺物から、この建物は10世紀～11世紀頃と推定される。

ＳＢ40は調査区の中央やや東よりに建てられた建物である。北側梁の柱穴１個が確認できなかったが２間×２間の建物と考えられる。棟方向はN17°Ｅ。桁行長5.7ｍ、梁行長3.4ｍの規模



第７図　ＳＢ40・53実測図

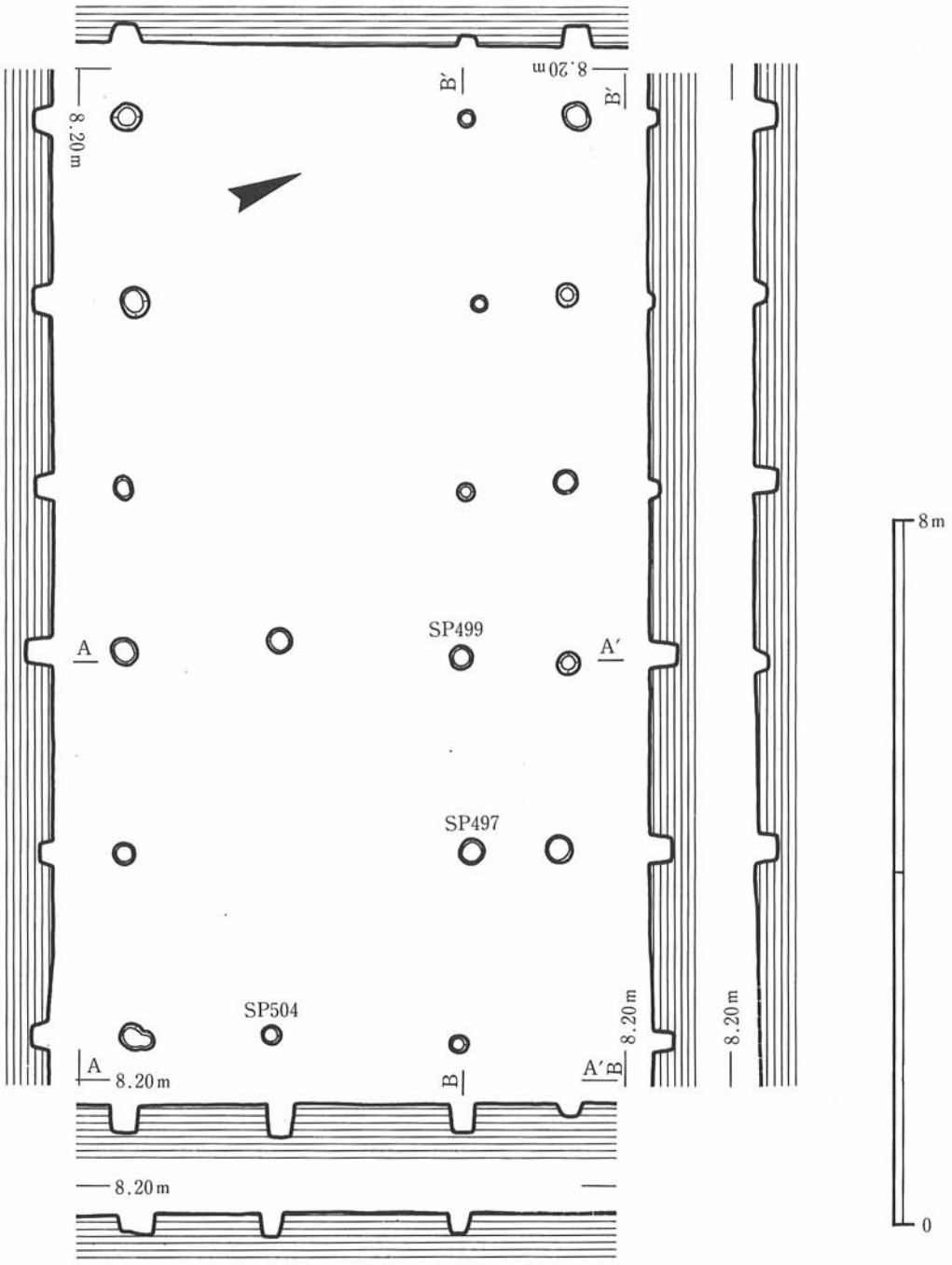


第8図　ＳＢ13・56実測図

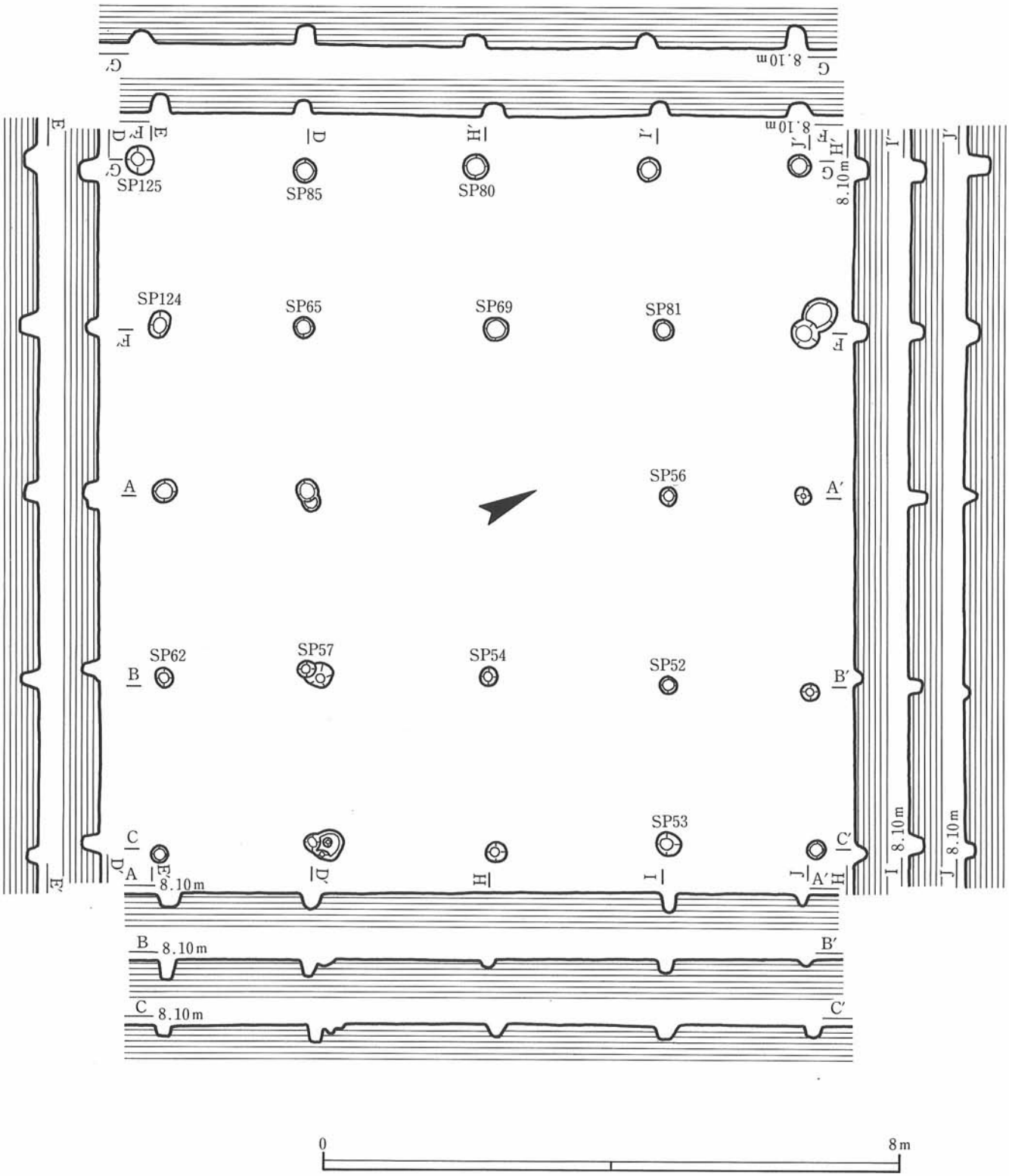
をもつ。柱穴は直径23～40cm、深さ11～48cmである。ＳＰ319・336から土師器片・瓦質土器片、ＳＰ326・342から土師器片が出土した。柱穴の埋土や遺物から、室町時代の建物と推定される。

ＳＢ13・56（第８図）

ＳＢ13は調査区の北側に位置し、ＳＢ８の北側に一部重なる形で検出された。東側梁の柱穴１個が確認されなかったが、３間×２間の建物と考えられる。棟方向はN62° W。桁行長7.7ｍ、梁行長4.2ｍの規模をもつ。柱穴は直径22～28cm、深さ12～32cmである。ＳＰ141・142・185・191・193・414から土師器片、ＳＰ206から土師器片・木炭細片、ＳＰ217から土師器片・須恵器片が出土した。柱穴の埋土や遺物より、この建物は平安時代と推定される。



第９図　ＳＢ50実測図



第10図　ＳＢ45実測図

ＳＢ56は調査区の南側に位置し、ＳＢ53・55と一部重なった形で検出された３間×２間の建物である。棟方向はN20° E。桁行長7.8m、梁行長5.4mの規模をもつ。柱穴は直径21～42cm、深さ14～35cmである。ＳＰ513・515・536・553から土師器片、ＳＰ514から土師器片・瓦質土器片が出土。また、ＳＰ533から土師器皿２点（127・131）・瓦質土器鍋片が出土した（図版９）。柱穴の埋土や遺物から、この建物は15世紀末～16世紀前半のものと推定される。

ＳＢ50（第９図）

ＳＢ50は調査区の中央やや西寄りに位置する建物である。西側梁の柱穴１個、東北隅の柱穴１個が確認できなかったが、５間×３間で北面に廂をもつ建物である。棟方向はN66° W。桁行長10.3m、梁行長5.5mの規模をもつ。柱穴は直径19～36cm、深さ５～31cmである。ＳＰ489・497・499・504から土師器片が出土した。柱穴の埋土や遺物から、この建物は平安時代のものと推定される。

ＳＢ45（第10図　図版３）

ＳＢ45は調査区の中央東よりに位置する４間×４間の建物で、桁行長9.4m、梁行長8.8m。四面に廂を付属しており、身舎は２間（9.4m）×２間（8.8m）である。廂の出は北面が1.8m、他の三面は約２mのほぼ等間。今回の調査で検出した掘立柱建物の中で最も規模が大きい。棟方向はN65° W。柱穴は直径22～36cm、深さ９～33cmである。ＳＰ57から有孔石製品（176）、ＳＰ52から土師器片・坩堝片・木炭片、ＳＰ85から須恵器片・土師器片、ＳＰ53・54・56・62・65・69・79・100・124・125から土師器片が出土。また、ＳＰ80から土師器杯片（128）・土師器甕片（136）が出土した（図版９）。柱穴の埋土や遺物から、11世紀代の建物と推定される。また、建物周辺の柱穴の配置を見ると、建て替えられた可能性も考えられる。

（２）土坑

今回の調査（Ⅷ地区）では38基の土坑が検出された。出土遺物、埋土から平安時代前期から中世のものと比定できる（第３表）。中世の土坑は、調査区の中央部から北側において検出された。平安時代

第１表　掘立柱建物一覧表①

規模（間）	建物番号	棟方向	柱間 桁行 建物の南西隅から (m)	柱間 梁行 建物の南西隅から (m)	出土遺物	時代
1×1	5	N67° W	3.0	3.0		
1×1	6	N67° W	2.6	2.6	土師器片	平安？
1×1	9	N73° W	3.5	1.9	土師器片	室町
1×1	12	N10° E	3.1	2.5	土師器片、須恵器	室町？
1×1	16	N72° W	3.8	3.4	土師器（皿・杯）、瓦質土器（すり鉢片）	14世紀
1×1	18	N63° W	3.5	2.0	土師器片	室町
1×1	21	N55° W	3.5	1.5	土師器片	室町
1×1	22	N72° W	3.1	2.1	土師器片	室町
1×1	23	N76° W	3.4	2.3	土師器（皿）、瓦質土器（すり鉢片） 青磁片、白磁片、焼土塊、木炭	室町
1×1	26	N64° W	4.7	4.3	土師器片、瓦質土器片、青磁片	室町
1×1	35	N80° W	2.7	2.3	土師器片、瓦質土器（鍋片）、青磁片	室町
1×1	38	N68° W	2.4	2.0		
1×1	39	N67° W	3.2	2.3	土師器（皿・杯）、瓦質土器（鍋片） スラグ、木炭	室町
1×1	43	N69° W	3.9	3.3	土師器片	
1×1	44	N27° E	3.9	2.6	土師器片	室町
1×1	52	N60° W	3.9	2.5	土師器片、須恵器（椀）	9世紀？

第2表　掘立柱建物一覧表②

規模（間）	建物番号	棟方向	柱間 桁行 建物の南西隅から（m）	柱間 梁行 建物の南西隅から（m）	出土遺物	時代
2×1	7	N69° W	2.1・2.4	2.9	土師器片	平安？
2×1	8	N79° W	3.1・2.4	3.6	土師器片（皿）	15C末～16C前半
2×1	10	N12° E	3.0	1.4・1.1	土師器片、瓦質土器片	室町
2×1	11	N20° E	1.7・1.8	2.9	土師器片、須恵器片	室町？
2×1	14	N26° E	2.3・2.3	2.2	土師器片	室町？
2×1	17	N25° W	1.9・1:9	2.7	土師器片	室町？
2×1	24	N65° W	2.0・1.9	2.2	土師器片	室町後半
2×1	25	N26° E	2.0・2.1	2.3	土師器片	室町後半
2×1	28	N72° W	2.1・2.5	3.6	土師器片	室町
2×1	29	N60° W	2.1・2.8	2.9	土師器片、瓦質土器片	室町
2×1	30	N64° E	2.4・2.8	3.5	土師器片	平安？
2×1	31	N20° E	1.9・2.0	2.8	土師器片、瓦質土器片（火鉢口縁片）	室町
2×1	32	N70° E	2.2・2.2	3.0	土師器片	室町？
2×1	33	N26° E	2.3・2.6	3.0	土師器片、陶器片	室町
2×1	36	N20° E	2.4・2.5	2.3		
2×1	46	N25° E	1.9・2.0	2.2		
2×1	47	N10° E	2.3・2.2	3.9	土師器片	平安？
2×1	49	N25° E	1.9・2.1	2.3	須恵器片	9C
2×1	51	N25° E	2.2・2.7	4.4	土師器（皿）、瓦質土器片、陶器片	15C末～16C前半
2×1	55	N67° W	2.5・2.7	2.8	土師器片、須恵器片	10C
2×1	57	N63° W	1.7・2.0	2.0		
2×1	58	N68° W	2.4・2.2	3.8	土師器片（椀底部片）、須恵器（椀口縁片）	11C
3×1	4	N64° W	2.2・2.1・2.2	5.4	土師器片、瓦質土器片（鍋片）	室町
4×1	3	N64° W	1.8・3.1・1.5・1.6	4.0	土師器片	平安
1×1＋α	2	N20° E	2.3	3.7	土師器片、須恵器片	平安？
2×？	1	N64° W	2.1・2.0	不明	土師器	平安？
2×2	40	N17° E	2.0・3.7	1.8・1.6	土師器（皿）、瓦質土器片	室町後半？
2×2	41	N62° W	1.7・2.8	1.7・1.8	緑釉陶器片、土師器片	平安
2×2	42	N70° W	2.0・1.9	1.7・1.6	土師器片、木炭	室町
2×2	48	N26° E	1.6・2.1	2.2・0.7	土師器片	平安？
2×2	53	N68° W	2.4・2.4	2.2・2.1	土師器片、須恵器片、焼土塊	10～11C
3×2	13	N62° W	2.9・2.6・2.2	2.1・2.1	土師器片、須恵器片	平安
3×2	15	N68° W	2.2・2.4・2.6	2.2・2.0	土師器（皿）、瓦質土器片、陶器片、木炭	室町
3×2	20	N67° W	2.2・2.2・2.3	2.2・2.1	土師器片、瓦質土器片（鍋片・すり鉢片）、陶器片、焼土塊、木炭	室町後半
3×2	27	N61° W	1.9・1.9・1.9	2.1・2.3	土師器（皿）、瓦質土器片、陶器片、白磁（椀底部片）	室町
3×2	34	N19° E	1.8・1.8・1.5	2.2・2.2	土師器片、瓦質土器	16C
3×2	37	N67° W	2.3・2.2・2.0	2.2・2.1	土師器片、瓦質土器片、木炭	室町
3×2	54	N69° W	1.9・2.1・2.3	2.2・2.1	土師器（皿）、瓦質土器	室町
3×2	56	N20° E	2.6・2.6・2.6	2.6・2.8	土師器（皿）、瓦質土器（鍋片）	16C前半
4×2	19	N65° W	1.5・2.5・2.3・1.7	2.2・3.0	土師器片、須恵器片、焼土塊、木炭	室町
5×3	50	N66° W	2.0・2.1・1.8・2.3・2.1	4.3・1.2	土師器片	平安
3×1＋α	59	N20° E	2.1・2.0・2.2	1.8	土師器（皿・杯）	11～12C
4×4	45	N65° W	2.0・2.7・2.3・1.8	2.2・2.3・2.4・2.5	土師器（甕・椀底部片）、須恵器片、坩堝片、木炭、有孔石製品、土師器（皿・杯）	11C

の土坑は、中央部から南西側において検出された。また、調査区の南西端付近において、内部壁面が焼け締まったＳＫ30の他、12基の土坑が集中して検出され、土師器・須恵器・緑釉陶器片とともに坩堝・鞴羽口・溶解炉壁片などが数多く出土した。このことは、当地区周辺における古代の鋳造関連施設の存在をうかがわせるものとして注目される。

ＳＫ22（第11図　図版７）

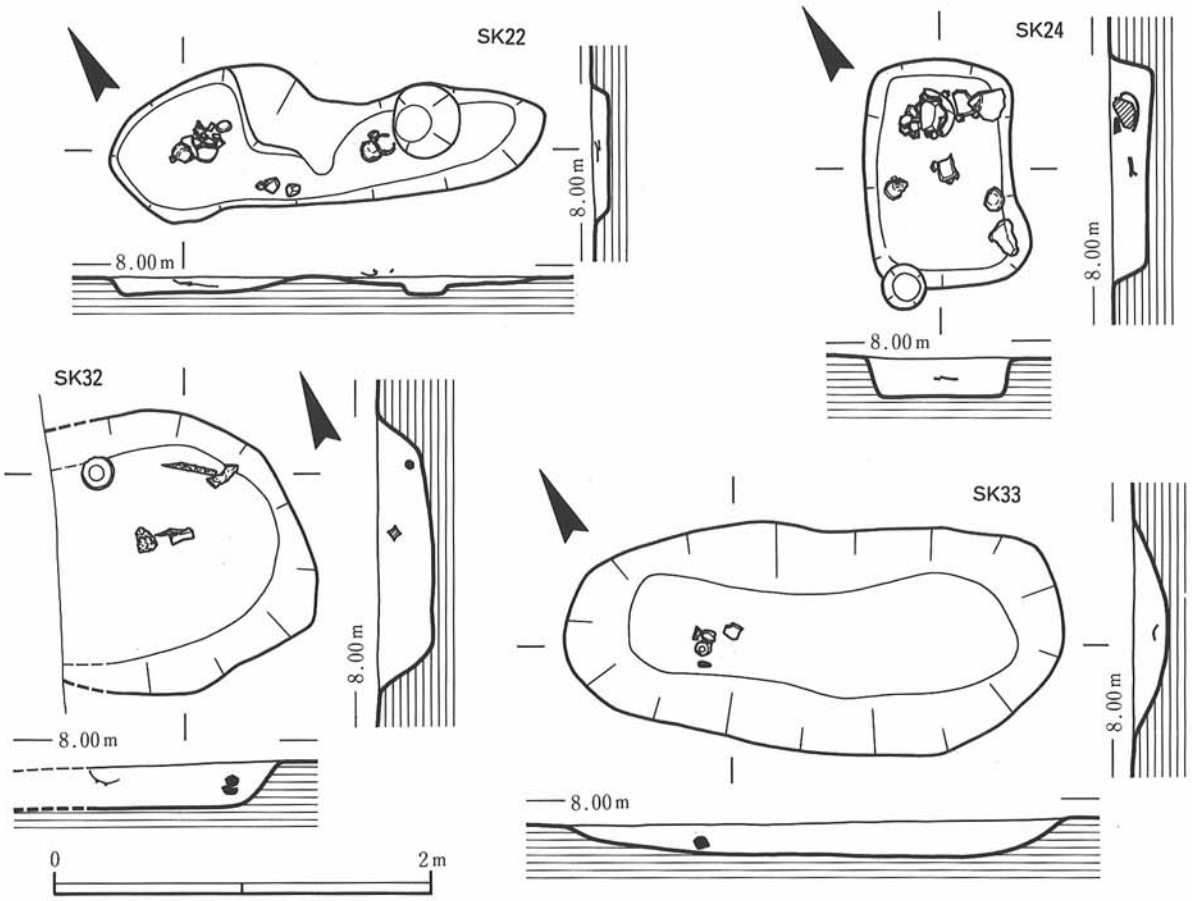
遺構の東側を後代の柱穴によって切られるが、N60°Wに主軸をとる不整形の土坑である。深さは北西部の深いところで14cm。南東側で７cmを計る。埋土は褐色土の単層であり、土師器杯（35・36）が出土した。９世紀後半の遺構と推定される。

ＳＫ24（第11図　図版６）

南西隅を後代の柱穴によって切られるが、N28°Eに主軸をとる長軸121cm、短軸76cm、深さ19cmの隅丸長方形の平面形を持つ。埋土は、にぶい黄褐色土の単層である。埋土中から土師器杯（１・２）・土師器椀（３・４）・土師器甕（６）・須恵器鉢（５）が10～15cmの角礫とともに出土した。土師器甕は礫を抱き込んだ状態であった。10世紀前半の遺構である。

ＳＫ32（第11図　図版６）

遺構の西側を中世の溝によって切られ、東側のみの検出。検出部分の長さ120cm、幅75cm、深さ30cmである。埋土は黒褐色土の単層で、埋土中より土師器椀（39）、および鉄刀子（159）・鉄鉋（163）・鉄鏃（168）・鉄鏃の茎かとみられる棒状の鉄製品（164）・鉄包丁の一部とみられる鉄製品（167）・砥石（174）各１点が出土した。土坑墓の可能性もあろう。10世紀末～11世紀初頭の遺構と推定される。



第11図　ＳＫ22・24・32・33実測図

ＳＫ33（第11図　図版６）

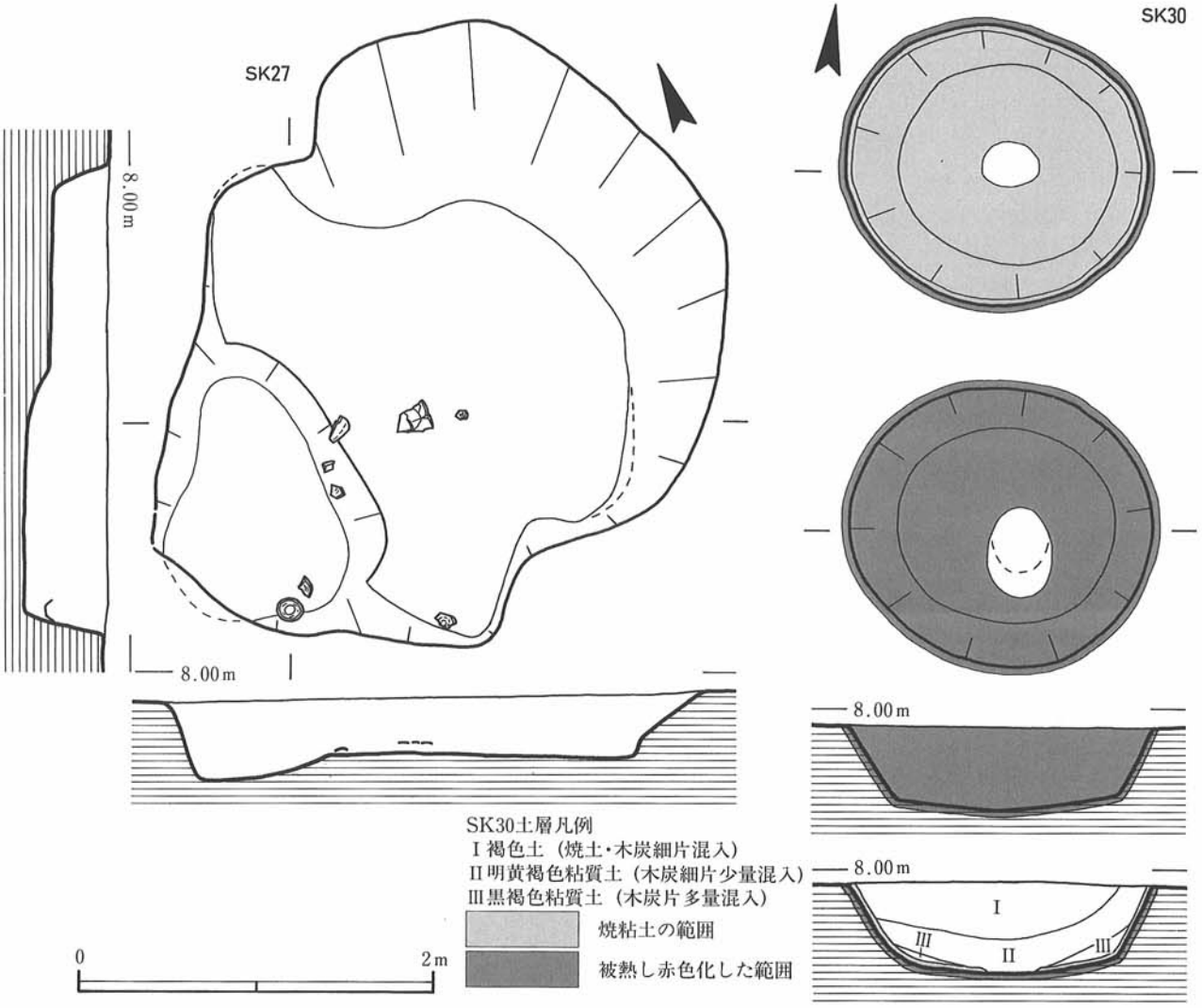
主軸をＮ60°Ｗにとる長軸263cm、短軸117cm、深さ20cmの長円形の土坑である。埋土は暗褐色土の単層で、埋土中から土師器片・須恵器片とともに鞴羽口１点（145）および焼土塊が出土した。鞴羽口は破片であり、投棄されたものとみられる。9世紀代の遺構と推定される。

ＳＫ27（第12図　図版４）

土器や鋳造関連遺物を多量に検出した遺構である。平面形は不整形、東側にテラス状の平坦面をもつ。長軸350cm、短軸288cm、深さは西側の深いところで51cmである。埋土は焼土・木炭細片が少量混入した黄褐色土の単層である。埋土中から土師器杯（７・８）・土師器椀（９・10）・土師器甕（20）・緑釉陶器椀底部片（11）・須恵器杯（14）・須恵器椀（15～19）・須恵器杯蓋（12・13）などの土器が出土。また、坩堝（142・143）・鞴羽口（146）・溶解炉壁の炉口・炉底と思われるもの（147・148）などを含めて鋳造関連遺物の破片が多量に出土した。これらは、使用後本遺構に廃棄されたものと考える。９世紀後半の遺構である。

ＳＫ30（第12図　図版５）

平面形は円形。径が約160cm、深さ52cmの土坑である。埋土は褐色土・暗黄褐色土・黒褐色土（木炭細片多量に含む）の３層で、底部から壁面に粘土が３cm程度に貼られ、赤く焼け締まっている。な



第12図　ＳＫ27・30実測図

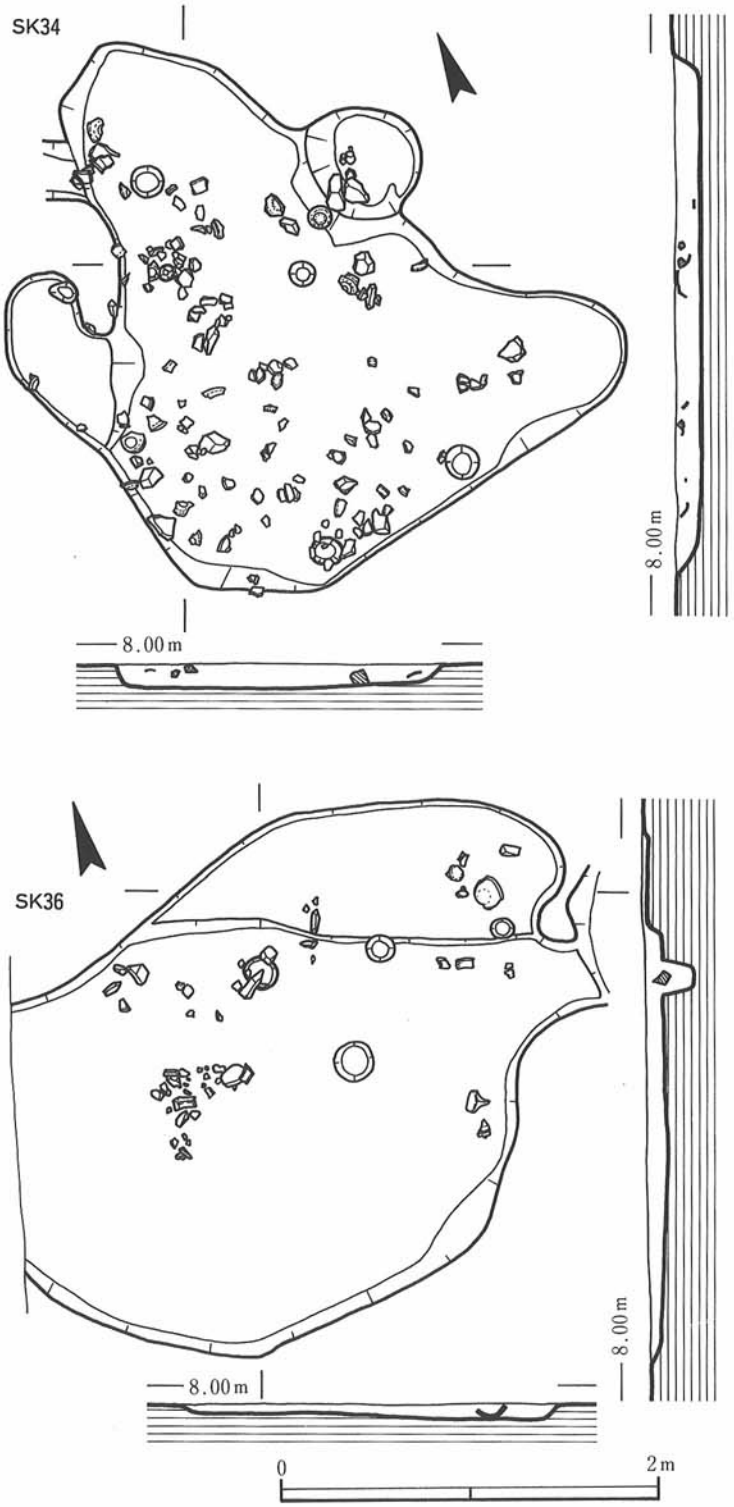
お、底部中央には長径50cm、短径30cmの長円形の範囲で、焼け締まった粘土の存在しない部分がみられた。類例に乏しく性格のはっきりしない土坑であるが、溶解炉の下部構造あるいは木炭焼成窯など、本遺構が鋳造関連施設または窯跡であった可能性も考慮する必要があろう。埋土中から緑釉陶器片(37)・須恵器高台付杯（38）などが出土した。9世紀後半の遺構である。

ＳＫ34（第13図　図版３・４）

平面形は不整形である。深さは最深部でも17cmで浅い。埋土はオリーブ褐色土の単層で、遺構底面に接する状態で土器や礫が多量に出土した。出土した遺物には、土師器杯（21～25）・土師器甕（34）・須恵器杯（26・27）・須恵器高台付杯（28～30）・須恵器杯蓋(31)・緑釉陶器椀片（32・33）および焼土塊等がある。9世紀後半の遺構である。

ＳＫ36（第13図　図版６）

ＳＫ34に隣接する。遺構の西側は未調査であるが、平面形は不整形とみられる。遺構の北側にテラス状の平坦面をもち、深さは最深部でも13cmで浅い。埋土は暗褐色土の単層で、土師器片・須恵器片・木炭片とともに坩堝（144）が出土した。9世紀後半の遺構である。



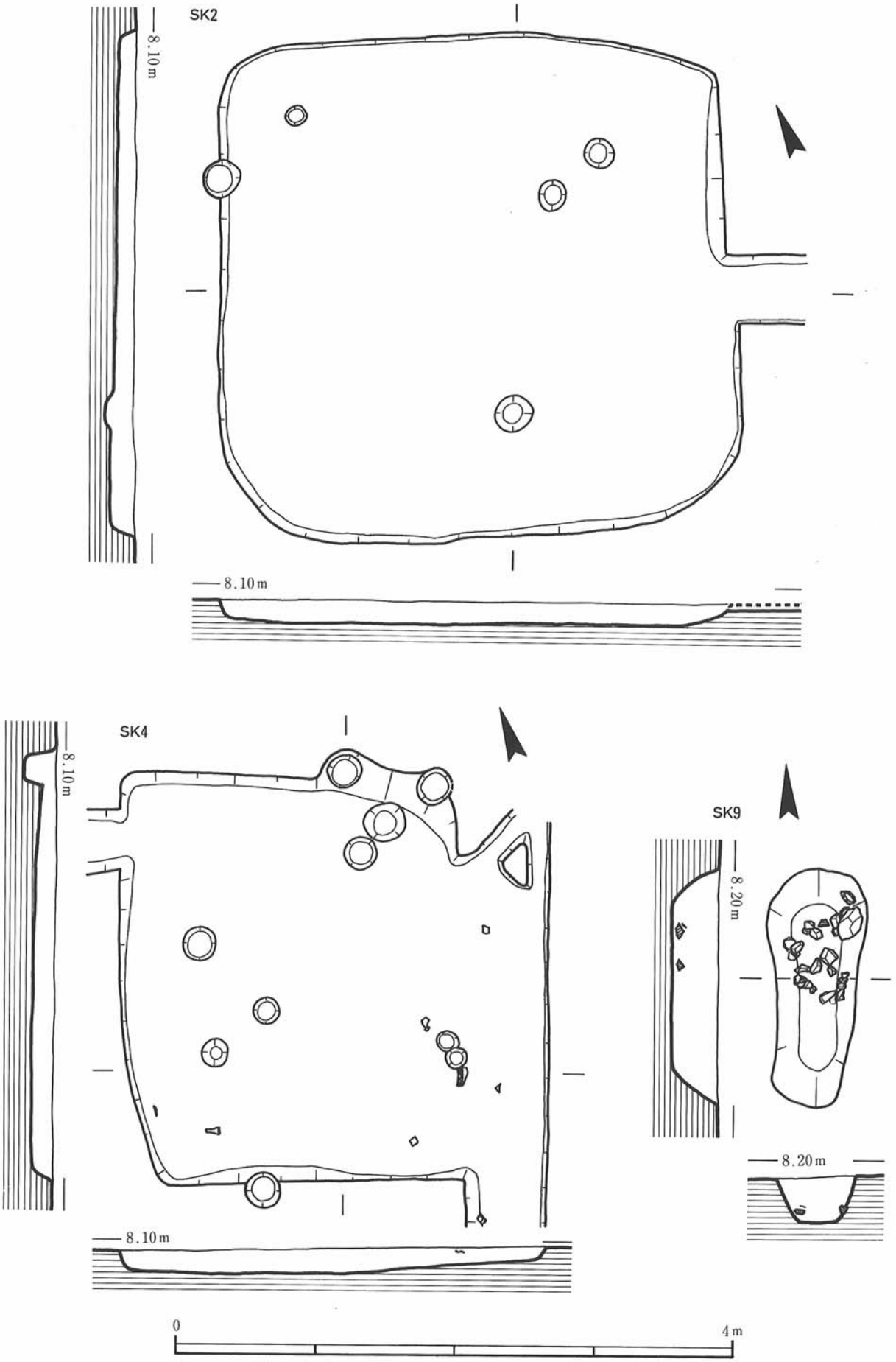
第13図　ＳＫ34・36実測図

ＳＫ２・４（第14図　図版５）

二つの遺構は、ＳＤ３によって連結された状態で検出された。それぞれの平面形から推察すると、作業小屋のような建物跡の可能性も考えられるが、遺構に伴う柱穴は確認できなかった。出土遺物・埋土などから、ＳＫ２・ＳＫ４とも16世紀代の遺構と推定される。

ＳＫ２の深さは17cm。埋土は、暗灰黄色土の単層で、土師器片・瓦質土器片などとともに銅銭１点(170）が出土した。

ＳＫ４の深さは18cm。埋土は、暗灰黄色土の単層で、土師器片・瓦質土器火鉢片(40)・鉄釘（160）



第14図　ＳＫ２・４・９実測図

が出土した。

ＳＫ９（第14図　図版７）

礫層に掘り込まれた遺構である。ほぼ南北に主軸をとる長軸168cm、短軸56cm、深さ34cmの長円形の土坑。埋土は暗灰黄色土の単層で、瓦質土器片・青磁皿（41）が出土。15世紀代の遺構である。

（３）井戸

今回の調査において、７基の井戸が検出された。これらの井戸は、遺構面から礫層を湧水層下まで掘り込まれている。出土遺物、埋土からＳＥ１は平安時代、他の６基は中世に属するものと比定される。ＳＥ４～７はＳＤ10にそって検出された。なお、大半が素掘りの井戸であり、石組みの井戸はＳＥ５のみ確認できた。

第３表　土坑一覧表

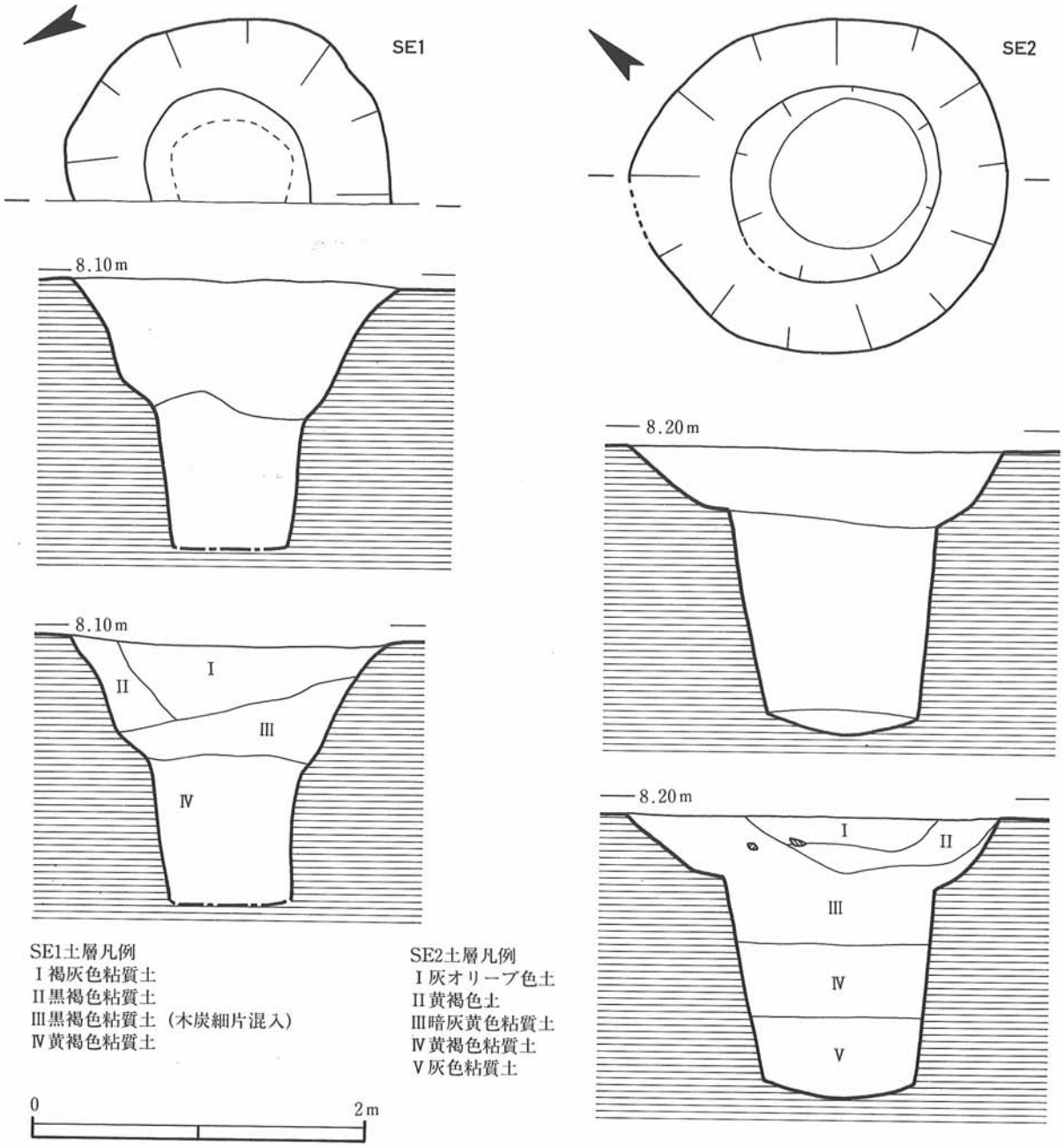
土坑番号	平面形	規模（cm）			出土遺物	時代	備考
		長軸	短軸	深さ			
1	円形	69	67	15	土師器片		
2	隅丸方形	360	358	17	土師器片、瓦質土器片、銅銭	16Ｃ代	
3	不整形	376	56	14	土師器	室町	
4	隅丸長方形	290	240	18	土師器片、瓦質土器片、釘	16Ｃ代	
5	隅丸長方形	130	88	3	土師器片、瓦質土器片、青磁	室町後半？	
6	長円形	74	54	12	土師器片	室町後半	
7	円形	78	74	7	土師器片	平安	
8	隅丸長方形	133	83	17	土師器片、瓦質土器片	16Ｃ代？	
9	長円形	168	56	34	瓦質土器片、青磁	15Ｃ代	
10	長円形	62	54	4	土師器片、瓦質土器片	室町後半？	
11	隅丸長方形	212	174	25	土師器片、瓦質土器片	16Ｃ代	ＳＤ９に切られる。
12	不明			18	土師器片	室町？	
13	隅丸長方形	125	104	12	土師器片、瓦質土器片		
14	円形	78	75	38	土師器片	室町後半？	
15	円形	124	122	22	土師器片	平安前半	
16	長円形	100	56	17			
17	不整形	120	107	17	土師器片	室町後半？	
18	長円形	84	50	14			
19	隅丸長方形	178	48	10	土師器片、瓦質土器片、陶器片	室町後半？	
20	長円形	74	44	4	土師器片	室町後半？	
21	長円形	64	56	11	土師器片、瓦質土器片、銅製品	室町後半？	
22	不整形	232	54	7	土師器	９Ｃ前半	
23	隅丸長方形	180	86	56	土師器片、瓦質土器片	室町後半？	
24	隅丸長方形	121	76	19	土師器、須恵器	10Ｃ前半	
25	長円形	82	51	3			
26	不明			10	土師器片、瓦質土器片	室町	遺構の西側を検出した。
27	不整形	350	288	51	土師器、緑釉陶器片、須恵器、鞴羽口、坩堝、炉壁、須恵器	９Ｃ後半	ＳＤ18に切られる。
28	円形	71	71	13			多量の粘土を検出した。
29	長円形	66	47	3	土師器片、須恵器片	９Ｃ後半？	
30	円形	168	156	52	緑釉陶器片、須恵器片	９Ｃ後半	内部は赤く焼け締まっている。底面付近から木炭細片が多量に出土した。
31	不整形	63	56	16	土師器片、須恵器片	平安前半	
32	不明			30	土師器、砥石、鉄鏃、刀子	10Ｃ末～11Ｃ初？	遺構の東側を検出した。
33	長円形	263	117	20	土師器片、須恵器片、鞴羽口、焼土塊	９Ｃ代	
34	不整形	300	114	17	土師器、緑釉陶器片、須恵器	９Ｃ後半	
35	不整形	72	40	9			
36	不整形		226	13	土師器片、須恵器片、坩堝	９Ｃ後半	
37	不明			9	土師器片、須恵器片、木炭	９Ｃ後半？	遺構の東側を検出した。
38	不整形	125	46	11	土師器片、須恵器片	９Ｃ後半？	

ＳＥ１（第15図　図版８）

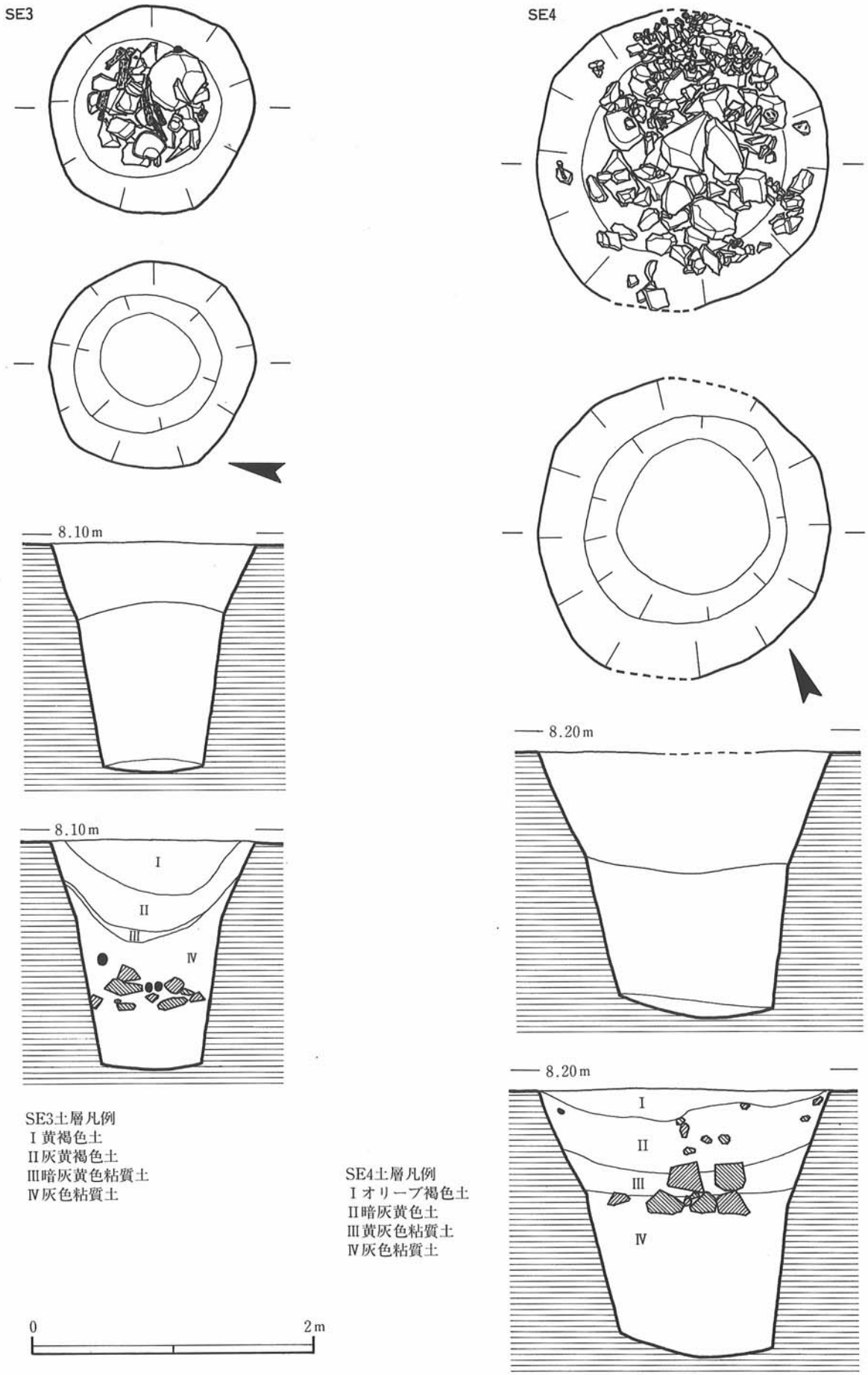
調査区の北西側の畦畔付近に位置する。調査区内の東側部分のみ検出した。湧水が激しくて、井戸底面までの掘り下げはできなかった。上端の直径190cm、深さ150cm程度と推定される。埋土中層以下から多数の遺物が出土した。遺物には、土師器の杯・台付皿・椀片・鉢・甕片、黒色土器椀片、緑釉陶器片、須恵器甕片（43～57）、漁具とみられる鉄製品（161）がある。10世紀末～11世紀初頭の井戸と推定される。

ＳＥ２（第15図　図版２・８）

調査区中央部北寄りに位置する。上端の直径200～220cm、底面の直径86～92cmであり、深さは最大170cmである。平面形は円形。遺構面より40cm下で若干のテラスをつくる。埋土上層から中層にかけて土師器杯、青磁椀片、瓦質土器片が出土（58～68）。底面付近の埋土中から木簡（149・150）、漆椀底



第15図　ＳＥ１・２実測図



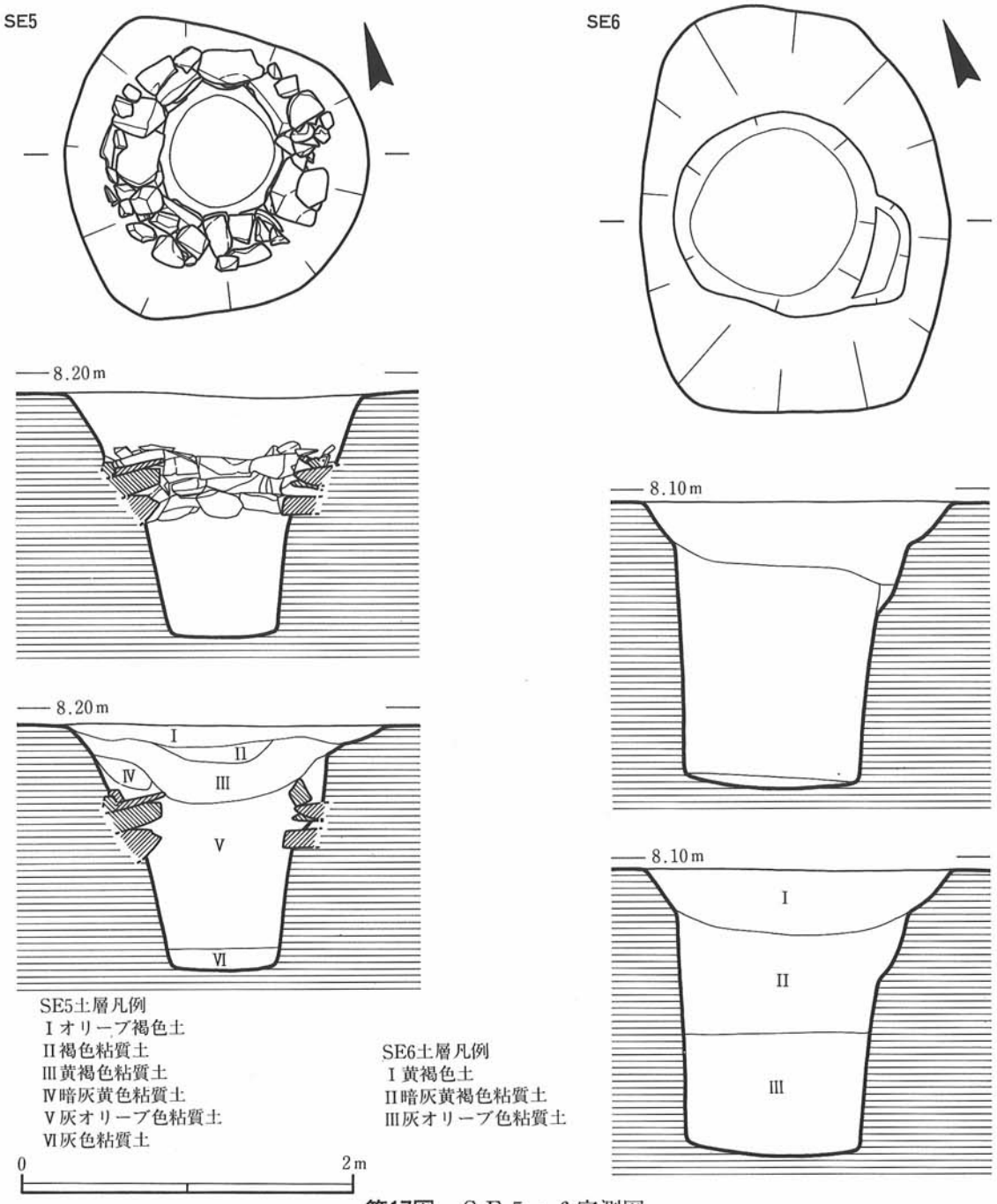
第16図　ＳＥ３・４実測図

部片（155）、曲物の一部（157）が出土。15世紀代の井戸と推定される。

ＳＥ３・４（第16図　図版２・８）

ＳＥ３は、調査区の中央やや東側に位置する。上端の直径140～150cm、底面の直径65～70cm。深さは最大160cmである。中層付近から土師器の杯・こね鉢、瓦質土器こね鉢が出土（69～71）。中層から下層には人頭大ないし拳大の礫が集積。多数の木杭、草履状木製品（153）、木片（152･154）が出土。なお、底面直上には砂利が堆積していた。15世紀代の井戸と推定される。

ＳＥ４は、ＳＤ９の北端に位置する。上端の直径200～210cm、底面の直径100～110cm、深さは最大180cmである。埋土上層～中層には人頭大ないし拳大の礫が土器類とともに集積されていた。埋土下位には２層にわたって灰色粘質土層がみられた。この層中にはシダ類や小木枝が含まれていた。出土遺物は、土師器の皿・杯片、瓦質土器の焙烙把っ手・鍋片・甕片・火鉢片・鉢片・すり鉢片（72～84）、



第17図　ＳＥ５・６実測図

五輪塔の火輪（180）および下層から竹簡（151）などである。16世紀代の井戸と推定される。

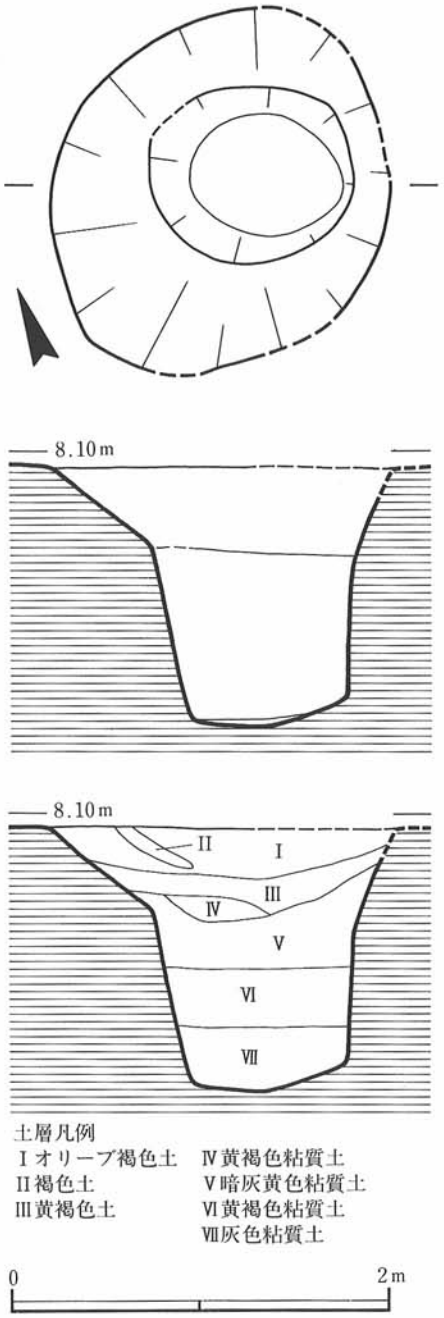
ＳＥ５・６（第17図　図版２・８）

ＳＥ５は、ＳＥ４の南側に近接して位置する。遺構面から30～70cm下方で３段程度の石組みを施しており、下方は素掘りである。掘り形は上端で直径170～180cm、深さは最大140cm。井戸側の規模は上端で直径70～80cm、下端の直径60～65cm。井戸側内は大小の礫が堆積していた。出土遺物は、井戸の上層～中層から土師器皿（85）、瓦質土器の香炉・鍋片・すり鉢片（85～90）、有孔土製円盤（141）、石臼（179）である。下層には、植物遺体を多く含む灰色粘質土層がみられた。16世紀代の井戸と推定する。

ＳＥ６は、ＳＥ５の南側に近接して位置する。井戸側は円形の平面形をもつが、上端では隅丸長方形である。掘り形は上端で長径240cm、短径180cm、深さは最大170cm。井戸側の規模は、上端で直径120～125cm、下端で95～100cmである。この井戸には人頭大ないし拳大の礫が土器とともに投棄されていた。出土遺物は、土師器の皿・杯、瓦質土器の甕片・鍋である（91～95）。下層にはシダ類・小木枝などの植物遺体を含む灰オリーブ色粘質土層がみられた。16世紀代の井戸と推定される。

ＳＥ７（第18図　図版２・８）

ＳＥ６の南側に近接して位置する。上端の直径180～195cm、底面の直径60～80cmであり、深さは最大135cm。埋土中層～下層に礫の堆積がみられ、上層～中層から土器や硯（173）が出土。下層の灰色土層からシダ類を中心とする植物遺体、木杭、こん棒状木製品（158）が出土。出土土器は、粉青沙器、土師器の杯片・香炉片、瓦質土器の鍋片・火鉢片、青磁椀片、陶器甕片など（96～104）。15世紀代の井戸と推定される。

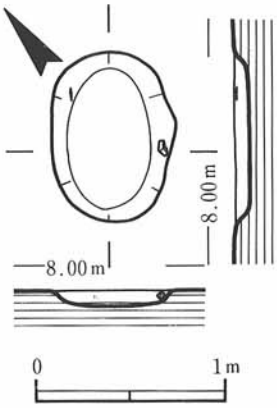


第18図　ＳＥ７実測図

（４）埋葬遺構・炉

今回の調査では、土坑墓１基（ＳＴ１）および炉１基（ＳＸ１）が検出された。

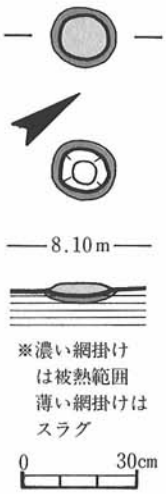
ＳＴ１（第19図　図版７）　土坑墓は、長軸90cm、短軸60cm、深さ８cmで不整長円形を呈す。主軸はＮ35°Ｅ。かなり削平を受けており、残存状況はよくない。土坑墓から刀子１点（166）が出土した。時期は不明



第19図　ＳＴ１実測図

であるが、室町時代の可能性が強いであろう。

ＳＸ１（第20図　図版９）は円形の平面形をもち、直径約18cm、深さは４cmの規模をもつ。底部および遺構の周囲は赤く焼け締まっている。内部にはスラグが残存しており、火床炉底部分と考える。遺構の時期は不明であるが、多数の鋳造関連遺物が出土した南西側の土坑群と同時期の可能性も考られる。



第20図　ＳＸ１実測図

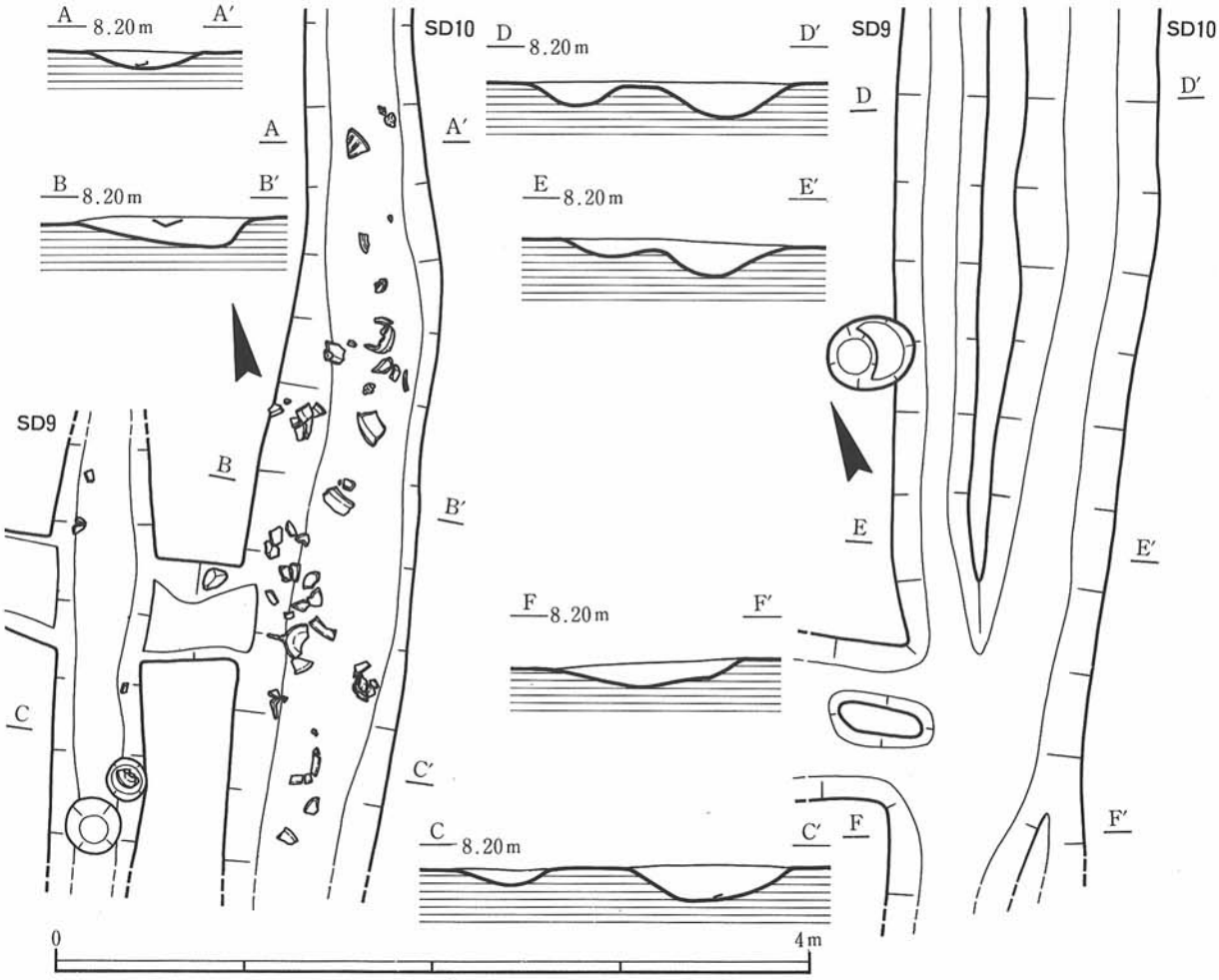
（５）溝

今回確認された溝は19条である。時期の判明した６条（ＳＤ２・３・８・９・10・11）は、室町時代の遺構である。これらの溝は、孤立して検出されたもの以外は、調査区一帯の畦畔に沿った形で東西方向および南北方向に流れるものと、調査区の北東部を区切るようなものとがある。後者は、建物群や井戸などと関係の深い溝と推定される。

以下、出土遺物が最も多かったＳＤ10について紹介する。

ＳＤ10（第21図　図版７）

南北方向に走る溝で、南側でやや蛇行する。検出部分の長さは約33ｍである。西側のＳＤ９と並行して延び、二つの溝は他の溝とともに合流する。幅は最大120cmであり、南端では深さ17cmである。高位にある北端付近と低位の南端での底面の標高差は22cmである。埋土は灰黄褐色土の単層であり、土師器の皿・杯、瓦質土器のすり鉢片・鍋・焙烙、青磁椀片が出土した(111～121)。16世紀代の遺構である。



第21図　ＳＤ９・10実測図

Ⅳ 遺　物

平成11年度の東禅寺・黒山遺跡の調査からは、平安時代中頃から室町時代にかけての土器を中心に土製品・鋳造関連遺物・木製品・金属製品・石製品などの遺物が出土した。これらの遺物は過去４年間の調査とほぼ同時代のものであるが、近世の遺物は出土しなかった。以下、遺構ごとに主たる遺物を取り上げる。

ＳＫ24・27・34出土の遺物（第22図①　図版10・11）

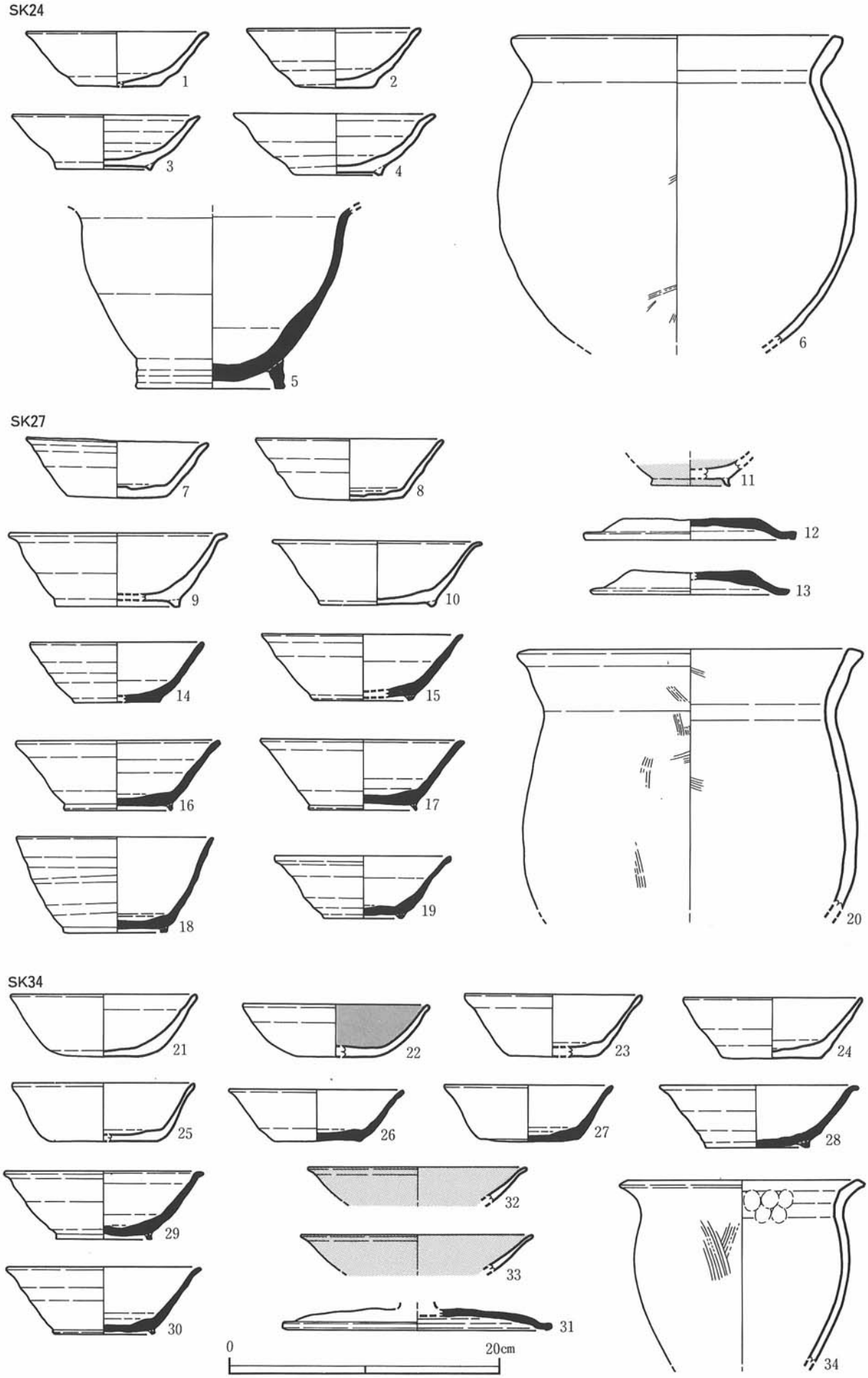
１・２は土師器杯。体部内外面ともに回転ナデ。３・４は土師器椀。４は内弯しながら立ち上がり口縁端部はわずかに外反する。貼り付け高台。５は須恵器鉢。口縁部は欠失している。底部ヘラ削りの後高台を貼る。６は土師器の甕。口径22.8cm。胴部外面にハケ目調整の痕跡を残す。７・８は土師器杯。底部はヘラ切りの後回転ナデ。９・10は土師器椀。底端は肥厚し口縁端部が外反する。貼り付け高台。11は緑釉陶器椀。全面に釉が施される。12・13は須恵器杯蓋。口径14～15cm。内外面ともに回転ナデ。なだらかな天井部から肩部で屈曲して口縁にいたる。14は須恵器杯。15～19は須恵器高台付の杯。18は体部が直線的に立ち上がり口縁端部は尖る。他は体部が肥厚し口縁端部はわずかに外に開く。内外面ともに回転ナデ。底部はヘラ切り。20は土師器の甕。口径23cm。口縁部はわずかに外反し、端部に面をもつ。内外面ともにハケ目調整を行う。21・23～25は土師器杯。21は口径13.6cm、器高4.5cm。体部内外面ともに回転ナデ。23･25の底部は静止ナデ。22は黒色土器杯。内面をミガキ後炭素を吸着させた内黒土器。胎土は緻密。26・27は須恵器杯。体部内外面ともに回転ナデ。26の底部はヘラ切りで板目痕がある。28・29・30は須恵器高台付杯。28・29は体部がわずかに内弯して立ち上がり口縁端部は外反する。「ハ」の字状に開く小さな高台をもつ。30は体部が直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。31は須恵器杯蓋。器高は低く肩部で屈曲して口縁にいたる。体部内外面ともに回転ナデ。32・33は緑釉陶器椀。淡い緑色の釉を施す。口縁部はわずかに外に開き尖る。34は土師器の甕。体部は内弯して立ち上がり口縁部は「く」の字状に屈曲。外面にハケ目調整がわずかに残る。内面には指頭圧痕が見られる。

ＳＫ22・30・32・３・４・９出土の遺物（第23図②・24図③　図版10・11）

35・36は土師器杯。底部内面静止ナデ。底部はヘラ切りで板目痕あり。37は緑釉陶器椀。淡い緑色の釉薬を全面に施す。低い高台をもつ。38は須恵器高台付杯。底部はヘラ切りで「ハ」の字状に開く低い高台をもつ。39は土師器椀。口径17.2cm、器高6.6cm。体部は内弯して立ち上がり、口縁端部が外反する。内外面ともに回転ナデ。貼り付け高台。40は瓦質の火鉢。口縁下部に方形の刺突文を施す。体部は内弯し、口縁部が内傾気味に立ち上がる。内面はハケ目調整、指頭圧痕を残す。41は青磁の輪花皿である。見込みにスタンプ状の花弁模様を施す。体部は全面施釉。削り出し高台で、高台内部は無釉。42は土師器皿。口径６cm、器高１cm 。底部は糸切り。

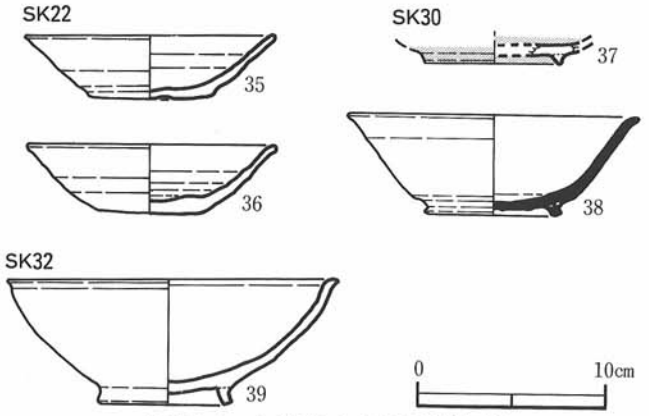
ＳＥ１・２・３出土の遺物（第25図①・26図②　図版11・12・13・14）

43～47は土師器杯。43･44は底部に糸切り痕をとどめる。45は口径11.5cm、器高2.6cm。底に板目痕あり。48は土師器の台付皿。口径10.2cm。49～52は黒色土器椀。内面のみを黒く燻した内黒土器で、貼り付け高台をもつ。52は体部が内弯して立ち上がり口縁端部は外反する。口径14.6cm。53は緑釉陶器の椀である。胎土は須恵質で濃い緑色の釉を施している。貼り付けの有段輪高台をもち、高台内部

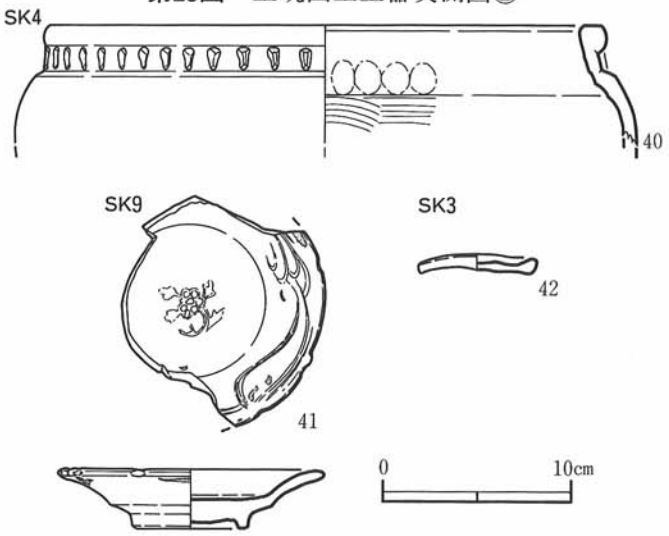


第22図　土坑出土土器実測図①

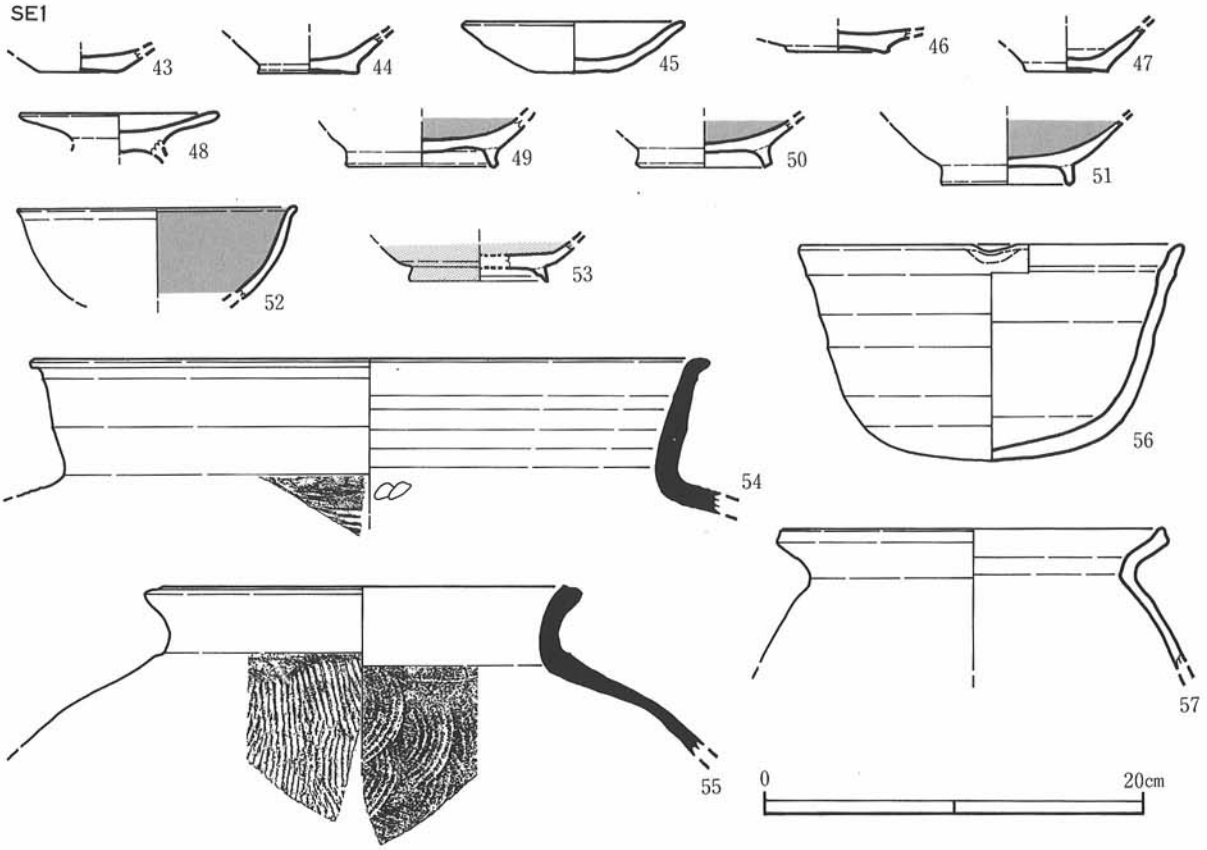
は無釉。近江産の搬入品であろう。54・55は須恵器甕。54は口縁が外傾して立ち上がり、端部が鋭く外反する。頸部は回転ナデ、肩部以下はタタキ調整。55は口縁部が「く」の字状に屈曲する。内面肩部以下に当て具痕が残る。外面肩部以下はタタキ調整。56は片口をもつ土師器の鉢。体部が直線的に立ち上がり口縁端部は丸く終わる。57は土師器の甕。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を跳ね上げ風に上方に引き出す。58～61は土師器皿と杯。体部内外面ともに回転ナデ。底部に糸切り痕が明瞭に残る。62は青磁の椀。内面に灰オリーブ色の釉薬を施釉。高台は削り出しで分厚く低い。63・64は瓦質の擂り鉢。63は口縁端部を肥厚させ内側に折り曲げる。内面はハケ目調整後クシ描き上げ条痕を残す。64は内面に5条単位のクシ描き上げ条痕。外面に指頭圧痕あり。65・66・67・68は瓦質の足鍋。65は



第23図　土坑出土土器実測図②



第24図　土坑出土土器実測図③

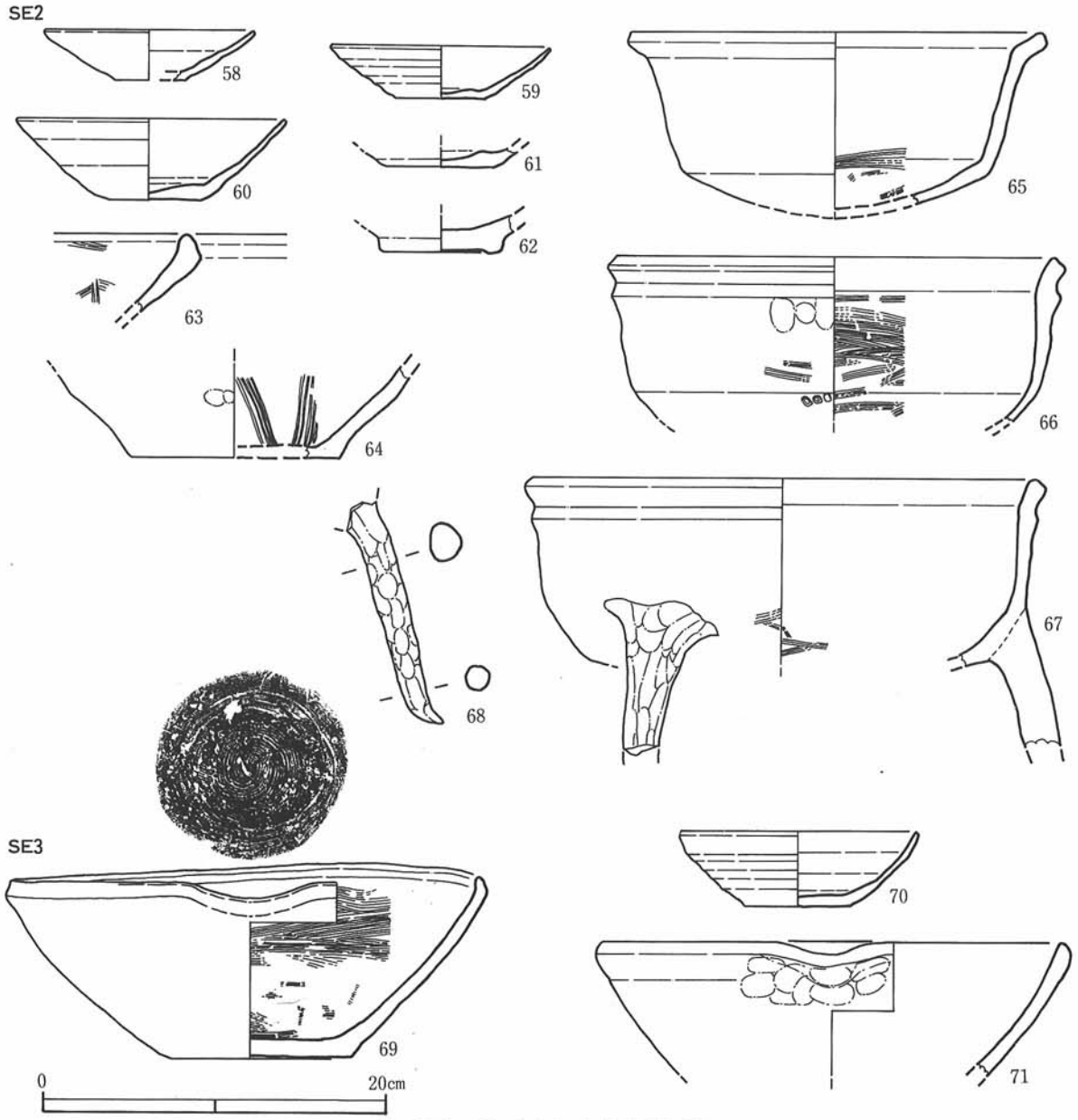


第25図　井戸出土土器実測図①

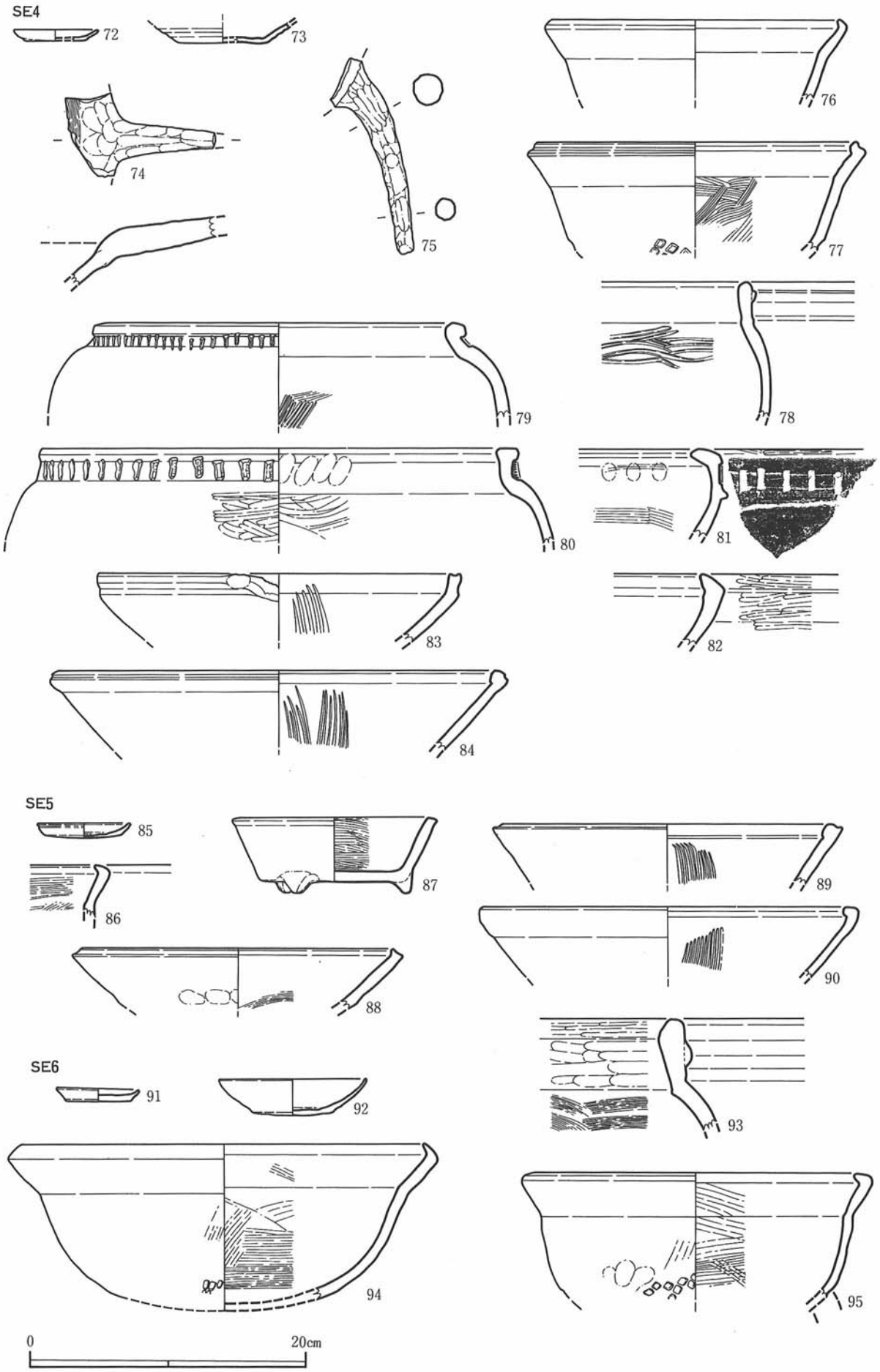
口径23.6cm。内底面はハケ目調整。口縁部及び体部内面はナデ調整。口縁部は「く」の字状に屈曲。二次的に火を受け煤が付着する。66は体部内外面ともにハケ目調整で口縁部はナデ。口縁部はわずかに外反する。底部に格子状の叩き痕を残す。65・66ともに脚部を欠失する。67は体部内外面ともにハケ目調整。脚部は二本欠失する。68は足鍋の脚部で、脚端部はゆるやかに外へ屈曲する。全面に指頭圧痕が見られる。69は瓦質のこね鉢。片口をもつ。内面はハケ目調整、内底面には渦巻き状のあらいハケ目を施す。底部に板目痕を残す。口径27cm、器高11.5cm。70は土師器杯。調整は回転ナデでロクロは右回転。底部糸切り。71は土師質の片口付きこね鉢。内外面ともにナデ。体部は内傾気味に立ち上がり口縁端部がわずかに肥厚する。

ＳＥ４・５・６・７出土の遺物（第27図③・28図④　図版12・13・14）

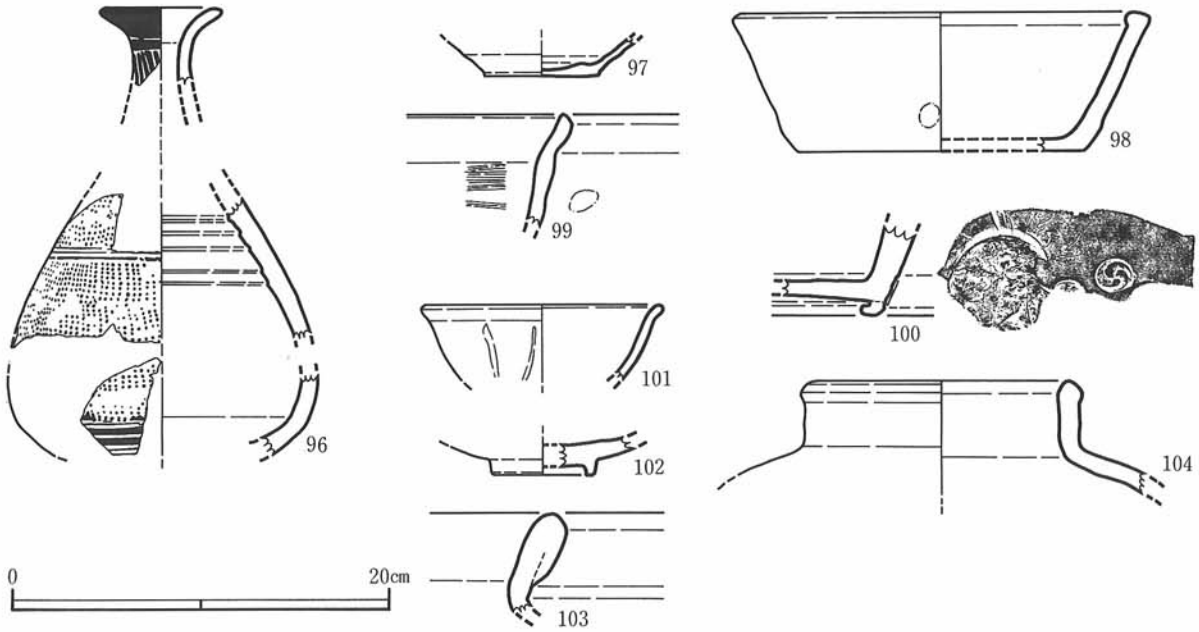
72・73は土師器皿。底部に板目痕。74は瓦質焙烙の把っ手である。指頭圧痕が認められる。75は瓦質足鍋の脚部。指頭圧痕が全面に見られる。76は土師質の足鍋。調整はナデ。77は瓦質の足鍋。内面はハケ目調整。底部に斜格子状の叩き痕がある。78は瓦質の甕。体部は内弯して立ち上がり口縁部は



第26図　井戸出土土器実測図②



第27図　井戸出土土器実測図③



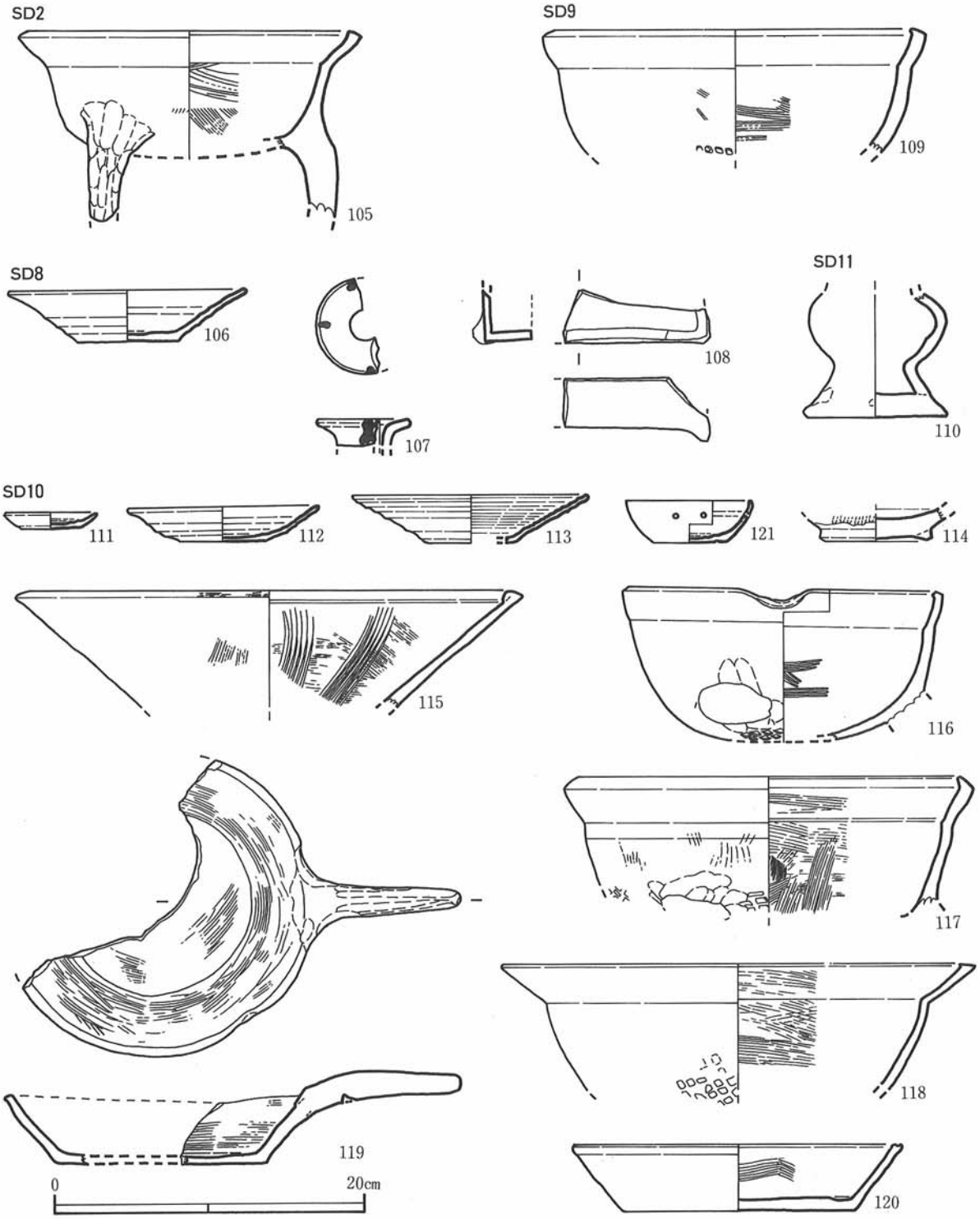
第28図　井戸出土土器実測図④

ほぼ真直にのびる。突帯は貼り付け。内面をヘラ状の工具によりなでつけている。79～81は火鉢。口縁下部に刺突文が巡り、体部との境に稜をもつ。81は突帯を貼り付けている。82は瓦質の鉢。外面にヘラ磨きを施す。83・84は瓦質の擂り鉢。83は片口をもつ。５条のクシ描き上げ条痕あり。84はナデ後７条のクシ描き上げ。85は土師器皿。口径6.6cm。底部は糸切り。板目痕を残す。86･88は瓦質の鍋。内面はハケ目調整。87は香炉。底部に短い三足を貼り付ける。89・90は擂り鉢。89は内面口縁下部に１条の沈線が巡り、９条のクシ描き上げ条痕を施す。90は口縁端部をヘラ磨きする。10条のクシ描き上げ条痕あり。91・92は土師器皿。調整は回転ナデ。93は瓦質の甕。内面にはヘラ磨きが見られる。突帯は貼り付け。94・95は瓦質足鍋。内外面ともにハケ目調整。底部に格子状の叩き痕を残す。外面は二次的に火を受け煤が付着する。脚部欠失の痕跡あり。96は李朝時代の粉青沙器印花文瓶である。胴部に簡略化された印花象嵌文様を施す。豊かに張り出した腰の下部に白い廻線文が巡る。口縁部は「朝顔」状に外反する。内面は丁寧なヘラ削り。96の各片は出土地点を異にするが、同一個体の可能性もある。97は土師器皿。98は土師質の香炉。色調は灰白色を呈す。99は瓦質の鍋。100は獣足をもつ火鉢。脚部を欠失する。外面には三つ巴文を施す。101は青磁の椀。釉は明緑灰色を呈す。高台を削り出し、高台内部は無釉。103・104は備前焼の甕と壺。103は口縁端部を折り曲げている。104は口縁が真直にのび端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整。色調は灰色を呈する。

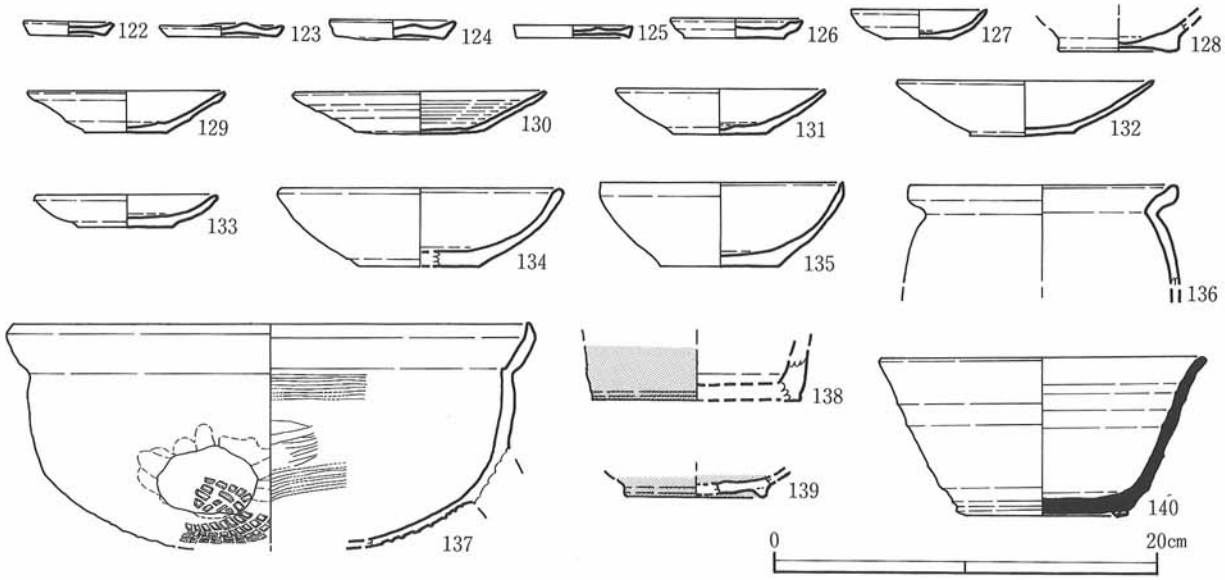
ＳＤ２・８・９・10・11出土の遺物（第29図　図版14・15）

105は瓦質の足鍋。口縁部は「く」の字状に屈曲する。内外面ともにハケ目調整。外面に二次的な焼成を受け煤が付着する。脚部はヘラ削りで接胴部に指頭圧痕を残す。106は土師器皿。口径15cm、器高3.4cm。底は糸切り。107は元の青磁銹斑文瓶の口縁片である。釉色の青みがかなり深いのが特徴で、口縁に銹斑文を散らしている。108は方形の小型火鉢である。器壁がわずかに内傾し短い四足をもつ。109は瓦質の足鍋。内外面ともにハケ目調整。底部に格子状叩き痕を残す。脚部は欠失。

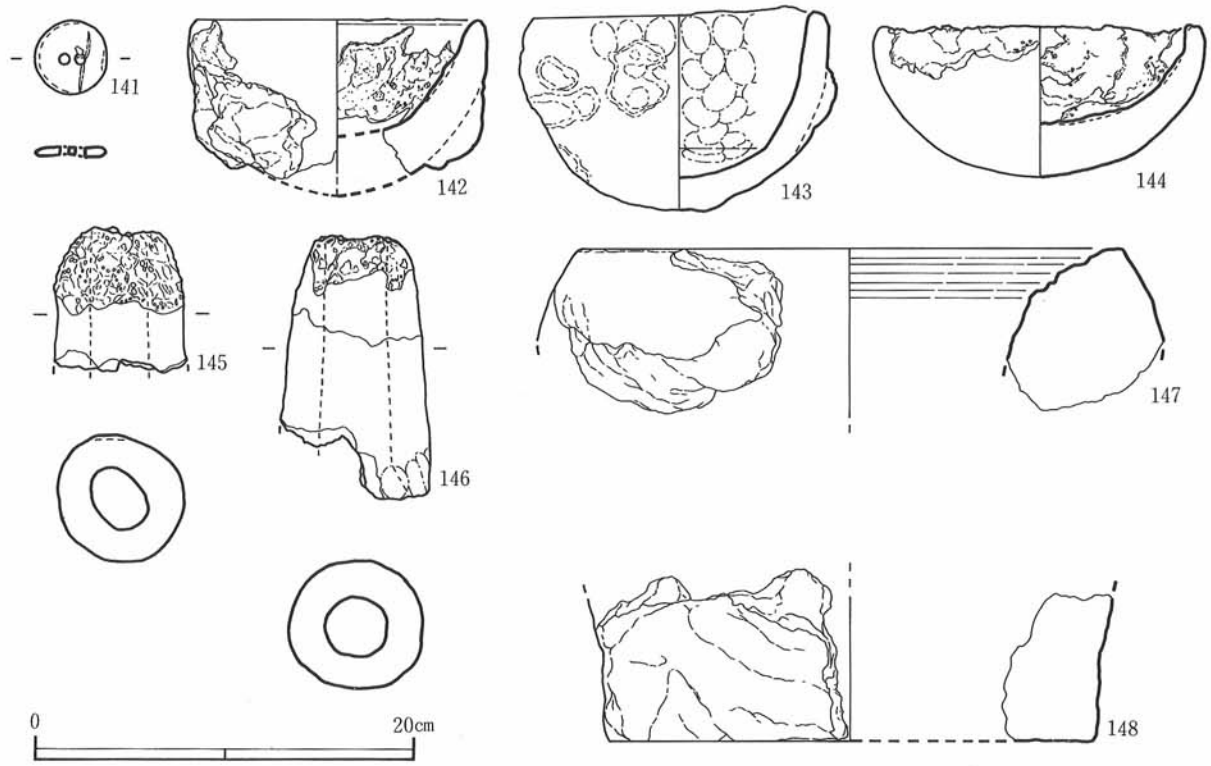
110は瀬戸の灰釉花瓶である。外面に緑色灰釉を施釉する。内面はロクロ回転ナデ。111～113は土師器皿。内外面ともに回転ナデ。底部内面は静止ナデ。底に糸切りの痕跡を明瞭に残す。114は白磁椀。内外面に透明釉を施し、高台は低く内部は無釉。内面の見込に沈線をめぐらす。115は擂り鉢。内面をハケ目調整した後、７条のクシ描き上げを施す。116～118は瓦質の足鍋。いずれも脚部を欠失し外面に煤が付着する。調整はハケで底部に格子状の叩き痕あり。116は片口をもち把っ手がつく可能性がある。119・120は瓦質焙烙。119の把っ手は貼り付けで接胴部及び表面に指頭圧痕を残す。120の内底面



第29図　溝出土土器実測図



第30図　柱穴出土土器実測図

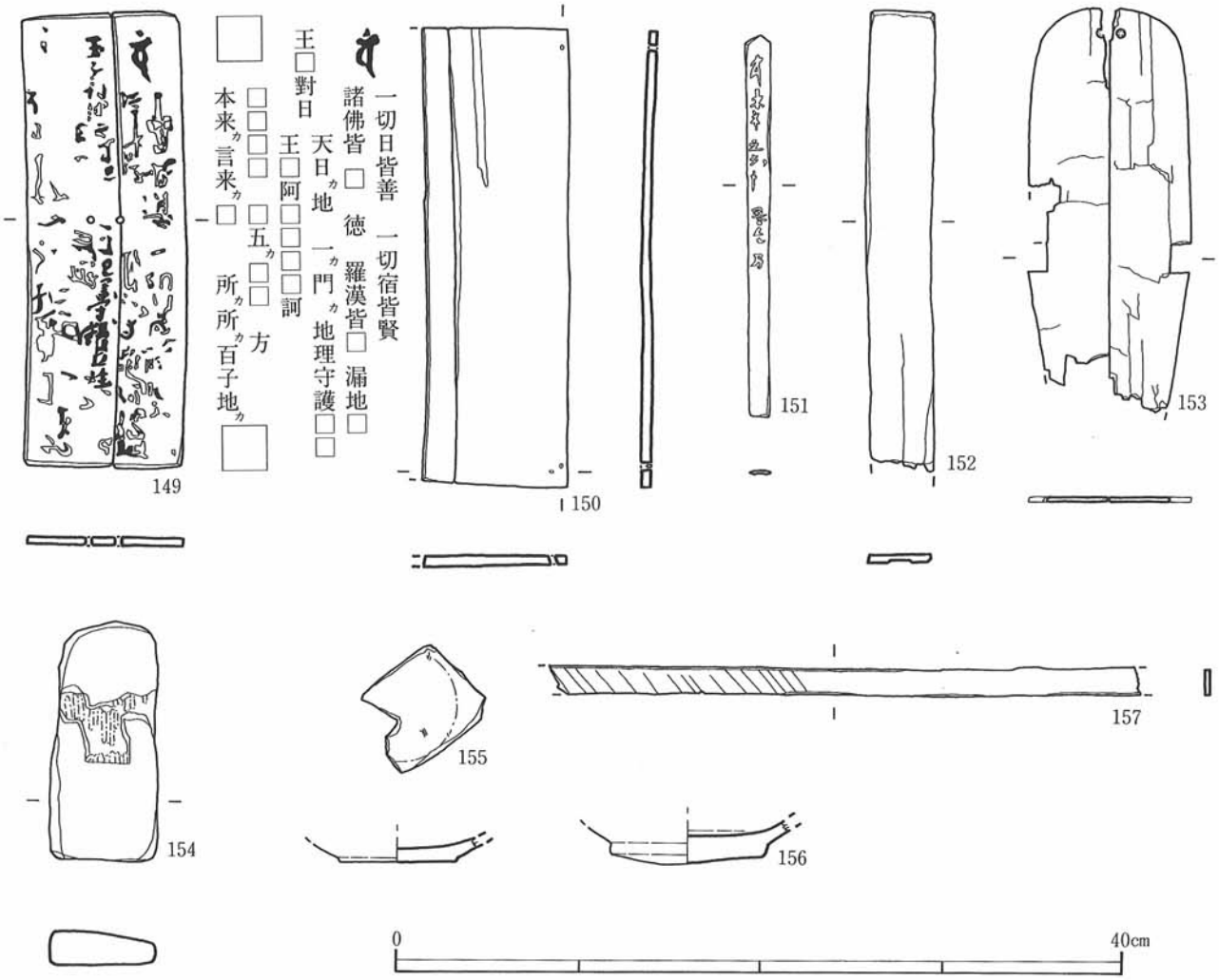


第31図　土製品・鋳造関連遺物実測図

にはあらいハケ目が見られる。把っ手は欠失する。121は有孔土師器皿。径0.2cmの孔が体部に穿たれる。底部は糸切り。

掘立柱建物を構成する柱穴・その他の柱穴出土の遺物（第30図　図版15・16）

122～127は土師器皿。口径4.6～7cm。内外面ともにナデ。内底面は静止ナデで、底部は糸切り。板目痕を残すものもある。129～133は土師器皿。口径9.6～13.4cm。焼成はやや軟質である。128・134・135は土師器杯。128は底部がわずかに外に開き高台となる。135は体部内面はケズリ後ナデ調整。底部は糸切り。

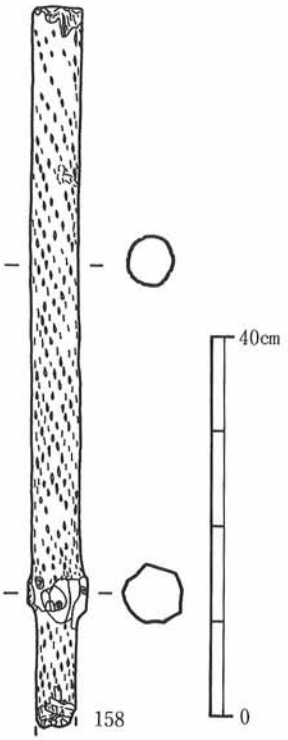


第32図 木製品実測図①

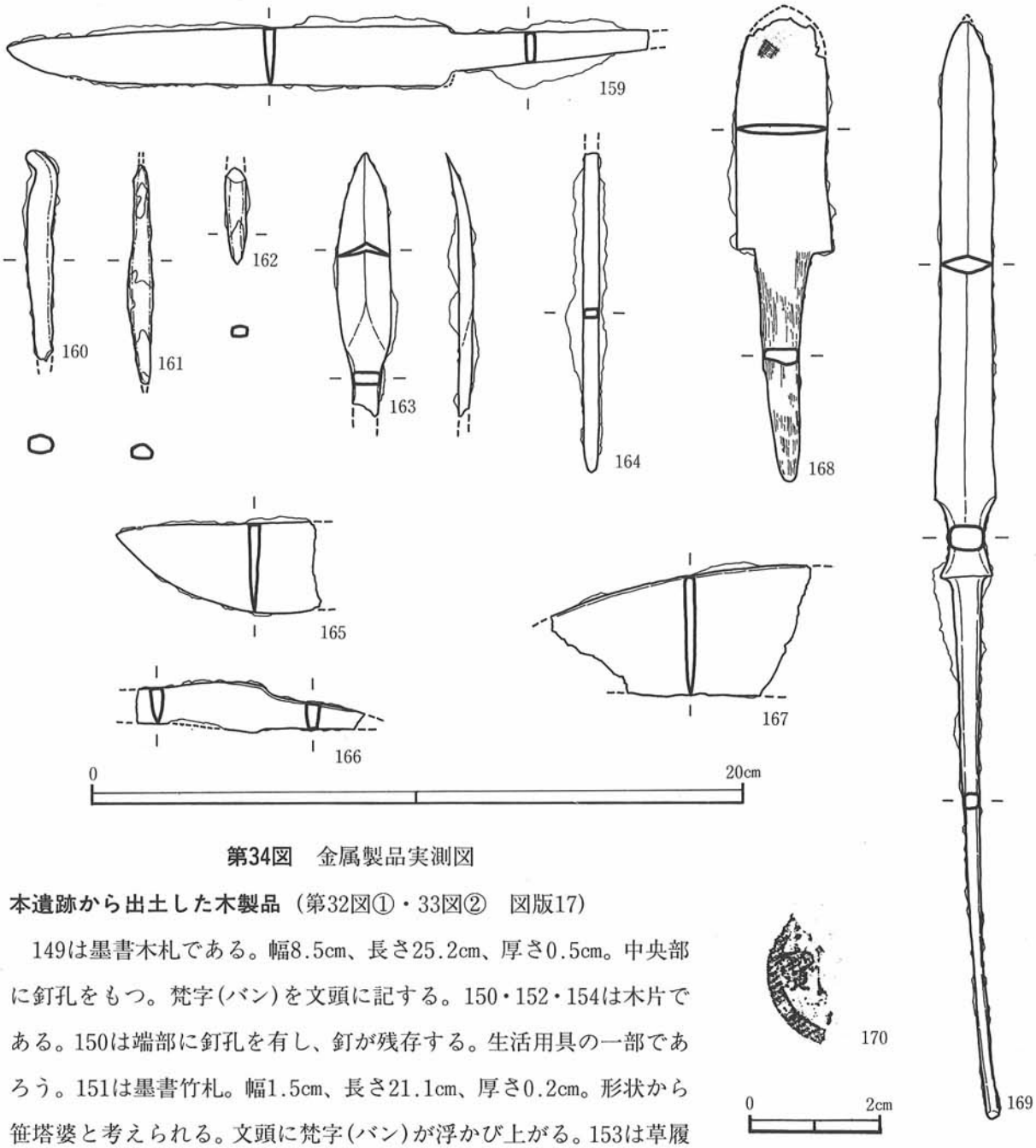
136は土師器の甕。口縁端部は「く」の字状に屈曲する。137は足鍋。外面はナデ。内面はハケ目調整。脚部を欠失する。底部に格子状の叩き痕を残す。138・139は緑釉陶器。138は釉を全面に施し淡い緑色を呈する。壺の底部か。139は椀底部片。胎土は灰白。貼り付けの低い高台をもつ。全面に施釉。140は須恵器高台付杯。体部は稜をもちながらやや外反気味にのび、口縁端部がわずかに外へ開く。低い貼り付け高台を有する。

本遺跡から出土した土製品・鋳造関連遺物（第31図　図版16・17）

141は有孔土製円盤。中央に径0.5cmの孔を穿孔する。土師器皿の底を転用した可能性もある。142～144は坩堝。142は半球状で内壁に溶滓が付着する。厚さ2.2cm。外面に焼きぶくれが見られる。143は炉壁の壁体が付着した痕跡が見られるが内部に溶滓の融着は見られない。口縁から内面にかけて指のナデ上げ痕を残す。144は口縁部周縁・内壁に黒色溶滓の付着が見られる。口径16.5cm、器高7.9cm。145・146は鞴羽口。孔径3cmで先端には溶滓が付着する。147・148は円筒状の溶解炉と推定される炉口と炉底片である。口径は推定で29cm。炉高は不明。高熱を受けた炉壁は橙色を呈し亀裂を生じる。



第33図 木製品実測図②



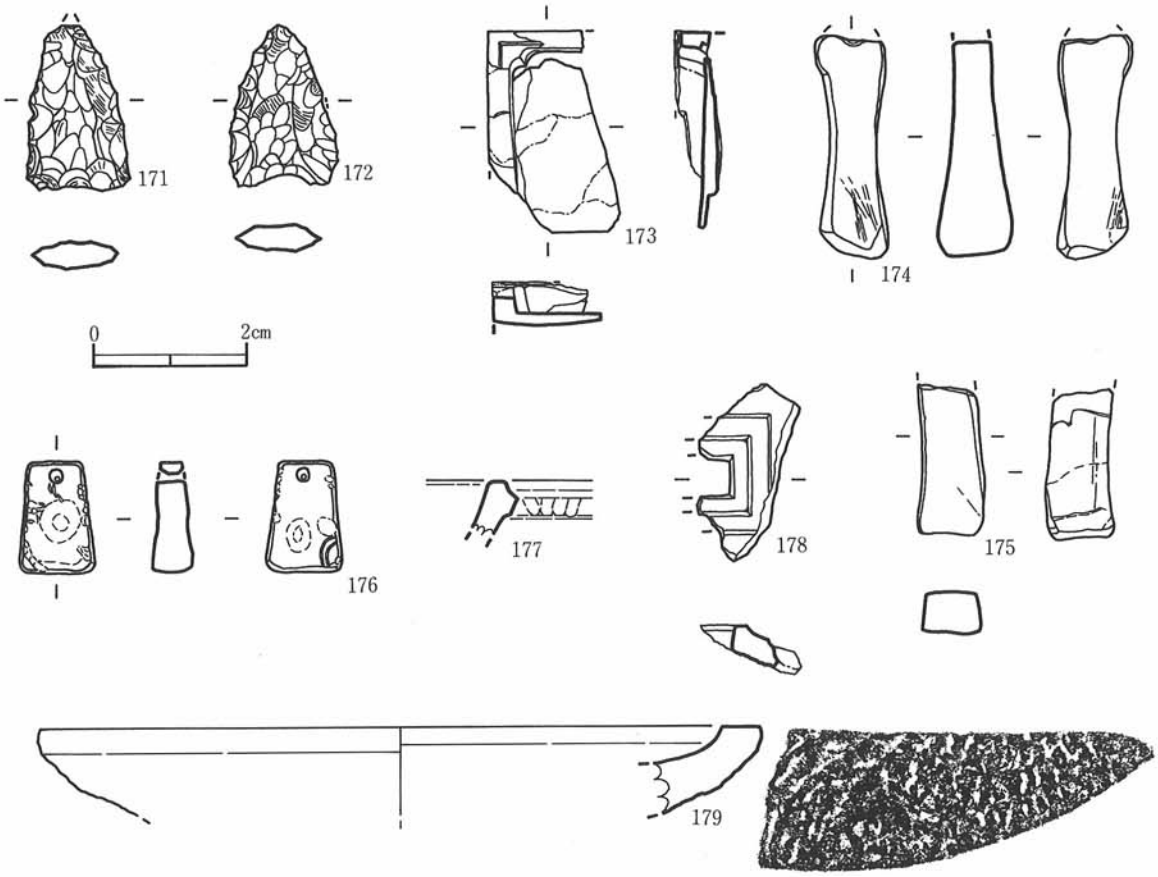
第34図　金属製品実測図

本遺跡から出土した木製品（第32図①・33図②　図版17）

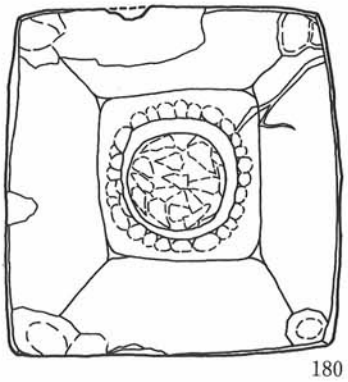
149は墨書木札である。幅8.5cm、長さ25.2cm、厚さ0.5cm。中央部に釘孔をもつ。梵字(バン)を文頭に記する。150・152・154は木片である。150は端部に釘孔を有し、釘が残存する。生活用具の一部であろう。151は墨書竹札。幅1.5cm、長さ21.1cm、厚さ0.2cm。形状から笹塔婆と考えられる。文頭に梵字(バン)が浮かび上がる。153は草履状木製品。二枚の薄板を左右対称に削り整え芯板にする。端部に孔が開けられ側縁部に切り取りがある。幅8.8cm、残存長22.4cm、厚さ0.3cm。155・156は漆椀の底部片。155の内面に赤色の模様がわずかに残る。157は曲物。曲げるのをたやすくするため内面に切り込みを入れている。端部に釘孔あり。158は用途不明の木製品。断面は円形で径は4.9～6cm。表面に削痕を螺旋状に施す。端部を欠失する。残存長74.7cm。

本遺跡から出土した金属製品（第34図　図版18）

159は鉄刀子。残存長19.6cm、身部長13.5cm。茎部は断面が方形で長さ6.1cmが残存している。160は鉄釘。残存長6.5cm。先端部を欠損する。161は漁具（箝）か。両端部欠損。残存長6.7cm。162は用途不明の銅製品。断面は方形で先端は尖る。残存長2.4cm。163は鉄鉋。茎部が欠損。刀部長6.4cm。刀部先端は反り上がり尖る。厚さ0.4cm。164は鉄鏃の茎か。断面は方形で残存長9.8cm。165は鉄包丁の刀

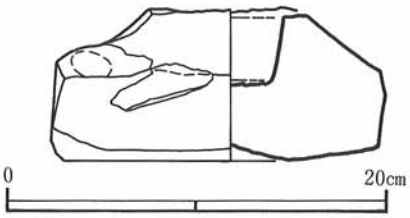


第35図　石製品実測図



部か。残存長6.2cm。166は鉄刀子。刀部と茎部を欠損する。茎部の断面は方形である。167は鉄鎌の刀部か。残存長 8 cm。168は鉄鏃。刀部の先端を欠損。残存長14.2cm、茎部長 7 cm。刀部の先端に布目痕、茎部に木質痕が認められる。169は鉄槍。全長は33.3cmで刀部長14.5cm、身部長2.4cm、茎部長16.6cmと茎部が長い。断面は刀部が菱形、身部と茎部が方形。身部が大きく縊れる。刀部の先端がわずかに欠損している。170は銅銭。「宝」の一字をとどめるが銭種は不明である。

本遺跡から出土した石製品（第35図　図版18）



171は安山岩製の石鏃。鏃身部の先端を欠く。172は玄武岩質の石鏃である。173は硯。海部の左端の破片で赤色頁岩製である。角は直角で平面は長方形と思われる。174・175は砥石。ともに短冊型で凝灰岩製。石材の粒子が細かいので仕上砥か。174は四面に使用の痕跡があり摩滅が著しい。175は三面に使用の痕跡あり。176は有孔石製品。滑石製。短辺に寄り中央部に穿孔を有する。長さ5.8cm、幅 4 cm。用途不明。177は石鍋の口縁部の破片。滑石製。外面は削痕を残すが内面は平滑にする。178は茶臼側面の破片。方形の挽手穴である。砂岩製。179は茶臼の下臼。内面は使用によって摩滅し外面に削痕をよく残す。180は五輪塔の火輪。平面は正方形で断面は下方上台形をなす。軒線棟線ともに弯曲しており、側面を垂直に整形。上下両面に円形の彫り込みがあり鑿の整形痕を残している。徳山市四熊ヶ岳産の角閃石安山岩製。

Ⅴ まとめ

東禅寺・黒山遺跡の発掘調査は平成７年に調査を開始し、５か年が経過した。これまでの調査面積は、約12,300㎡に及ぶ。この間に掘立柱建物跡134棟、土坑・井戸163基、溝・溝状遺構77条、柱穴約7,400個の遺構が検出され、多量の遺物が出土した。本年度の調査区（Ⅷ地区）の南西側と北西側には、平安時代の遺構が数多く検出された平成８・10年度の調査区（Ⅳ・Ⅵ地区）が近接し、東側と北側には、室町時代の遺構・遺物が数多く検出された平成７・９年度の調査区（Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ地区）が近接する（第２図）。

今回の調査では、59棟もの掘立柱建物跡が検出された。室町時代の建物は、35棟確認できた。そのほとんどは、Ⅷ地区の中央以北に集中する。その傾向は、溝で囲まれた調査区北東側において顕著である。このことは、室町時代の井戸の分布と同様である。Ⅷ地区が、屋敷地を区画すると考えられる溝が検出されたⅤ地区に近接していることから、本遺跡周辺の室町時代（15～16世紀）における集落は、主にⅧ地区の中央部より北東および東方向に展開するものと考えられる。なお、こうした区画割をもつ中世集落は、近隣の上辻、鋳銭司大歳、今宿西遺跡からも発見されており、鋳銭司地区の中世集落の広がりと集落の形態を知る手がかりとなりそうである。

平安時代の建物は18棟が検出された。そのほとんどが、Ⅷ地区の西側および南西側に集中し、北東側ではほとんど検出されなかった。このことは、平安時代の集落がⅧ地区の中央から西側の金毛川に向かって約60ｍの範囲、Ⅷ地区南西端から南西方向に約50ｍの範囲において展開していることが確認できたことになる。Ⅷ地区の南西端周辺には内部が赤く焼け締まっているＳＫ30など、９世紀後半の土坑群があり、坩堝・鞴羽口・溶解炉の一部などの鋳造関連具、銅滓および緑釉陶器などが出土し、さらにⅧ地区の中央において火床炉１基が検出された。また、土坑群から南西約30ｍに位置するⅥ地区の土坑や柱穴から坩堝・鞴羽口・緑釉陶器・三叉トチンが出土していることから、周辺に緑釉陶器生産や鋳造関連の工房が存在したことをうかがわせる。なお、Ⅳ地区における遺構面の標高は、Ⅷ地区の南西端周辺より0.7ｍ低位である。このことは、中世集落よりやや低位な西側および南西側に広がる平安時代の集落の中でも、南西側の地区に工房が配置されていたことが考えられる。今回検出された土坑群の時期（９世紀後半）は、周防鋳銭司において皇朝十二銭を鋳造された時期に符合する。この場所は西方を南流する金毛川を隔てて周防鋳銭司跡から約250ｍである。また、遺跡の東約750ｍの場所には黒山八幡宮がある。黒山八幡宮は、鋳造に関係のある神「黒山の神」を祀ったと伝えられる。以上のことから、東禅寺・黒山遺跡は周防鋳銭司跡と密接な関連のもとに存立した生産集落である可能性が高いと推定される。

山陽道が通じ「八千駅」に近接し、内海に面した古代の鋳銭司地域は、交通の便に優れた場所であり、さらに防府市大道から陶一帯にかけて良質の陶土の産出もみられることから、この地が精錬・鋳造および土器生産を中心とするいわば臨海工業地帯としての性格をもっていたと考えられる。

今後さらに古代の鋳銭司周辺一帯の生産集落の広がりや分布状況を精査し、地域的な集落構成の中で当遺跡の性格を追究していく必要があろう。

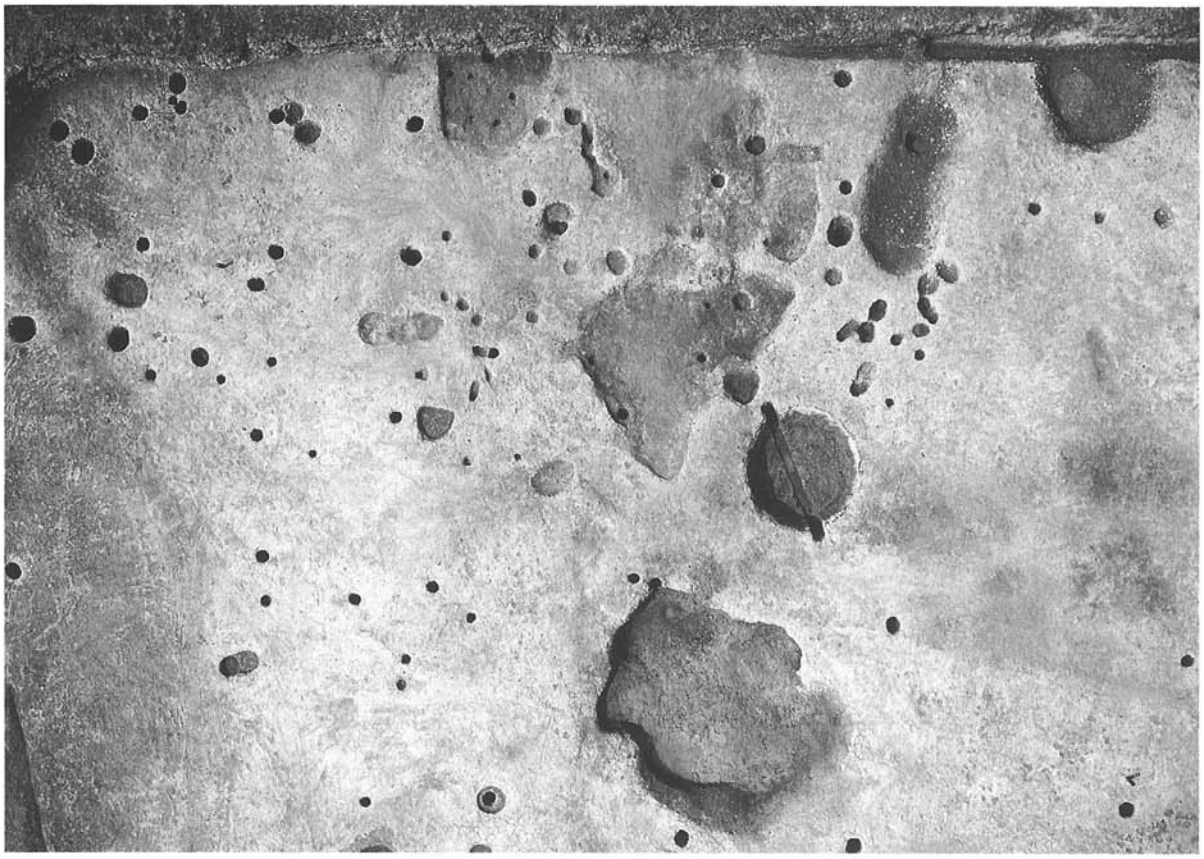
参考文献

山口市教育委員会　『周防鋳銭司跡』 1984年　山口県教育委員会　『上辻・鋳銭司大歳・今宿西』 1984年
山口市史編集委員会　『山口市史』 1982年　山口県教育委員会『歴史の道報告書・山陽道』 1983年

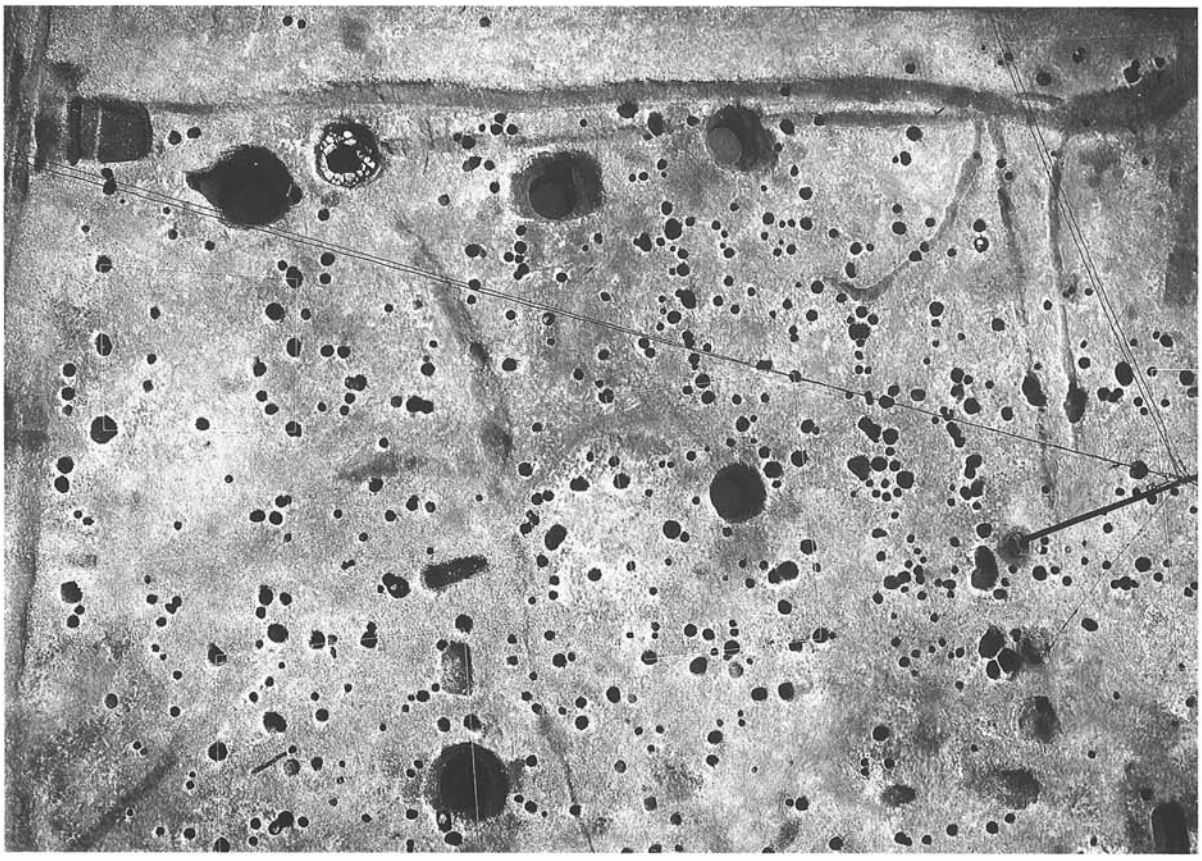
東から東禅寺・黒山遺跡を望む

調査区全景（西から）

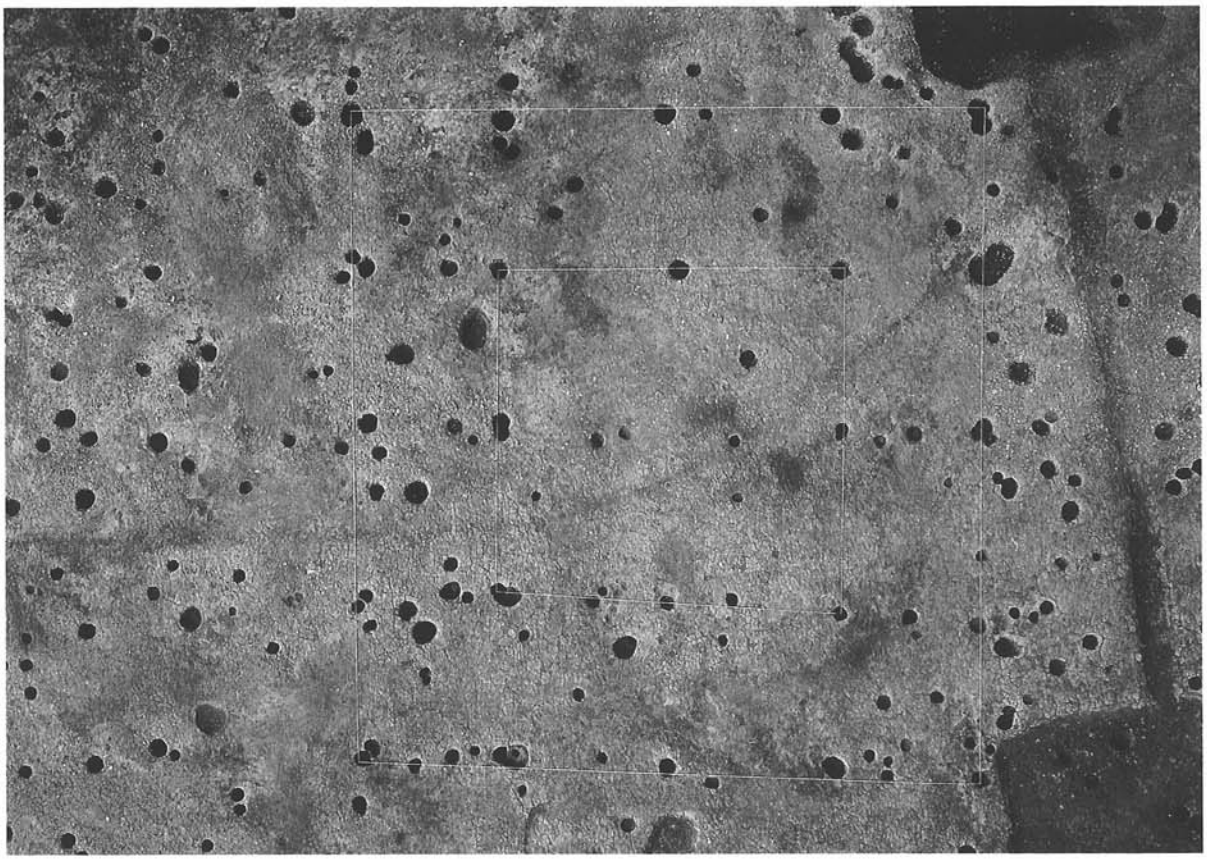
図版２



調査区南西側土坑群（東から）



調査区北東側井戸群（西から）

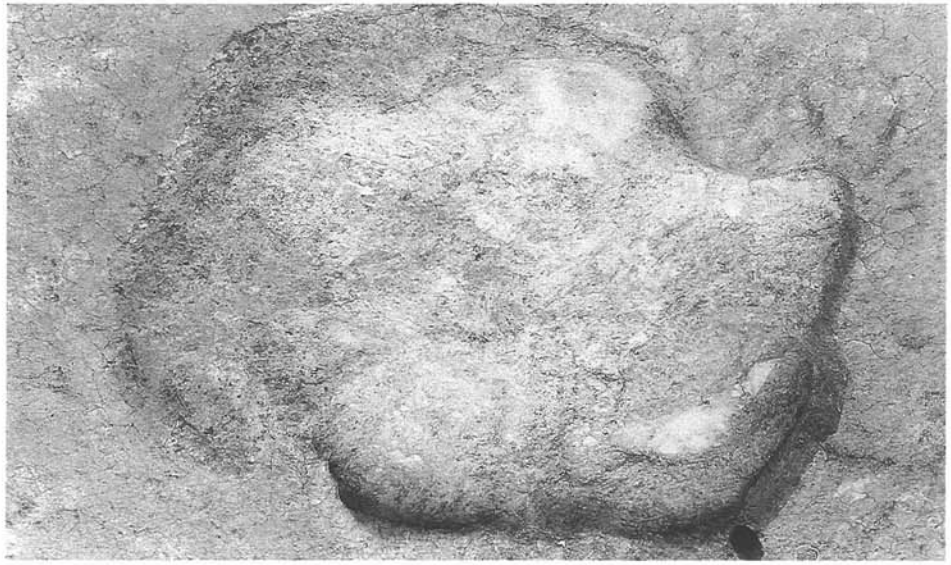


ＳＢ45（東から）

ＳＫ34出土状況①（東から）

ＳＫ27出土状況（東から）

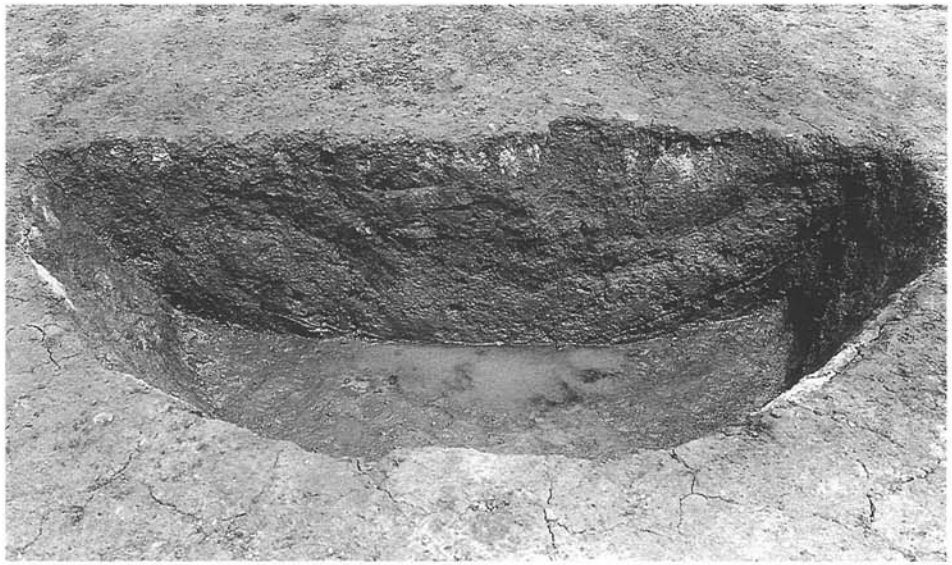
ＳＫ34出土状況②（東から）



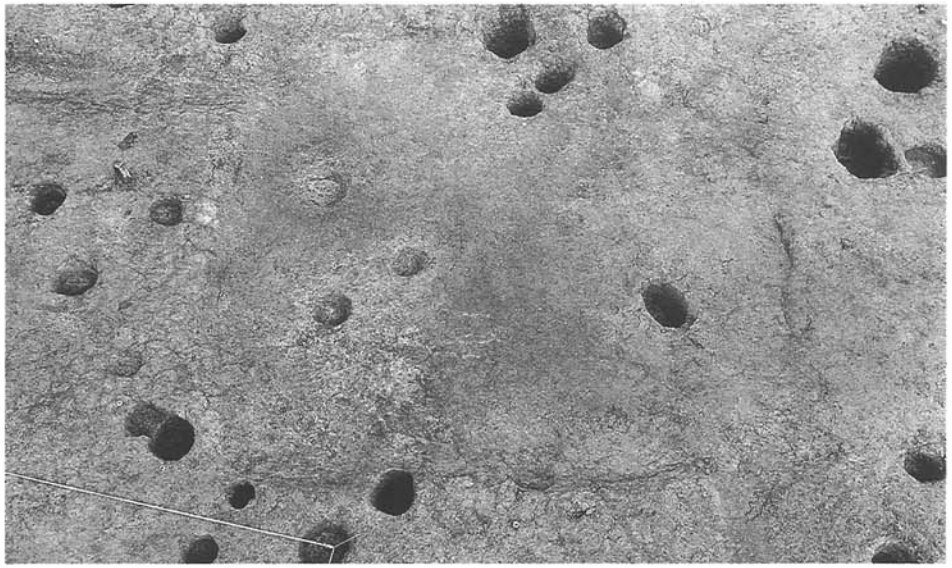
ＳＫ27完掘（東から）

ＳＫ34完掘（東から）

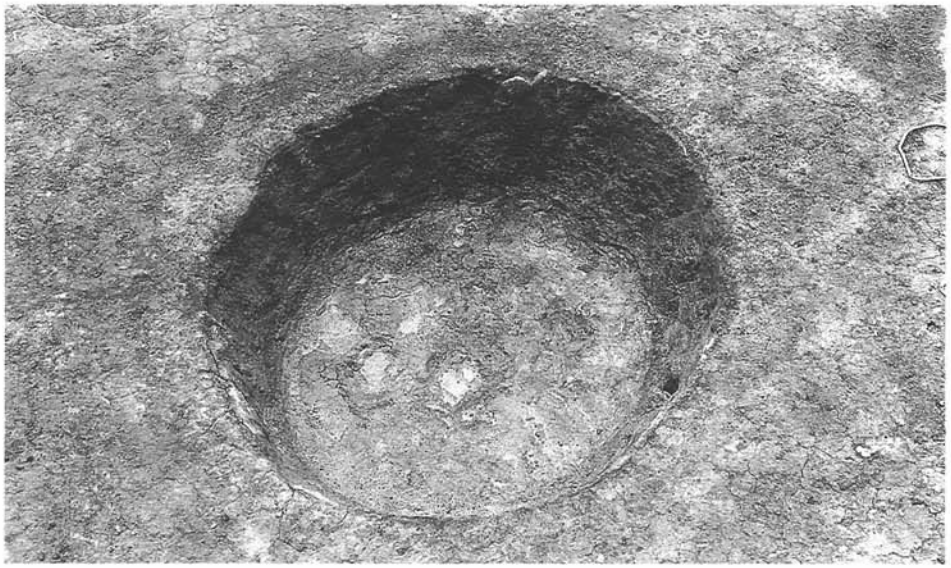
ＳＫ４出土状況（南から）



ＳＫ30土層断面（南から）



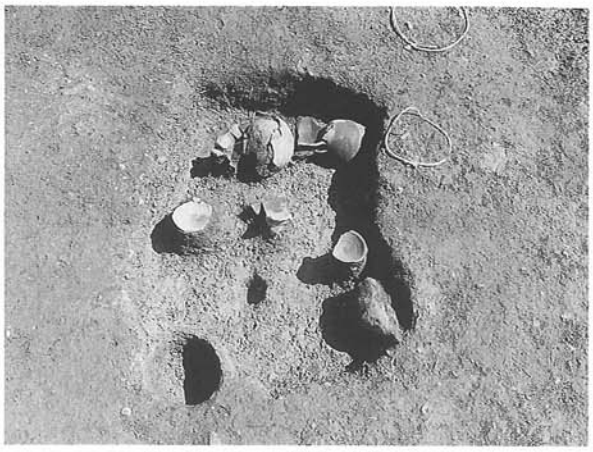
ＳＫ４完掘（南から）



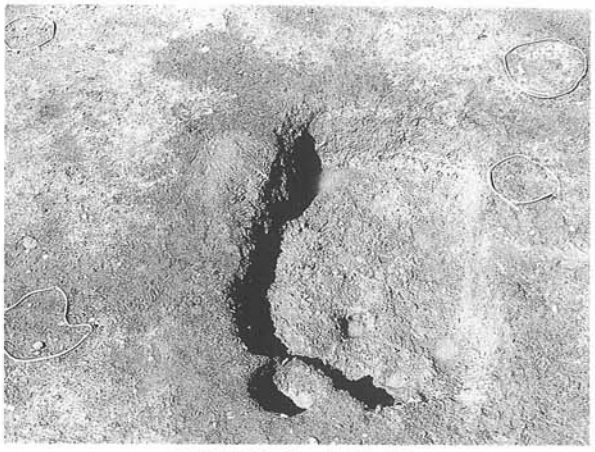
ＳＫ30完掘（東から）

図版５

図版６

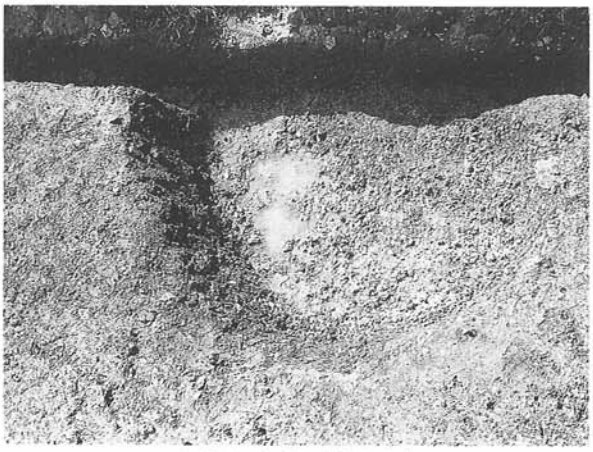


ＳＫ24出土状況（南から）



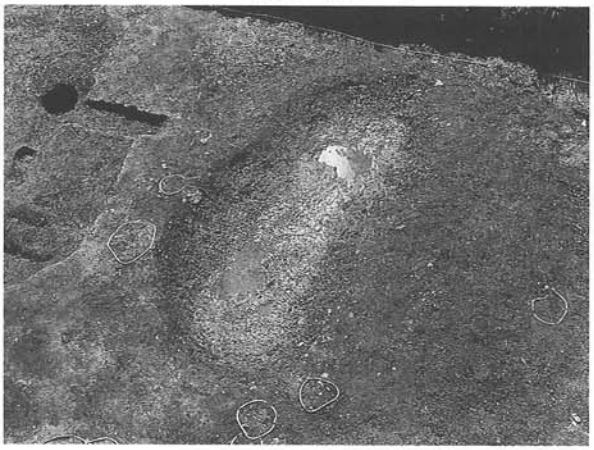
ＳＫ24完掘（南から）

ＳＫ32出土状況（東から）



ＳＫ32完掘（東から）

ＳＫ33出土状況（南から）

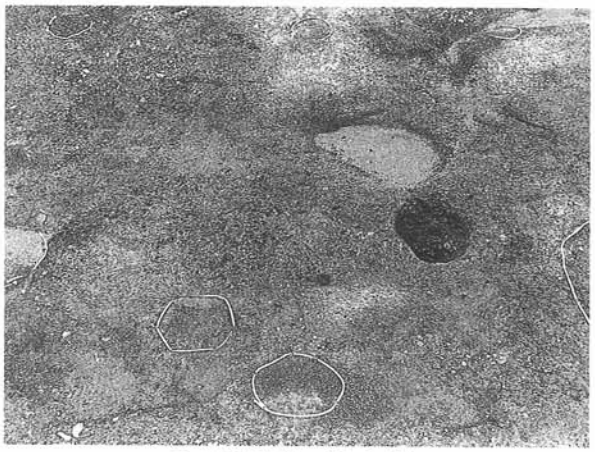


ＳＫ33完掘（東から）

ＳＫ36出土状況（南から）

ＳＫ36完掘（東から）

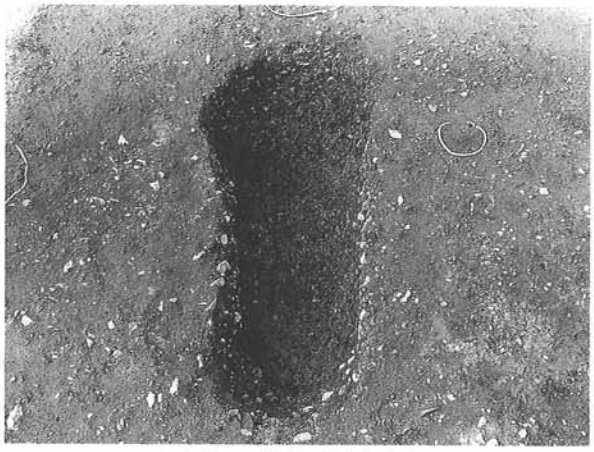
ＳＫ22出土状況（南から）



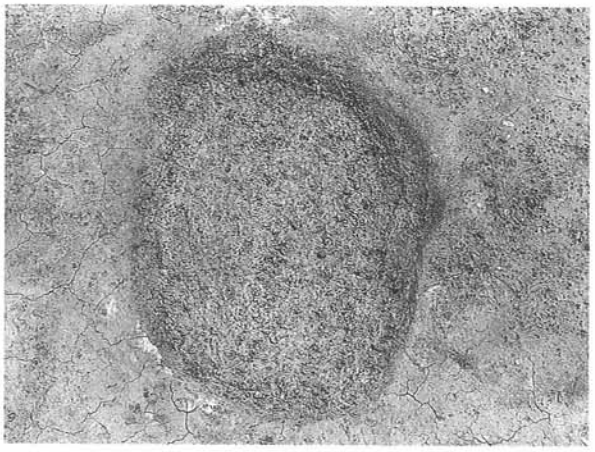
ＳＫ22完掘（南から）

ＳＫ９出土状況①（南から）

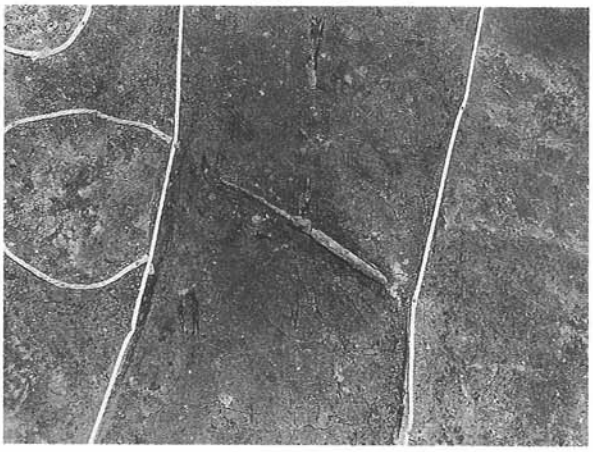
ＳＫ９出土状況②（南から）



ＳＫ９完掘（南から）



ＳＴ１完掘（南から）

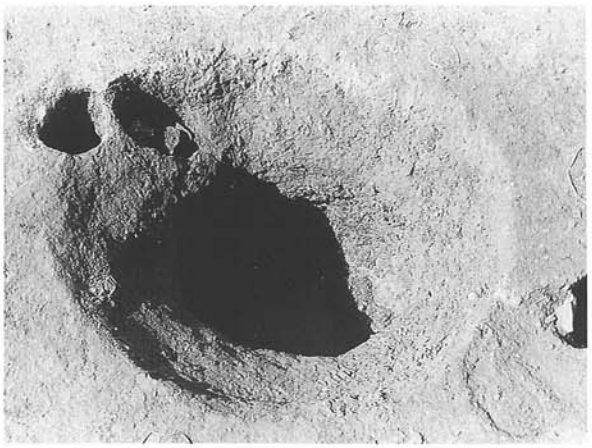


ＳＤ６出土状況（北から）

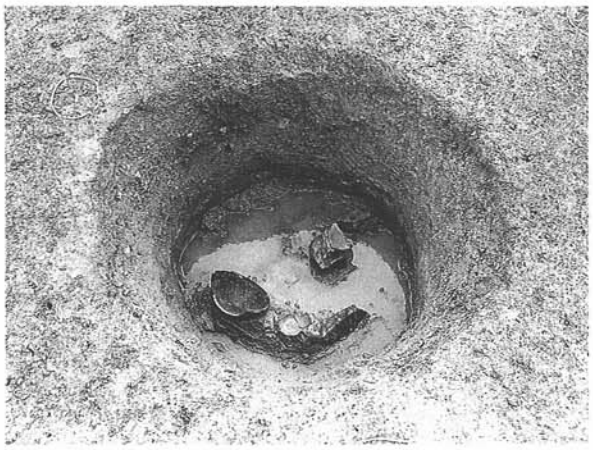
ＳＤ10出土状況（東から）

図版８

ＳＥ１完掘（東から）

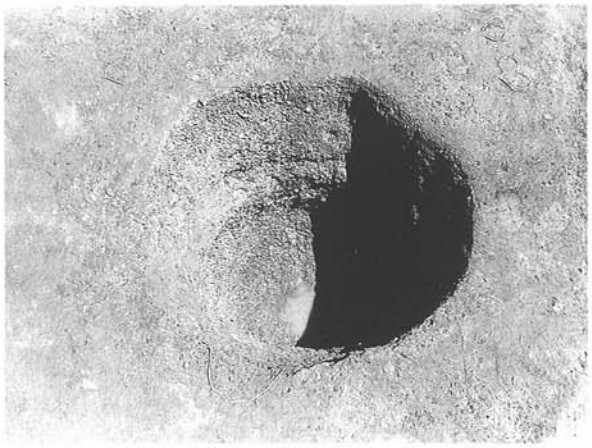


ＳＥ２完掘（南から）



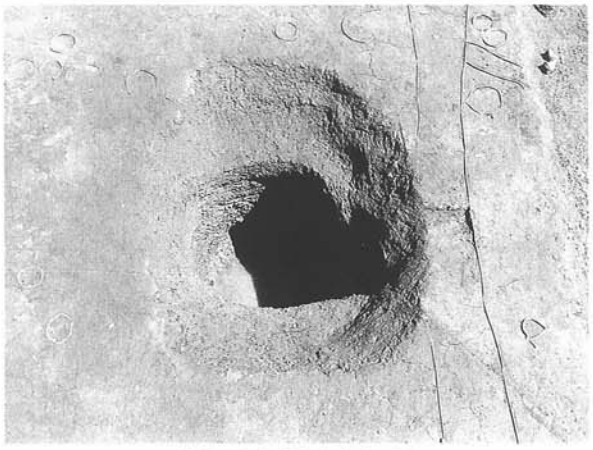
ＳＥ３出土状況（南から）

ＳＥ３完掘（南から）

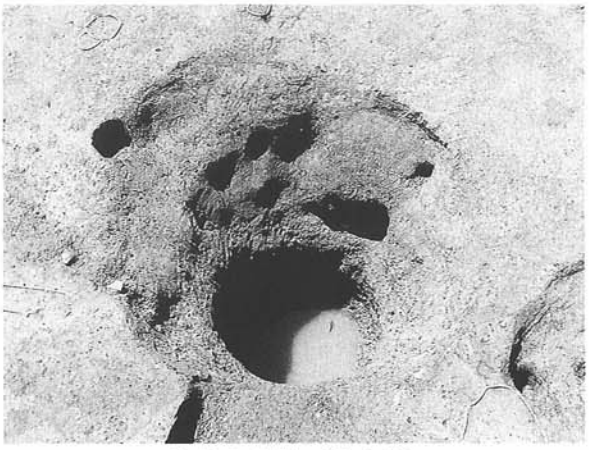


ＳＥ４完掘（南から）

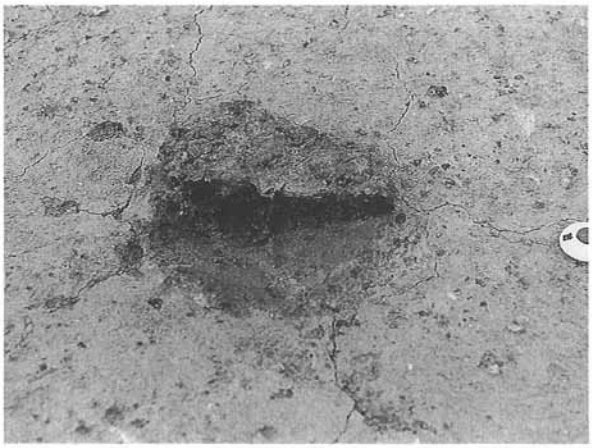
ＳＥ５完掘（南から）



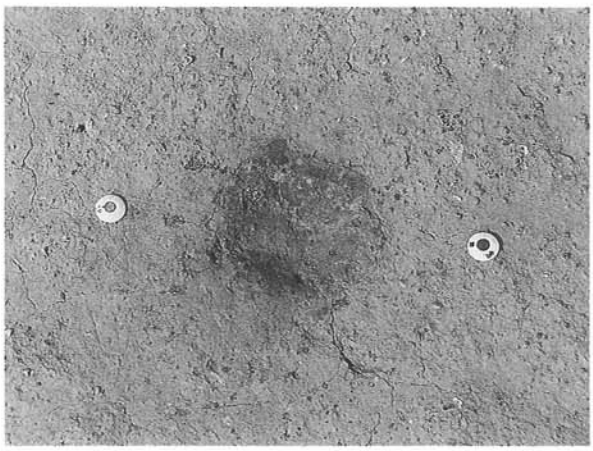
ＳＥ６完掘（南から）



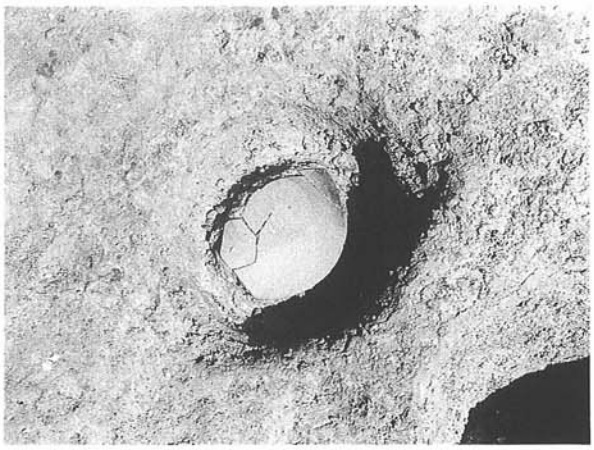
ＳＥ７完掘（東から）



ＳＸ１断面（東から）

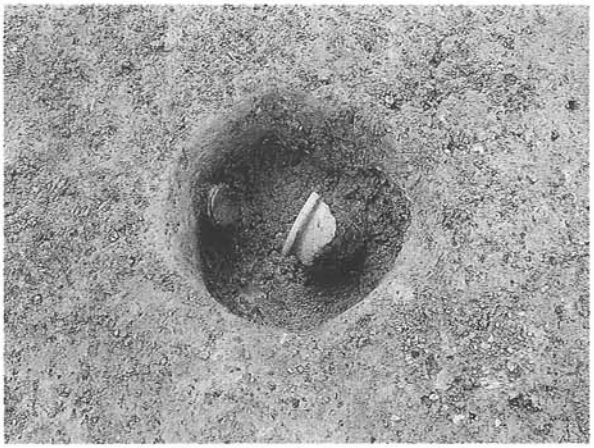


ＳＸ１完掘（東から）

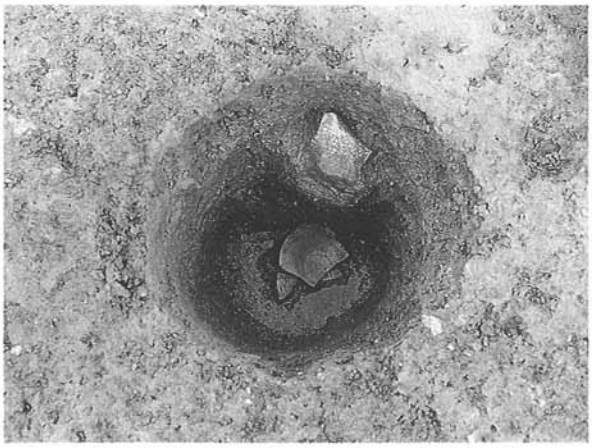


ＳＰ37出土状況（西から）

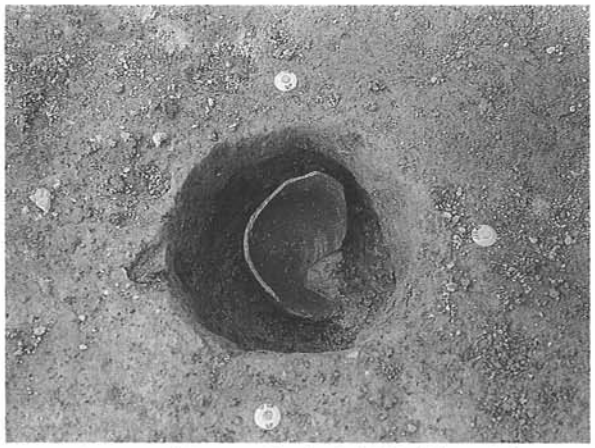
ＳＢ16（ＳＰ84）出土状況（南から）



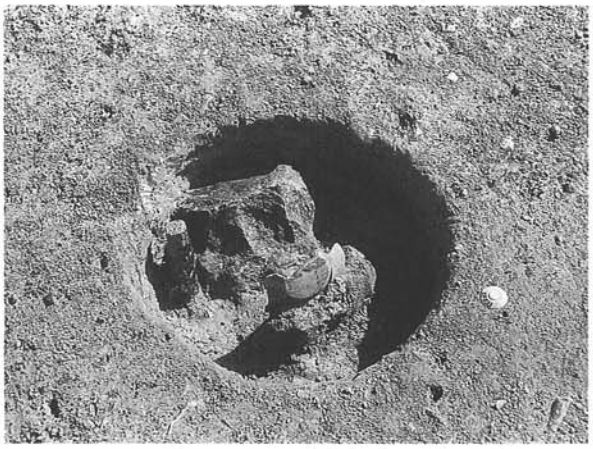
ＳＢ45（ＳＰ80）出土状況（東から）



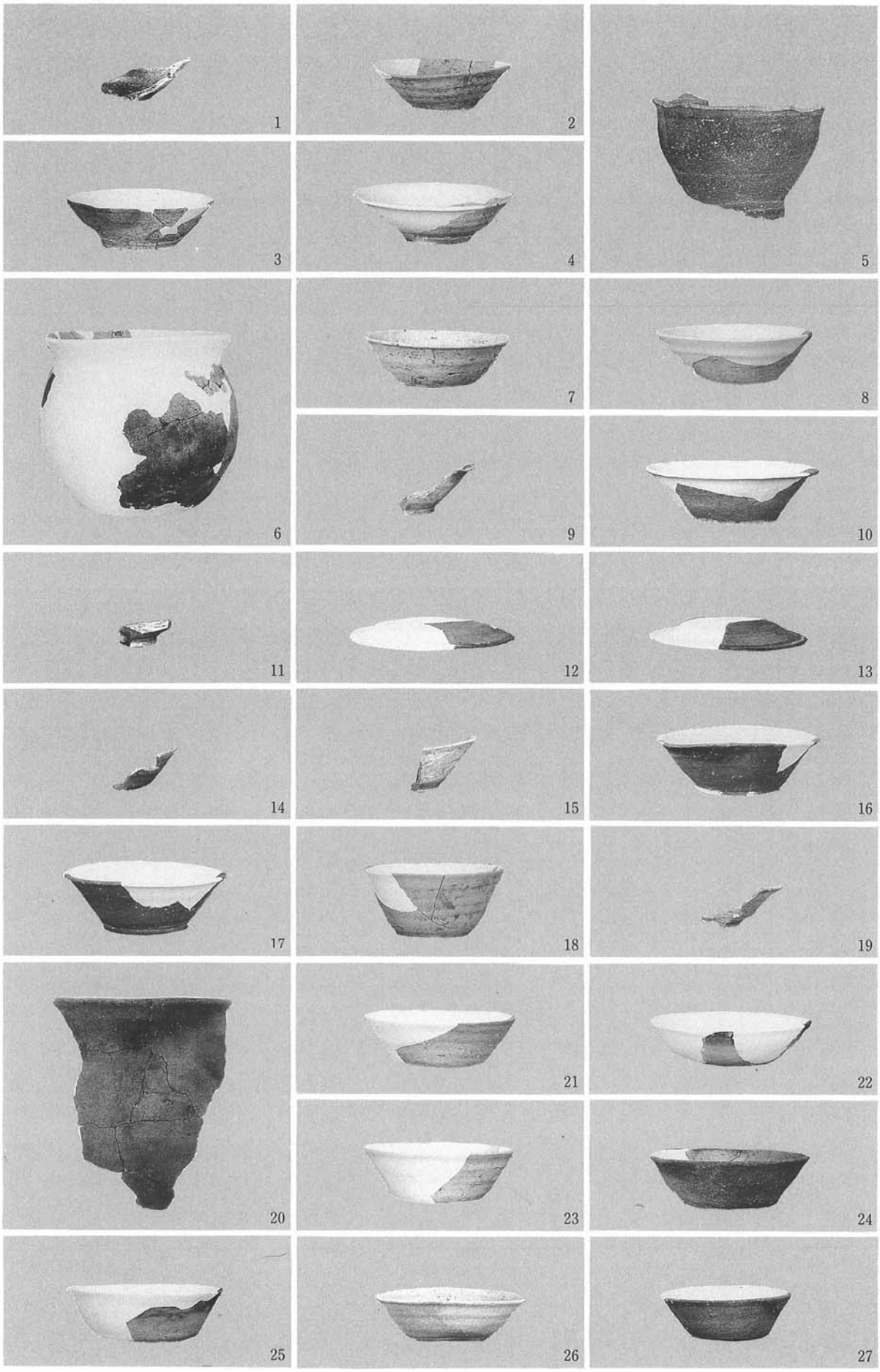
ＳＢ51（ＳＰ228）出土状況（南から）



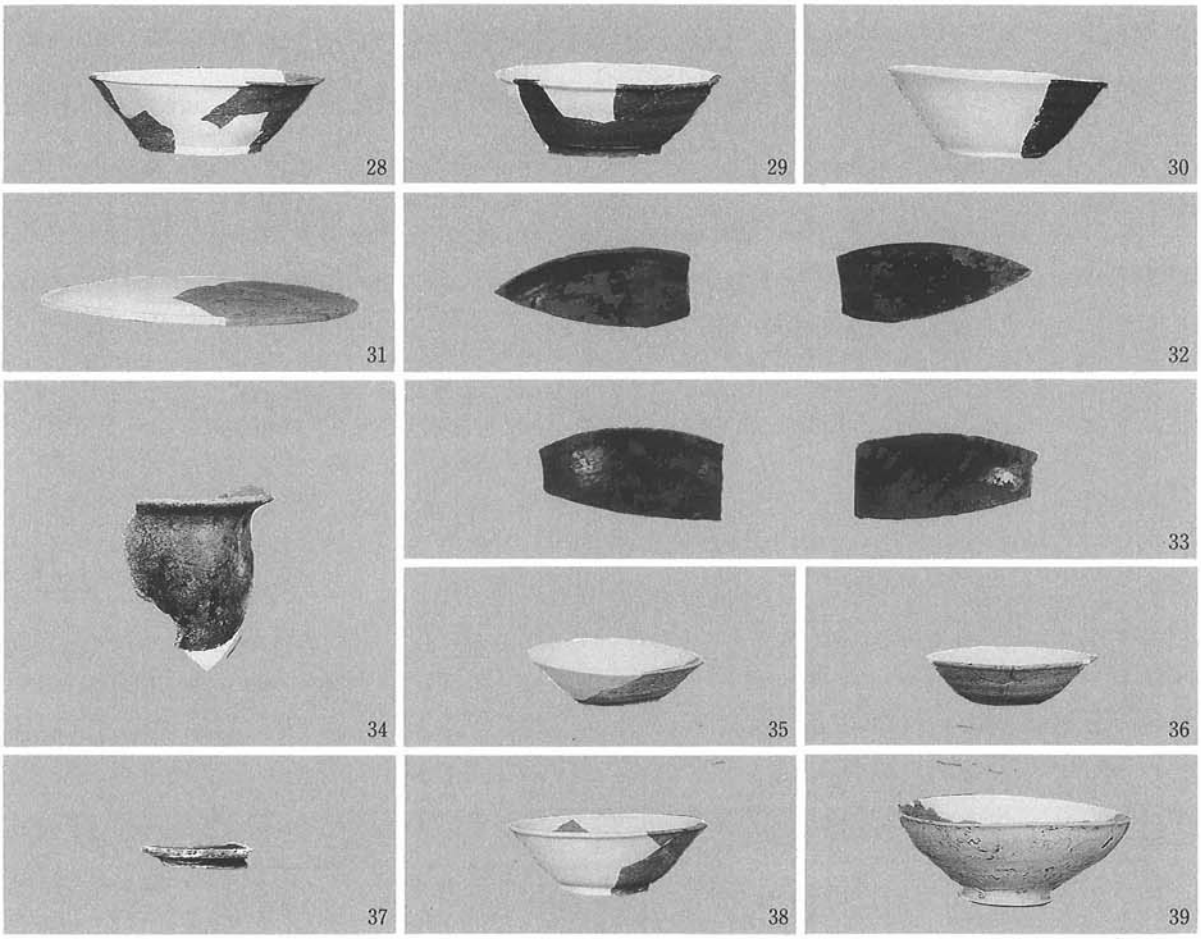
ＳＢ52（ＳＰ539）出土状況（南から）



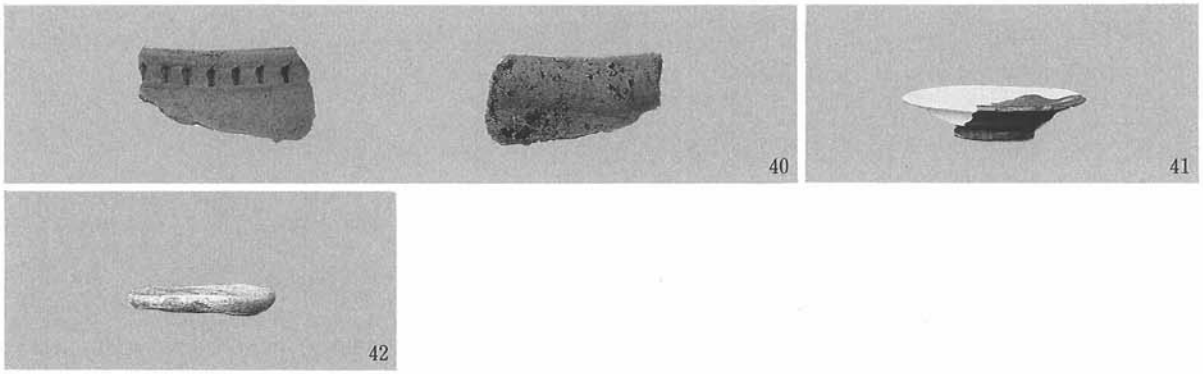
ＳＢ56（ＳＰ533）出土状況（北から）



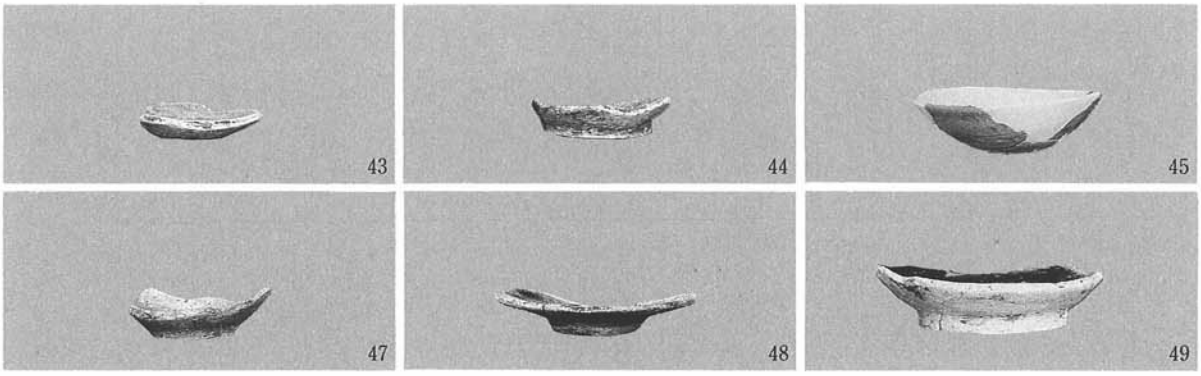
ＳＫ22・24・27・30・32・34 出土土器①



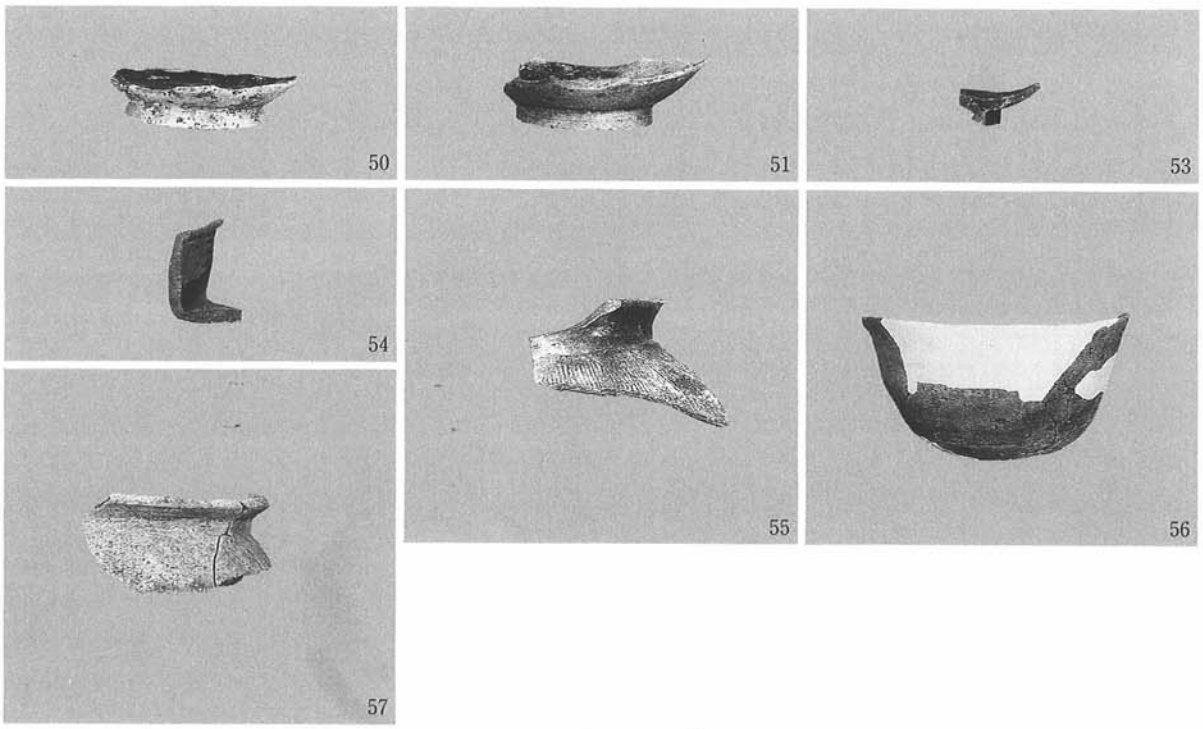
ＳＫ22・24・27・30・32・34 出土土器②



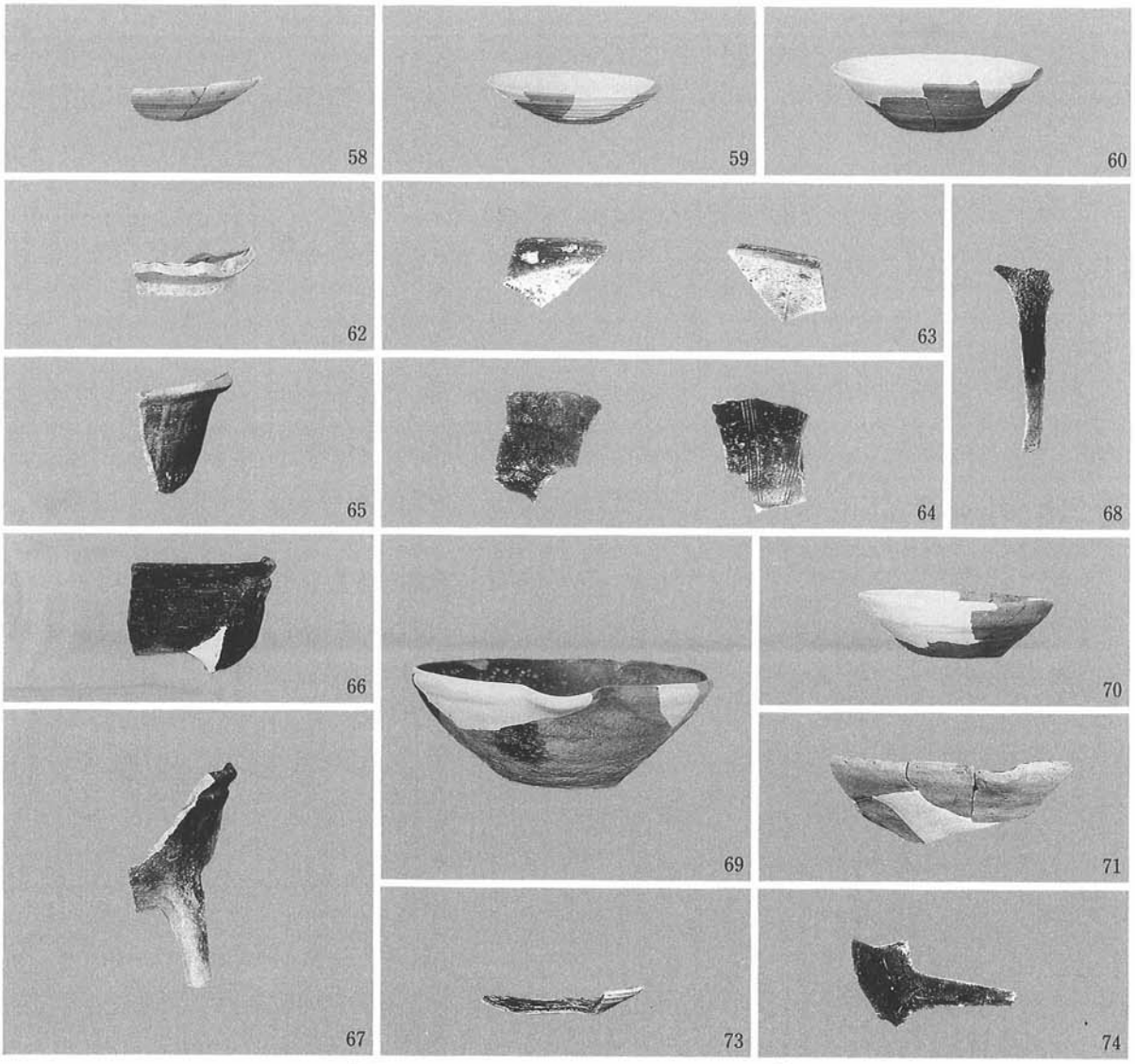
ＳＫ３・４・９ 出土土器



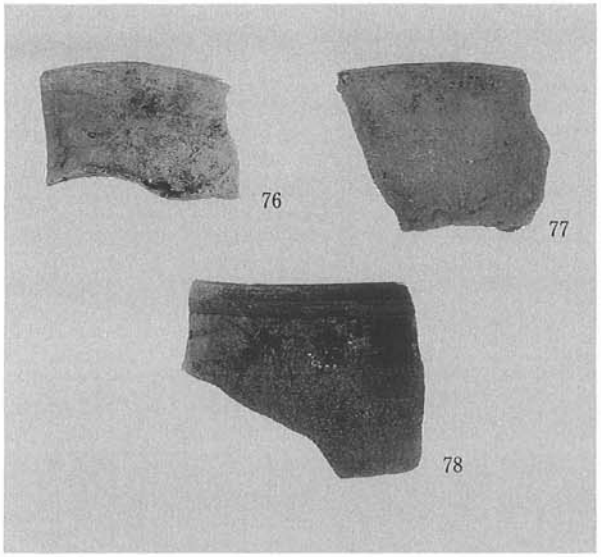
ＳＥ１出土土器①

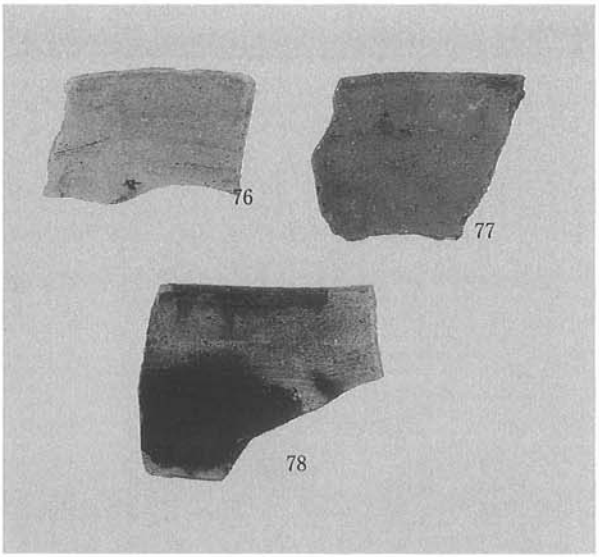


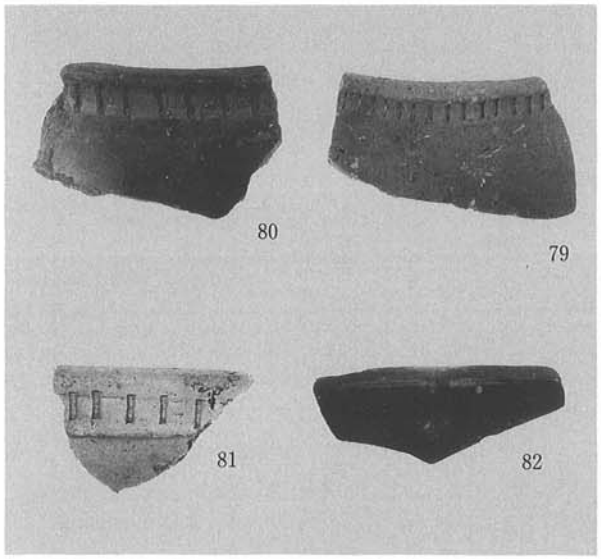
ＳＥ１出土土器②

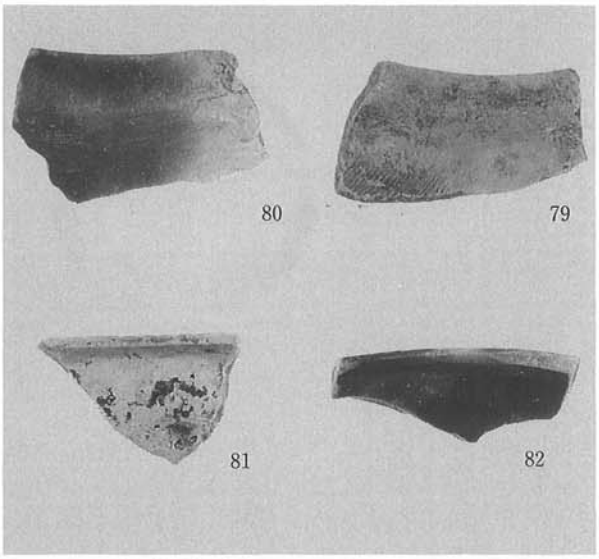


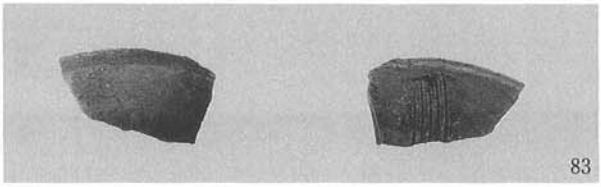
ＳＥ２・３・４・５・６・７出土土器①

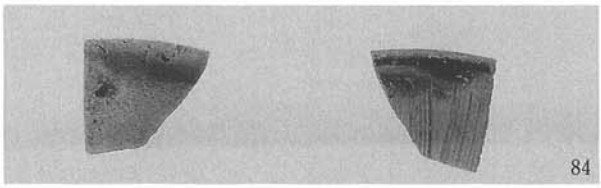


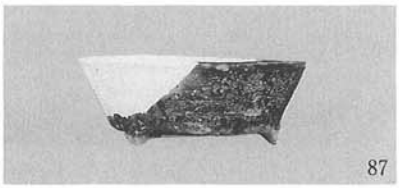


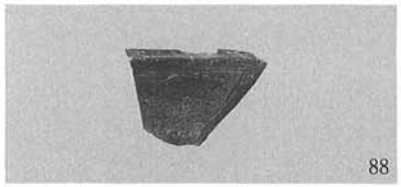


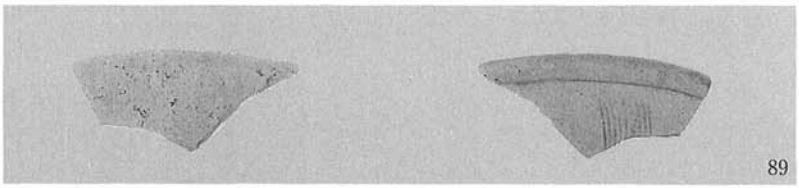


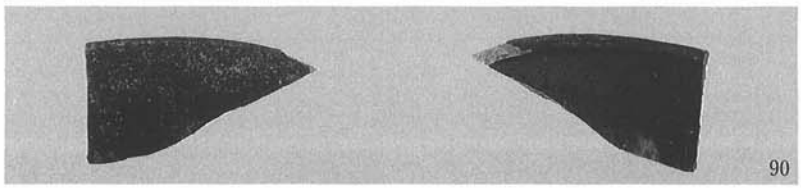


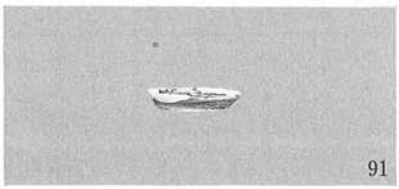




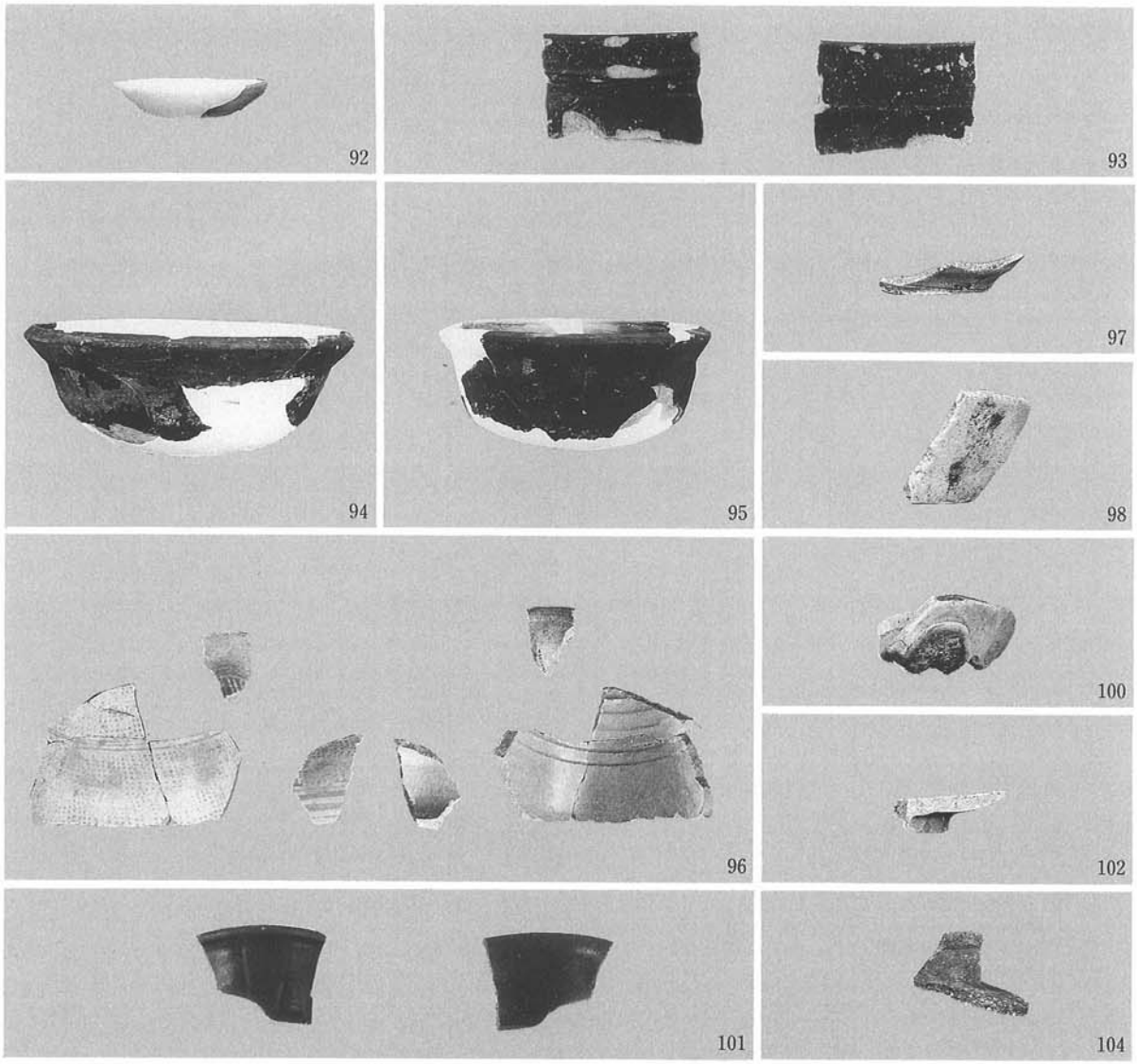




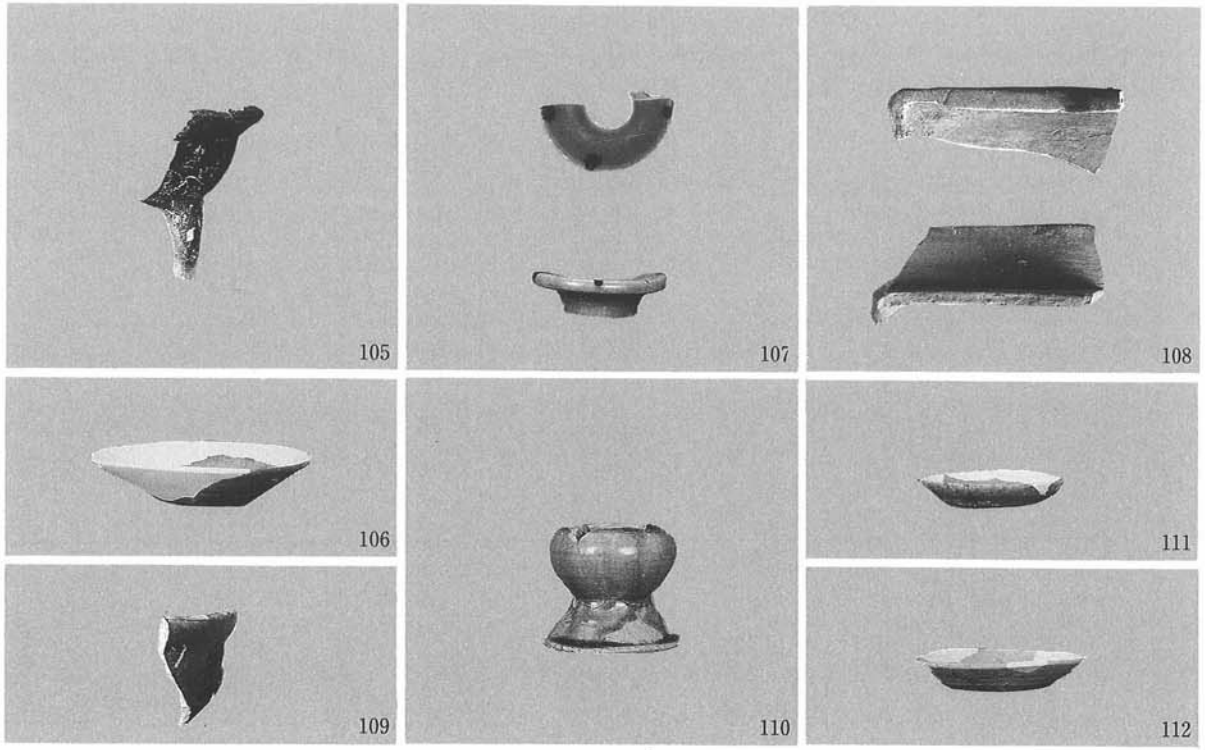




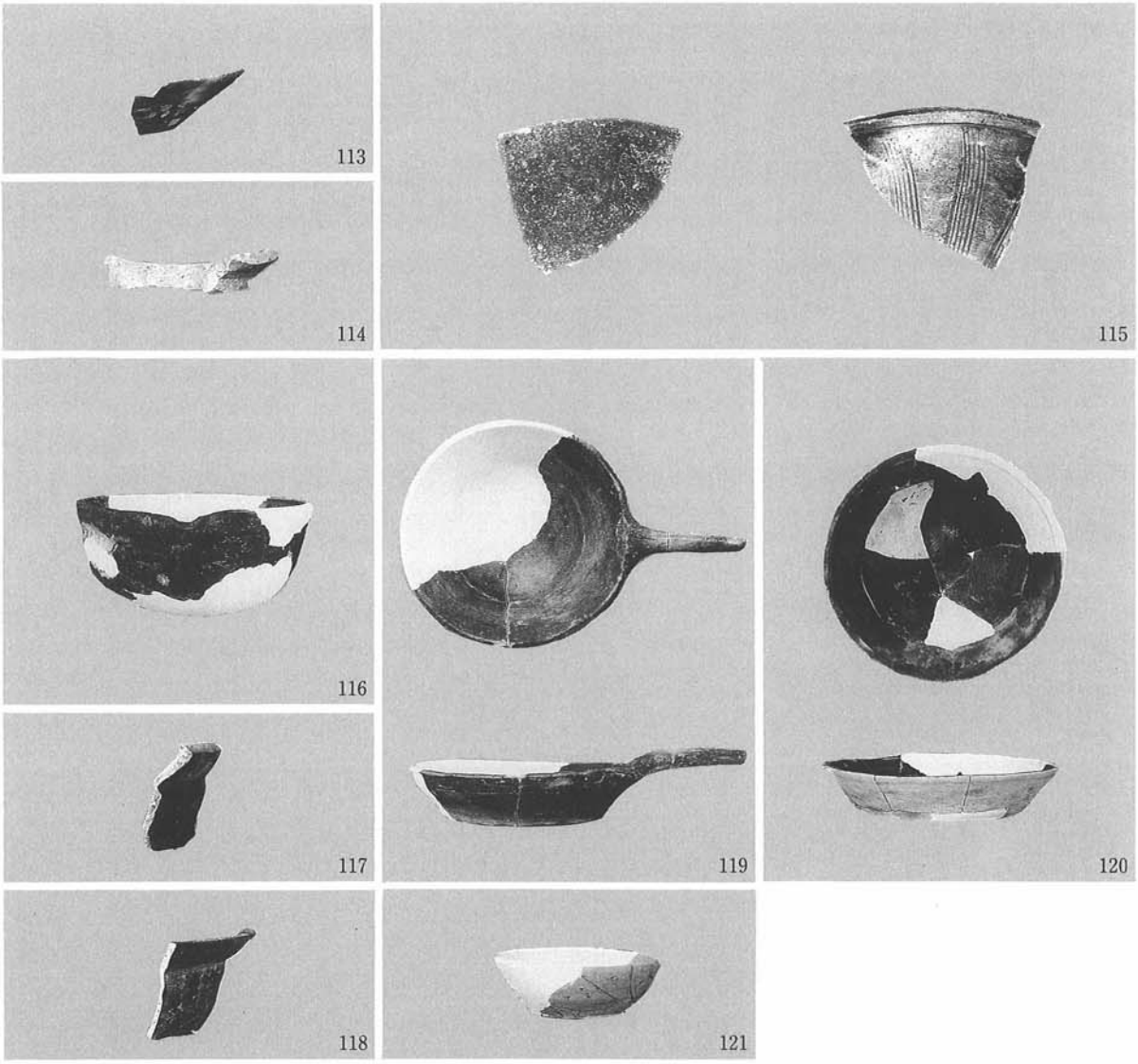
ＳＥ２・３・４・５・６・７出土土器②



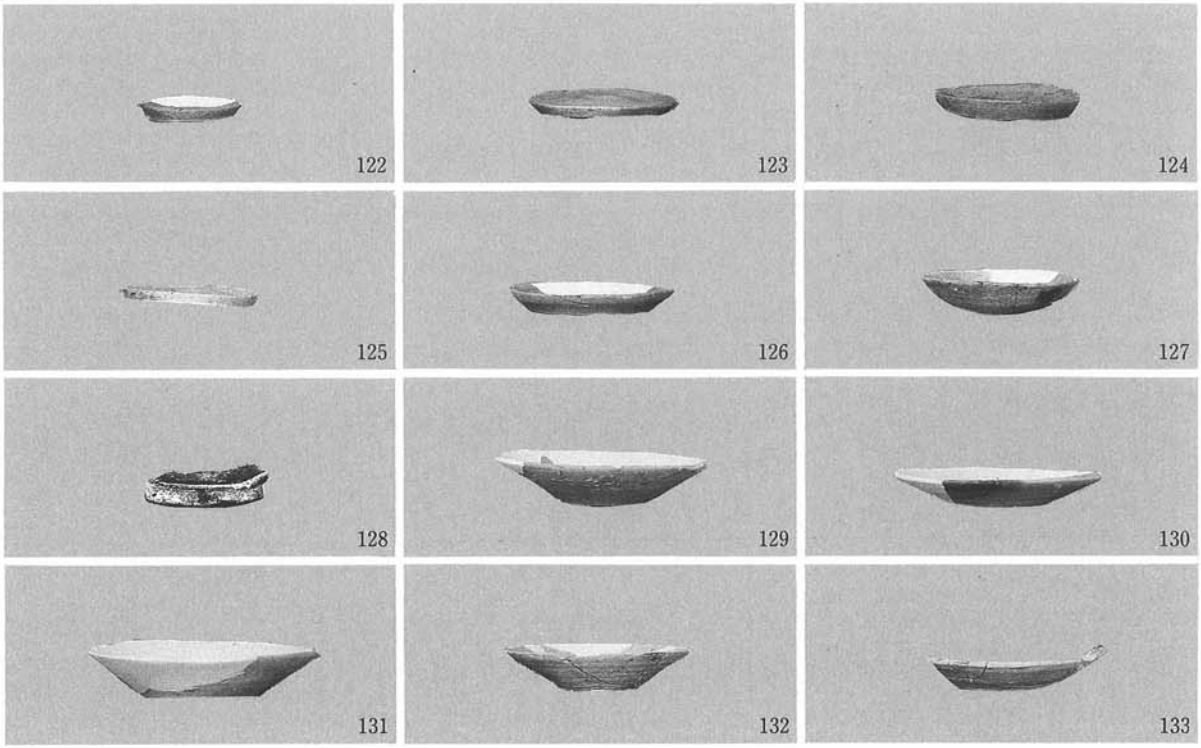
ＳＥ２・３・４・５・６・７出土土器③



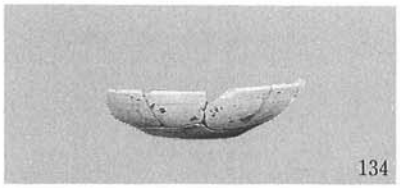
ＳＤ２・８・９・10・11出土土器①

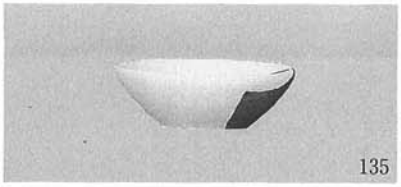


ＳＤ２・８・９・10・11出土土器②

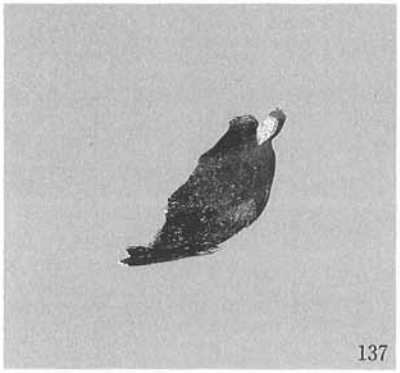


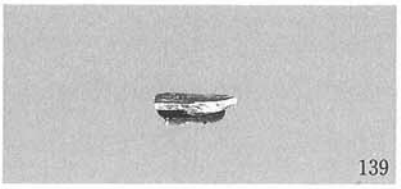
柱穴出土土器①


134


135

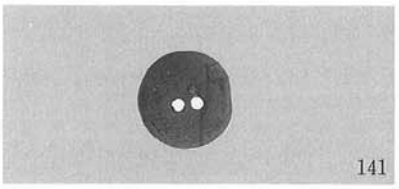
136

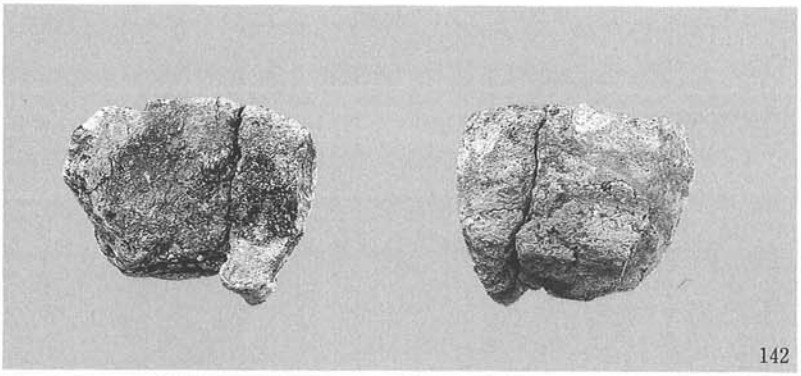

137

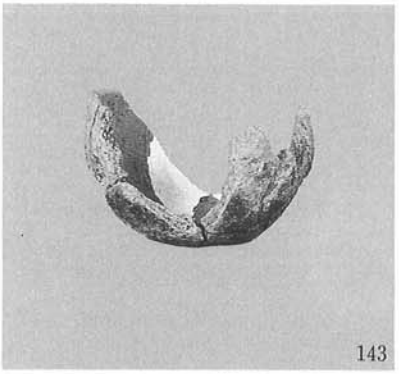

139

140

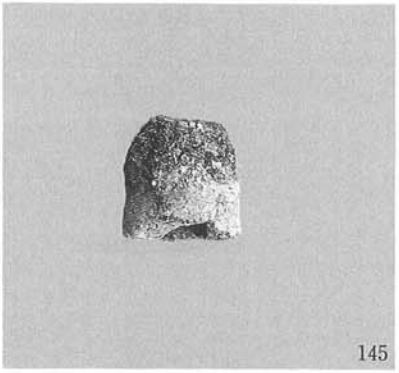
柱穴出土土器②

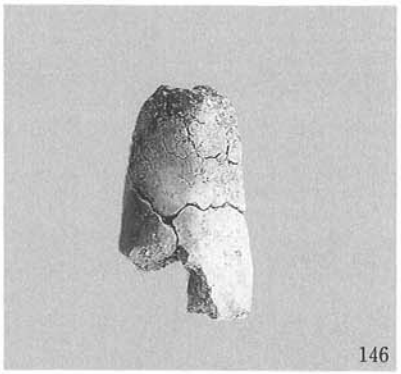

141

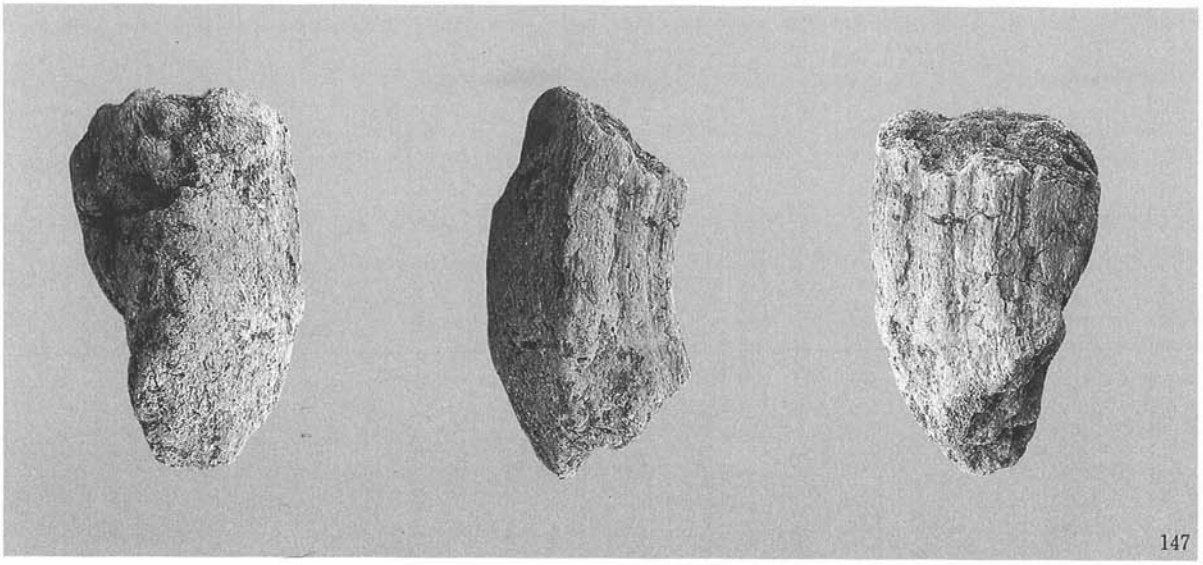

142


143

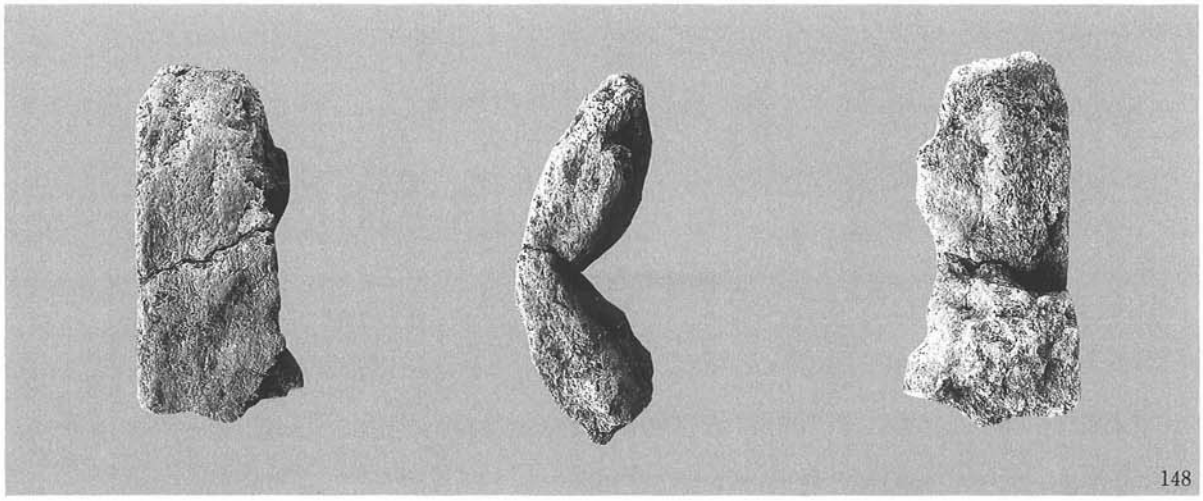
144


145

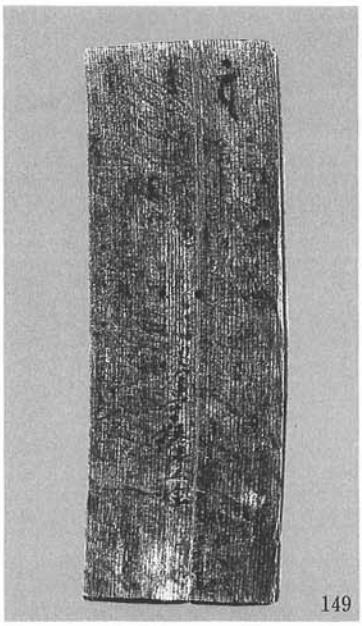

146

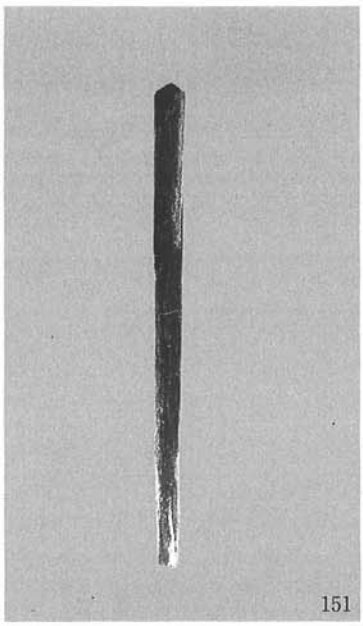

147

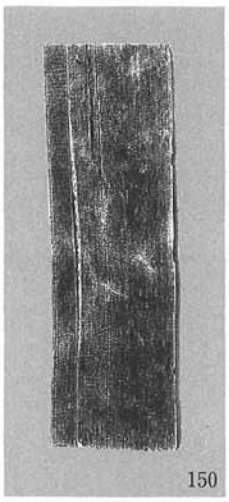
ＳＫ27・33・36　ＳＥ５出土土製品

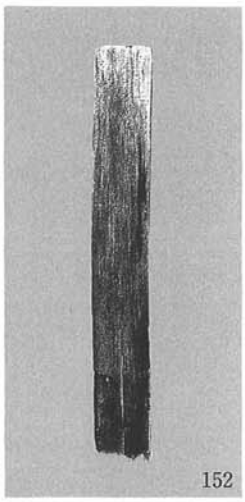


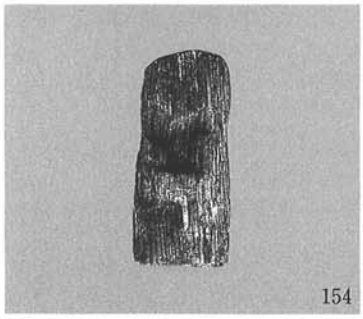
ＳＫ27出土土製品

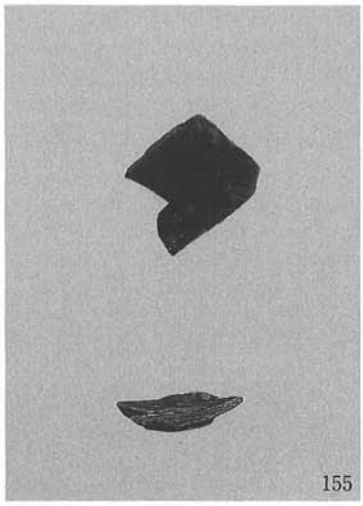


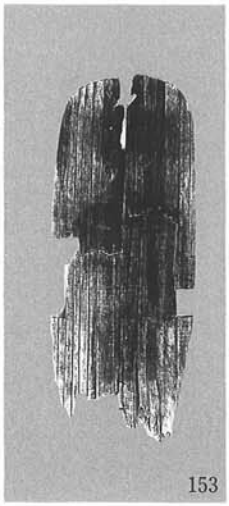


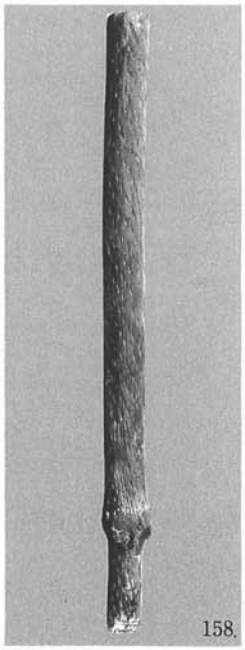


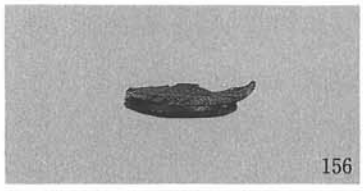


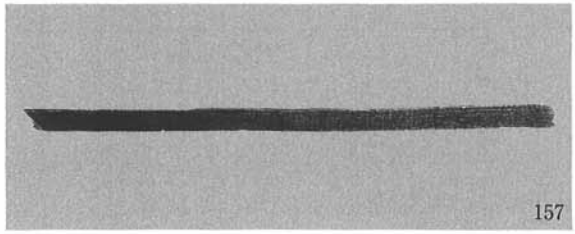




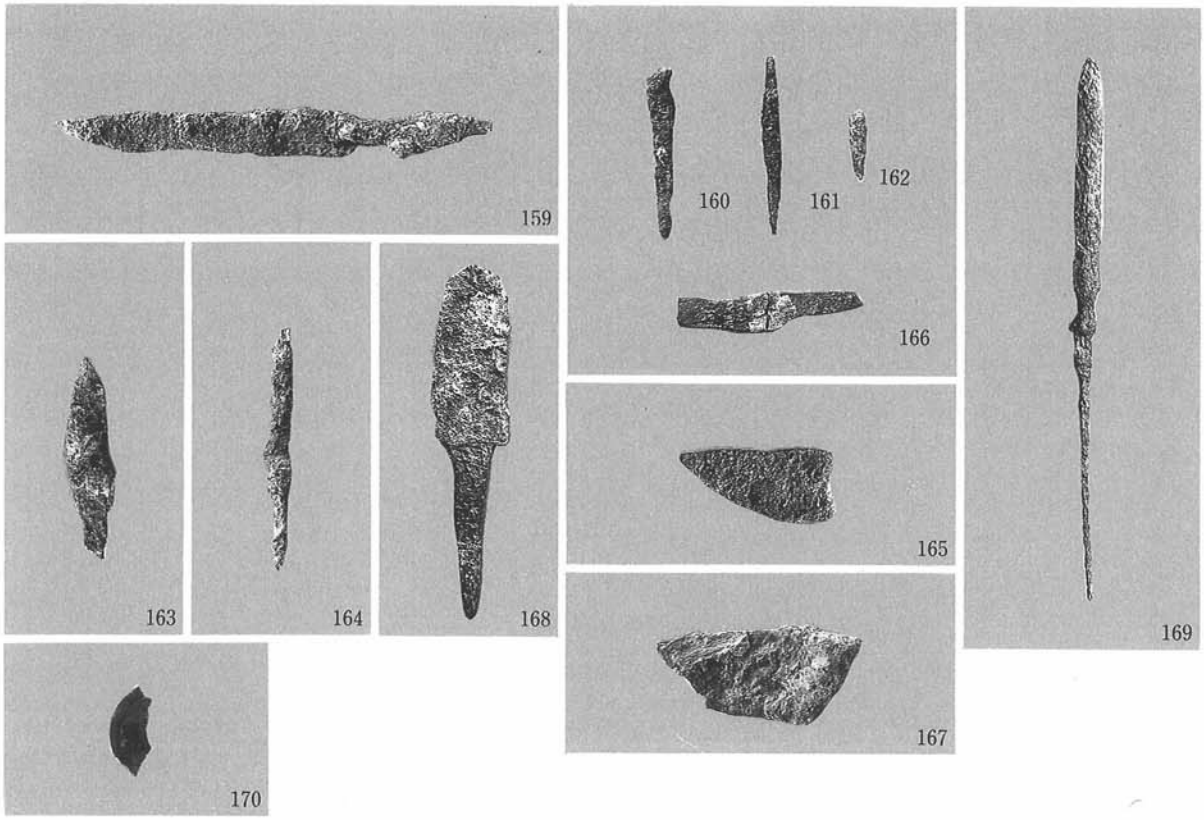




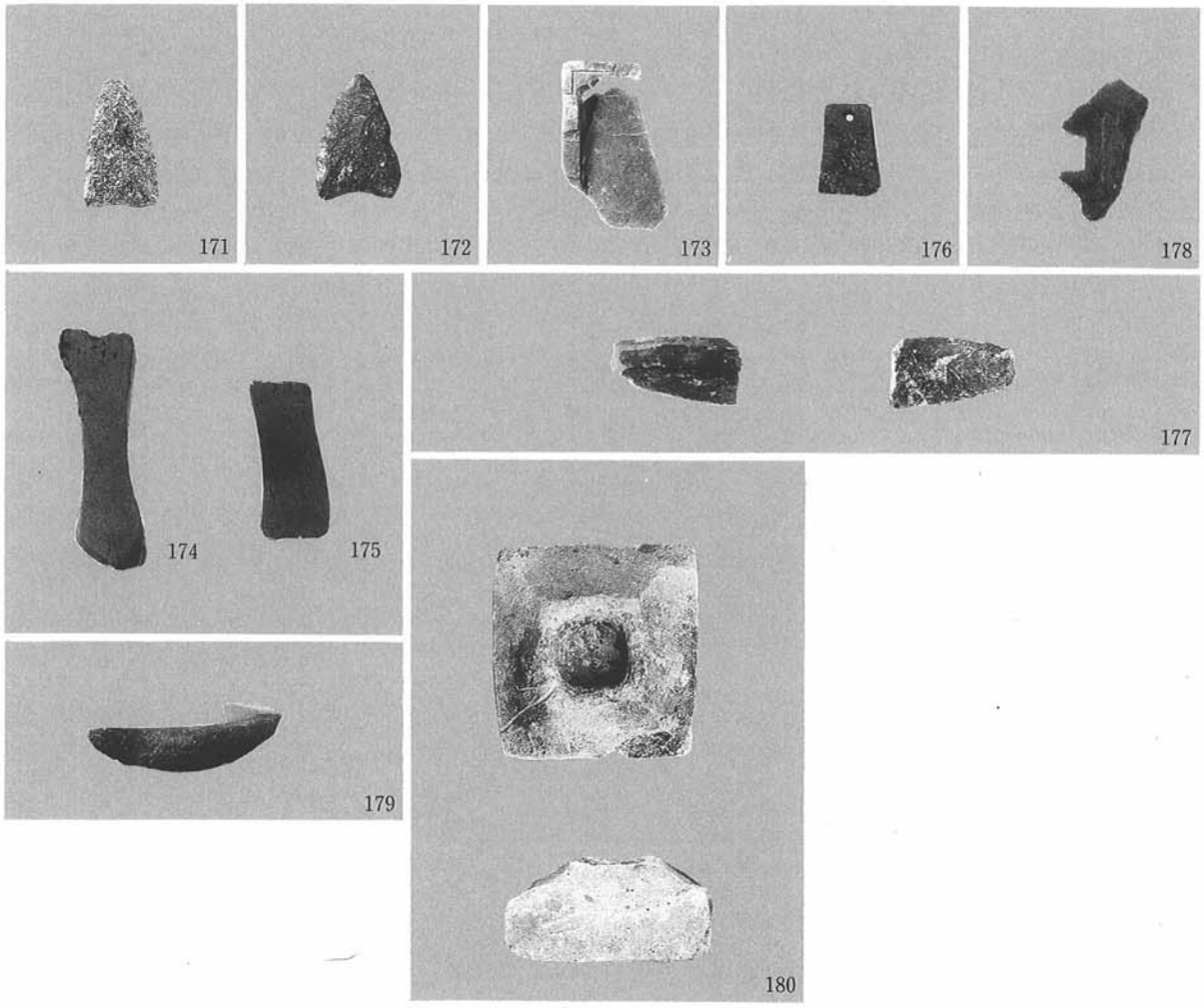




ＳＥ２・３・４・５・７出土木製品



ＳＫ２・４・21・32　ＳＥ１　ＳＤ５・６　ＳＴ１出土金属製品



ＳＫ32　ＳＥ４・５・６・７　ＳＤ５　柱穴出土石製品

報告書抄録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせきⅤ
書名	東禅寺・黒山遺跡Ⅴ
副書名	平成11年度南若川一般河川改修・２級工事に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第21集
編集著者名	西田　宏　村崎　賢一
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町３番22号　TEL　083-923-1060
発行年月日	西暦2000年３月24日　（平成12年３月24日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
東禅寺（とうぜんじ）・ 黒山遺跡Ⅴ（くろやまいせき）	山口県山口市（やまぐちけんやまぐちし） 大字鋳銭司（おおあざすぜんじ） 字大円（あざおおえん）	05203		34°4′36″	130°55′35″	19990506 ～ 19991022	2,400	南若川一般河川改修・２級工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・黒山遺跡Ⅴ	集落跡	平安時代 ～ 室町時代	掘立柱建物　59棟 土坑　38基 井戸　７基 溝　19条 埋葬遺構　１基 炉　１基 柱穴　約1,600個	土師器、緑釉陶器黒色土器、須恵器磁器、坩堝、鞴羽口、炉壁の一部、鉄製品（刀子、鉄鏃、釘など）、木製品（草履状木製品、呪符木簡など）	周防鋳銭司に関連すると考えられる生産遺跡

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第21集

東禅寺・黒山遺跡Ⅴ

—平成11年度南若川一般河川改修・２級工事に伴う発掘調査報告—

2000年３月

編集・発行　財団法人　山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
（〒753-0073 山口市春日町３番22号）

印　　刷　児玉印刷株式会社
（宇部市明神町３丁目４番３号）